
In The Material ?

音十 充実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

In The Material ?

【Z-コード】

Z2600M

【作者名】

音十 充実

【あらすじ】

何だこれは……。俺がやったのか？

主人公の中学校での表の顔と、部隊での裏の顔。

本当は能力は凄くてもそれを隠し通す！

この世の原理？物理？なにそれ？

そんなの関係なし。この世の物理に逆らいまくる能力。

なので一応核でも死なない能力？

ほんの少しだけ禁書を参考にさせてもらっていますが、

あくまで参考なので設定とか能力名とかは自分で1から考えました。

全登場人物能力表は、投稿した日までのものなので、あしからず。

……主人公義手も入りました！

R15指定追加は、念のためです。（今更）

世界観（前書き）

これが私の初めての小説！
お気に召すかどうか……。

世界観

2012年の第三次世界大戦が起きてから21年。

人々は世界政府を作り、ようやく平和への道を歩み始めた……。

しかし、終戦直後より奇怪な噂と、それと連動して様々な事件が起きた。

人々は、所謂、神の啓示を受けた者たちがこれらを引き起こしていると噂した。

事件の中には普通の人間には到底不可能な、異形の者でしか為せない物もあつたからである。

人々は神の啓示を受けた者達を畏怖の念を込めてこう呼んだ。

能力者と……。その謂れは、人の身から外れた能力を持つことを意味する。

彼らの中にはその、人の身に余る力で新たなる争いを無限に生み出す者もいた。

能力には上限が無く、その発生源も不明。

世界政府は能力による新たな戦争を恐れて手を打つた。

人間との共存の姿勢を表す能力者達を中心にして集めた、対能力者用の能力者部隊。

その部隊の発案者であり、総隊長である者の能力の名前から取られた部隊名。

それが、正式名称、世界政府直属対追放者処理特殊部隊。 通称

”UnInsta11”

これらの仕事は能力犯罪者の駆逐と、未だ発見されていない能力者の保護である。

そして世界のあらゆる国の国際都市には、その国の国籍を持つ能力者を集めた、
高層ビルが密集した特殊地域がある。

そこに集められた、または連れてこられた能力者達は、必要があれば再教育しなおされ、
そして訓練し、将来の”Uninstall”部隊の隊員として送られる。

その場所は人々からこう呼ばれた。

『HEAVEN』と

世界観（後書き）

文才などとこいつモノは知らない輩ですが、どうぞよろしくお願ひします。

第一話 非、日常（前書き）

第一話、丁度良い長文がわからなくて困りますね……。

第一話 非、日常

これは何だ？ と俺は心の中で反芻する。ここは路地裏。時代の変化についていけない犯罪者や、世間を嫌う不良達がいる場所。

今、俺の目の前にはナイフを持った大柄な男がいる。こちらにジリジリと近づいてきている。

その男の口は、狂喜のあまり裂けたように横に広がり裂けている。

そり、まるで猛獸が久しぶりの獲物を見つけた時のような……。

その顔を見た瞬間、俺は恐怖に駆られた。

(やばい……ここはマジでヤバイ！ ！)

少年の本能がそう告げる。

そう思った瞬間、男はこちらに走ってきた！

身の危険を更に感じた俺は必死になつて逃げようと、男に背を向けて今までに無いスピードで駆けていく。

が、相手は予想以上に素早かつた。

まるで小鹿が虎に追いかけられている様にジワジワと、しかしここは路地裏。途端に追いつかれてしまう。

そして肩に見たこともない変なナーフが通り、激痛が走る！

「こ、これ……ぐ、ぐ……」

今まで感じた事の無い痛みが少年を襲い、悲鳴もあげられなによつだ。

そして男はおもむりにナイフを少年の首元に……

(俺は死ぬのか?)

少年はもう諦めかけていた。もうここと、心のどこかでそう思つていた。
そして言ひ。

「あの時の約束も守れずに……」

つい呟いたその言葉に疑問を抱く。

「なんだ?……約束?」

少年は思い出さうとする。記憶の底にあつたそれを見つけた時、何か……。

「そうだ! なぜ忘れてた? あの約束が……まだ俺は……まだ!」

男は咳く少年を見て、氣でも違つたのかと嘲笑する。

「まだ俺は死ねない! あの約束を守るためなら、何だつてすると決めたのに……!」

少年は覚悟を決めた。

もう迷わない。

もう諦めない。

絶対に、だ。

「死ねない……俺はまだ死ねない……死ぬわけにはいかない。
…………その為に、お前は死んでくれ……」

少年は叫び続けた直後、何かが吹っ切れたような雰囲気で男のもとへ歩く。

他ならぬ自分の足で。

瞬間、少年は男に飛び掛っていた。男の顔が驚きに包まれる。男は咄嗟のことに口走る。

「まさか、テメエも……」

俺は男の言葉の意味も考えず、いや、考えようとしなかった。

俺の脳が薄々感づいていたからかもしれないが、その思考を早々に切つて捨てた。

そして、未だ驚いて動けない男の隙だらけの首をつかんで……。

俺は腕にありつたけの力を込めて……解き放つた!!

その時、俺の頭の中で何かが弾けた……。

脳裏に瞬間的に浮かぶのは人々の恐怖、恐怖の眼差しと、こちらを優しく見てくれる紅い2つの瞳……。

そして

突如、悲鳴がこだまする。しかし、それは少年の悲鳴では無かつた。もつと低い、年齢を積んだ者の声。

では、誰の？ 少年はただただそこに呆然と立つてゐる。

今、自分がやつた事を顧みる。

思いつきり相手に飛び掛ったあの記憶が無い。だが何をしてしまったかは、分かる。

前を見る。

少年の足元に何かか転がっている。いや、融けていると言つた方がいいか。

最初、少年はそれが何かわからなかつた。

そこには、ただただ恐怖と驚きに目を見開いたまま、首や腹や、体のあちこちが、文字通り融けてしまつてゐる肉塊があつた。

周りには銀色に輝くナイフと、

さうにはそのスキマから赤黒く細長い固形物が……。

「う……わ……」

途端、俺は吐きそうになつた。しかしそれを必死に我慢する。

そしてもう一度惨状を見て

初めて見るその残酷な光景に

そしてそれを見て、あまり心が揺らかない自分は恐怖じ
籠はうの湯から逃げら様二三り云つて。

徳はその地から遠出する様に云ひ云々

それを紅い瞳に見られている」とも知らず……。

俺は走りながら、まだ落ち着かない脳で考える。

なぜこんな事になってしまったのか、それは今日の朝に遡る。

「…………」

田覚まし時計の甲高い音が鳴る。

しかしその目覚まし時計が起こそうとする人は起きない。だが、時間が経つと音がどんどんその音量を大きくしていく。

そしてやっと。

「ひるやこ……」

直後、バチンと快音が鳴ると時計は役割を果たした。そして布団からソイツが起き上がった。

少年は眠そうに、欠伸をしながら、

「うう……ねむ……一一度寝決行？」
と呟く。

（いきなりだが俺、『御神 哀』は一応言つとくけど一人暮らしだし、女みたいな名前だけど女じゃない。

たまにこの顔と長い髪で女と間違えられるけれど。よし、自己紹介終了。あれ？ 誰に対してだっけ？）

理由も見つからないし、すぐめんどくさくなり、一一度寝を実行に移す。

結果……は言つまでも無いが、一応言つておひら。

一度寝をしたのは

昨日決めた「明日からは遅刻しないよ」つ目覚ましを超早く仕掛ける

！」

という、いかにも浅はかな案をけしかけたのが理由である。

ちなみに目覚めた時間は……

なかいはりか4を、みじかいはりか8と9の間を彷徨つていた。

「遅刻だ……」

俺は急いでビーバーの2次元女子よろしく、食パンを咥えて家を出た。

ちなみに俺は中校生なので最速移動方法は……すばり、自転車。

と、忙いでもなしが増すだけなので、叫んでみよう。
心中でだけ……。

(おーああああああああああああーーー)

そんなことを思いながら全速力で自転車を漕ぐ。

何分か経過

(学校に到着。さあ問題の判定写真を見てみましょ。)

もちろん眞などないが。

ちなみに朝つとエラは8時30分に始まる。今の時間は……8時40分……

俺は冷や汗をたらしながら誰にも出くわさないことを祈った。

俺は急ぎ足で教室に向かつて、途中の廊下で人に軽くぶつかった。

「おー……思いつきり遅刻だぞ御神！ 中一にもなつて10分遅れか！」

「……今まん前にいるのは担任だ。時間につるそいやつ……。俺は説教に付き合わされる前に謝罪の意を表明し、教室へ逃げ込んだ。

教室はもちろんHRが終わつていてザワザワしていた。俺は普通に自分の席についた。

だが誰も気にかけない。

(ビデオ)

と思いながらも仕方のない事だと思つ。

昔から思つたことは、ムカつくことだけ直ぐ相手にいつたり、なのに褒め言葉とかは言えないし。

自分の心に逃げ込みがちな性格で、友達はいない。もう中2なのに。女と間違えられると無言で相手を潰すし、やっぱ嫌われてるな。

そう思つてみると、1限目のチャイムがなる。

授業が始まつても暇過ぎるし、いつも寝るけど先生方はもうこれを

諦めてうつしやる。

しかしあつぱ今日も寝た。

そしてやつと毎のチャイムが鳴り響く……。

俺は適当に学食で買ったパンを食いながら、誰も来ない屋上で近頃のことについて考えた。

（なんか近頃物騒だよなー。なんだっけ？ あの世界が認知している能力…………だっけか？

あれの犯罪者がこっち側にいるって言うけど、実感わからねーな。…………あーいうのがあれば俺も変われるのかな？ まつ、馬鹿なこと考えないほうがいいよな。どうせ俺には関係無いし。）

そう、この時少年自身も知る由が無かった。
まさか自分がそんな非日常に首を突っ込む事にならうとは……。

午後の授業が終わり、俺は早々に帰る。もちろん独り一人で。独りとか言つたな！ 空しさ100倍だから。

途中、なぜか俺を女と勘違いしてきてナンパしてきた不良。ムカつくから潰したら、路地裏からワラワラと湧いてくるよ。お仲間が、その数ざつと、12人。…………575か・ん・せ・い！

（めんどくせつ）

もちろん、1人ならともかく12人とやつ合つ根性は俺には無い。

1対12とか、どんな羞恥プレイだよー

「逃げるが勝ち！」

俺は、律儀にも他人を巻き込まないように、路地裏に逃げ込んだ。偉いだろ。

しばらく走りまくった。

路地裏は多少入り組んでるので逃げ切れるだらうと鷹をくくっていたのが間違った。

よく考えれば相手はここ一帯をしきる不良達だ。特に路地裏などに逃げ込めば相手の思つ壺ではないか。すぐ考えつかなかつた自分に苛立ちを覚える。

今、俺の前と後ろにはさつきの奴らがいる。そつ、『一寧にも遠回りしてきた奴らと後ろから走つてくる奴らに挟まれたのだ。

（クソツ、俺は男に犯される趣味はねえつづのー）

そんな事を考えていると、不意に不良達の目線が空に釘付けになる。何事かと俺も空を見ると、いきなり隣のビルの屋上から、そこら辺のへタな格闘家よりでかい大男が飛び降りてきた。凄い砂埃が舞つて視界が狭まる。

（おーおいー 何が起こつた？ あいつ人間かよー）

4階建てのビルの屋上から地面にダイブしてきた男を見てそう思つた。

しかし、砂埃が無くなつてくると、異変に気づいた。

音がしない。不良達が1人残らずこの場を立ち去つていた。

そして男がおもむろにこちらを向く。

その顔は…………狂喜に歪んでいた。

今、少年の目の前にはナイフを持った大柄な男がいる。こちらにジリジリと近づいてくる。

その男の口は、狂喜のあまり融けたように横に広がり裂けている。

「くくくくくけかかつ！」

そう、まるで猛獸が久しぶりの獲物を見つけた時のような……。

（やばい…………こいつはマジでヤバイ……）

少年の本能がそう告げる。

そう思つた瞬間、男は少年めがけて走つてきた！

（絶対に捕まっちゃいけない！　あれはそういうモノだ！　考えるな！）

身の危険を更に感じた少年は

必死になつて逃げようと、男に背を向けて今までに無いスピードで駆けていく。

が、相手は予想以上に素早かつた。

まるで小鹿が虎に追いかけられている様にジワジワと追いつかれてしまう。

そして肩に見たこともない変なナニカが少年の肩に通つた。

「ごぎい……ぐい……」

今まで感じた事の無い痛みが少年を襲い、悲鳴もあげられないようだ。

そして男はおもむりにナイフを少年の首元に……

(俺は死ぬのか?)

少年はもう諦めかけていた。もういいと、心のどけでそう思つていた。

そして言つ。

「あの時の約束も守れずに……」

「なんだ?……約束?」

少年は思つ出さうとする。記憶の底にあつたそれを見つけた時、何か……。

「やつだ! なぜ忘れてた? あの約束が……まだ俺は……駄だ!」

男は啞く少年を見て、氣でも違つたのかと嘲笑する。

「まだ俺は死ねない！　あの約束を守るためなら、何だつてすると
決めたのに…………！」

「死ねない……俺はまだ死ねない……死ぬわけにはいかない。
その為に、お前は死んでくれ……」

少年は叫び続けた直後、何かが吹っ切れたような雰囲気で男のもとへ歩く。

他ならぬ自分の足で。

瞬間、少年は男に飛び掛っていた。男の顔が驚きに包まれる。男は咄嗟のことに口走る。

「まさか、テメエも追放 S.....」

俺は腕にありつたけの力を込めて……解き放つた！！

その時、俺の頭の中で何かが弾けた…………。

脳裏に瞬間的に浮かぶのは人々の恐怖、畏怖の眼差しと、こちらを優しく見てくれる紅い2つの瞳……。

もっと低い、年齢を積んだ者の声。

では、誰の？ 少年はただただそこに呆然と立つている。

少年の足元に何かが転がっている。いや、融けていると言つた方が良いか。

最初、少年はそれが何かわからなかつた。

そこには、ただただ恐怖と驚きに目を見開いたまま、首や腹や、体のあちこちが、文字通り融けてしまつてゐる肉塊があつた。

周囲には銀色に輝くナイフと、

そして肉体の一部であつたはずのドロドロとした肌色の泥沼と、さらにはそのスキマから赤黒く細長い固体物が……。

少年はその場から逃げる様に走り去つた。

所変わつて、ここは屋上。

御神 アイツ 哀のやつた事が全部見えてる場所。

私は携帯をとつて総隊長に報告する。

「見つけました。久々の保護対象です。」

総隊長と呼ばれた電話の相手は言ひつ。

「？ 紫、たのしそうだね。何かあつたの？」

紫と呼ばれた少女は答える。

「いえ、何も。それでは、一時帰還します。」

「ああ、分かつた。」

私は携帯をしまう。

今、私は笑っているのだろう。だつて……

「久しぶりだね……アイ。」

第一話 非、日常（後書き）

更新は不定期ですが、なるべく早くしたいと思します。

第一話 引越し（前書き）

第一話投稿。

また滅茶苦茶だし一話に比べて半端なく短い。

第一話 引越し

俺は走っていた。

必死になつて走っていた。

ネオンが照らす街中をずっと走った。

……どこにだつて？ 家に決まつてゐるだろ！

何でだらう……。

人を殺したのに、初めて殺してしまつたのに
何で何も感じないんだ！ どうしたんだよ俺……。

（俺は……何をした？ あれは何だつたんだ？）

俺は、さつき見た光景が未だにこの世のモノとは思えない。

それはあまりにも残虐で、俺だつて信じたくない。

あれは何だつたのか、本当に俺がやつたのかと考へていたが、
その思考は最後まで続かなかつた。

なぜなら……

家に向かつて走る俺の前、視線の先に
警察とも、はたまた軍隊ともとれない怪しげな制服……
もとい軍服を着た、奴等ヤツラがいた。

（なんだ？ あんなの見たことねーぞ）

そう思つてゐると、突然奴等^{ヤシラ}が一斉に動き出した。

その統制^{ハカ}のとれた無駄の無い動き。

先程の不良どもとは比べ物にならない。

そして氣付くと、いつの間にか俺は取り囲まれていた。

本当に軍隊程の統率力と、警察程の機動力がある奴等だ。

俺を取り囲んだ奴等の一角が割れ、いかにもリーダーという雰囲気を纏つた人が前にでてきた。

「あなたが保護対象^{セイバ}?」

「…………は?」

ちょっと驚きすぎで変な声だしちまった。

勿論『保護対象^{セイバ}』という言葉の意味も分からぬが、何より驚いたのが

（女だつたんだ……）

といつゝこと。

どつかの特殊部隊のマスクをしてたから分からなかつた。

「……何か失礼な事考へてるでしょ。」

「いつ……いえいえ何も!」

一瞬でも放たれたどす黒い殺氣に当たられ、背筋が寒くなる。

(句)「こつー 勘良過^{カヨハ}ーー」

(つーカリーダー＝男だと思つてたよ俺！ なんて事を
してしまったんだ！ よく見れば分かつた事なのにー。
俺のバカー！）

何か自暴自棄になりそつこ悶絶していた……。

と思つていると視界の端に、彼女らの制服（軍服？）の上腕部分に
あるマークを見つけた。

マークは、黒い羽の墮天使の片方の羽が風化しつつあるところ
なんか何処かで見たようなものだつた。

(なんだっけ？)

と記憶の中を探る。そして、見つけた。

そう、あのマークは、全世界で知らない者の居ない”*Coronet*
all” 部隊のものだつた。

……マジで？

「嘘だ——————！」

「いきなり何？ 気でもおかしくなつちやつた？」

彼女の言つことを無視して問う。

「もも、もしかして、あなたたちは……」

「ちょっと歎んじました。

すると予想通りの返答が返つてくる。

「さうよ。お察しの通り私たちは、かの有名な”U n i n s t a l l”部隊の人間よ」

「じゃあ、あなたは……」

「血口紹介がまだだつたわね。私は、”U n i n s t a l l”支援2隊隊長、佐屋紫よ。

久しぶりねアイ。」

そう言つて、マスクをとる。

その下にあつた素顔は…………一言で言つならば、美人だつた。街を歩けば10人に10人が振り向きそうな容姿。少しの間、見とれていた。

(つて、なんか違う！ なんだ久しぶりつて？)

「あの、俺に会つたことがあるんですか？」

俺がそう言つと、彼女は「えつ……そつ、やつぱり」とか言つて悲しい顔をしたがやはり俺には検討がつかない。

何か空気が微妙に重くなつてきたので、この場面を切り抜けようと真面目になつて本題に入る。

「それで、その支援隊長サンが何の用ですか？」

「紫でいいわ。何が目的かとくじらうと、端的に言つわ。あなた、御神 哀は明日から『HEAVEN』で働いてもらいます。言い訳はできないわよ。あなたが『追放者』としての能力に目覚めたのは

私が目撃しているわ

俺は一気に捲し立てられて、もう逃げ道が無いことを悟つた。もう、諦めよう。

「分かり……ました。俺は元々こじらには何の未練もありませんし新しい自分を受け入れることにします」

「へえ、もつと抵抗があると思っていたのに意外と順応性が高いのね」

「数少ない取り柄のひとつですか」

「分かったわ。明日、朝8時にそつちに迎えにいくから。それと、元の中学校の退学手続きもしどくから大丈夫よ」

「ありがとうございます」

そして、紫さんは部下2人を俺の家までの護衛としてつけて、夜の闇にまぎれて行つた。

その後、家について2人に礼をして、家の片付けを始めた。

なぜか不本意に承諾したはずなのに、俺の心はまるで旅行の前日のように嬉しく感じていた。

第一話 引越し（後書き）

今回も駄文でしたが、これから私は進化する……はず。

登場人物紹介（能力は秘密）（前書き）

「……」で能力を出すより後々出すほうがいいと思つんで
……自己紹介なのにな。

登場人物紹介（能力は秘密）

哀、紫の紹介。

主人公、御神 ミカミ 哀 アイ

身長171cm 体重55kg

面倒くさがり屋で内心いろいろ文句言つてる。

その長髪と端整な顔と名前で、よく女と間違えられる。

『HEAVEN』の学校では、能力の秘匿性が最上級なので能力の一部

を使って違う能力に見せる。

武器は無い。いつも素手なので、初見の相手にはよく馬鹿にされる。

能力暴走時は残虐な思考に支配される。

その能力暴走で、ある能力犯罪者を殺す。これによつて、

『HEAVEN』行きとなり、いきなり部隊に配属される。

佐屋 紫サヤ ゴカリ

身長170cm 体重「言つたら殺す」

ちょっとクールだが、優しいところも? (哀限定)
能力を使って相手を苦しめるのが好きな?。

”UnInsta11”部隊の、支援2隊隊長だが、主人公が
中学に入るときに、お目付け役としてちやつかり入学。実は同じ年。
能力は垂れ流しなので、制御するために常に手袋着用。

能力は、生まれた時から持つていて、幼いころから『HEAVEN』
にいる。

小さい頃の哀を知っているような口ぶりだが……?

登場人物紹介（能力は秘密）（後書き）

能力の内容は言つてないのにその
内容をほのめかす。まさに生殺し状態。
……すみません。次かその次で能力であるはずですから。

第三話 俺の能力（前書き）

また滅茶苦茶に……。

第三話 僕の能力

今は朝。さすがに今回ばかりは寝坊もできない。
迎えが来るまであと少し。

「 もう一回の日常とさせよならか……」

いけね、何か急に感傷に浸つてきた。

嗚呼、脳裏にある思い出……

女と間違えられて相手を潰した日。

女と間違われて不良に追いかけられた日。
バカ

そのせいで皆から怖がられた日々。

碌な思い出がねえ……。

あれ？ 目から何かが出てくるよ。

いや、忘れる！ 明日からの新たな日々を手指してー

「ファイトーオオーーーー！」

「…………お取り込み中失礼…………」

「 つまつ、 いつの間にー！」

叫んでいて気付かなかつたが、いつの間にか正面に
紫さんがいた。

「あの～いつから？」

「 もうこの日常とは、のとこから」

「最初つからじゃないすか！」

「……それでもう行けるんですか？」

恥ずかしかつたから話を逸らしようと。

「ええ。これから『HEAVEN』の日本支部に向かいます」

「支部？ ああそつか、本部はアメリカだっけ……」

そり、『HEAVEN』の始まりはアメリカだ。そこから派生して全世界の『HEAVEN』があるというわけだ。ちなみに、本部はアメリカなのに

初めて発見された人類に協力する能力者が日本人らしい。だから、世界のどこに行つても部隊名は”UnInstall”だ。

「じゃあ行きましょうか」

「はい」

俺と紫さんが家を出ると、一台のリムジンが止まっていた。

「……あの、これで行くんですか？」

すると紫さんがさも当然のよつこ、

「当たり前じやない。『^{セイバ}保護対象を本部に送る時あくまで丁重に』が隊長の指示だもの」

「は……はあ」

俺は黙つてリムジンに乗る。内装すげえ！
そう思つていると車が出発した。

「あの、隊長つて言いましたよね？」

「ええ、そうよ、私の隊長、つまり総隊長のことね
そこで俺は疑問を持った。

「あの、総隊長つてどんな人なんですか？」

「 「 …… 」 「 …… 」 「 …… 」

直後、沈黙が流れた。

（やばつー。俺なんか悪いこと言つたか？）

「……クスツ」

「え？」

（何で？ 何で笑われてるの？）

「総隊長を知らない人なんて始めて知ったわ。
……いいわ、説明してあげる。」

総隊長は、かの有名な能力者。

彼が初の人類に協力した能力者。全世界の”UnInstall”

(まさかまさか! この流れはまさか!)

「 そ、あの伝説の能力者。『無骸零』よ。
その能力、『完全削除』から部隊名が取られているわ 」

「わっ、やつぱ驚いた？」

「そりや驚きますよ……やつは強いんですね？」

「まあ、私の能力は攻撃に向いてないとは言え、勝負にならないわね」

「？ 紫さんの能力って？」

「それは後のお楽しみ。あと、”さん”はつけなくていいわよ。」
「同じ年だし」

「はあ――――――!?

それで、話が終わって、俺は驚き疲れたから寝た。

「…………きて。…………て」

うん？ 誰だ？ この声は確か…

「起きて…」

「うわあ！ 紫！ そんな大きな声出さなくてモー！」

「だつてあなたが起きなかつたから……
まあ、それはともかく着いたわよー！」

俺は車を降りた。

そこに広がっていたのは、まさしく天国だった。

俺がもと居た街とは比べ物にならないほど
清潔感のある町並み。綺麗の整備されてヒビ一つ入っていない道路。
そして楽しそうに歩く制服を着た生徒達。

「すつげえ……」

「わつ？ まあ外と比べたら良いところだけね。

それより、早く行きましょ。まずはあなたがどんな能力が調べなき
やいけないし」

「ああ……分かつた」

俺は町並みに田を奪われながらも歩き出した。

10分ほど歩くと、部隊の本部らしき場所に着いた。

「 こ こ が ” U n i n s t a l l ” 部隊日本支部よ！
早速だけど、この街で暮らすには、まず能力を測るわ。
ランク付けがあつて、上から
S > A > B > C > D > E > F

「ランクが高いと何かあるのか？」

「高リラック保持者ほど、生活支援金が沢山貰えるわ。
支援金は、最低のFランク保持者でも最低限生活できる額よ。
つまり、暮らしを楽しみたかったら、ランク上げをがんばるのね」

「よし、俺も頑張るぞ！」

「ふふ、その氣よ」

「……でも、まだ、な能力を調べられたいのです。」

「ああ」

ରାଜବିଜ୍ଞାନ

部屋に入ると、受け付けと、奥にまた扉があつた。

「ちょっと録りたいんだけど」

紫が受け付けのお姉さんに言つ。

「はい。後ろの方が御神 哀様ですね。

それでは、奥の部屋へどうぞ」

俺と紫は奥の部屋に入った。

そこは、100m×100mぐらいあるだだつ広い空間だった。

すると放送が聞こえる。

『では、皿の前にある岩に触れて能力を使ってみてください』

「ん? いつの間にか岩が!」

「ああ、これは転送システムね。空間干渉系の能力者のメカニズムを利用したものよ。

そんなことは良いから、能力使ってみて。

岩にふれて、こう、なんと言うか心の中の第一の皿を開くような感じで?』

「ああ、分かった。やってみる

俺は紫のアドバイス通りに、岩に触れて集中してみると、蒼い光が岩全体を覆つ。

その瞬間、岩は、その、なんと言つか.....

岩が粉々になり、砂になつた……。

その時、紫と俺は呟いた。

「「嘘……」」

第四話 俺の能力……の正体（前書き）

なんか短いですねやっぱ。
やつと能力が出てきます。

第四話 僕の能力……の正体

「「嘘……」」

しばらく部屋内に沈黙が流れた。

放送を流していた受付のお姉さんにも「ひらは見えてこるのだろう。向こう側からは何も聞こえない。

「「」」」」」」

最初に沈黙を破ったのは、紫だった。

「ちよっと、あなた何をやつたの？」

「いや、だから、その、紫にアドバイスされたように集中して能力を使おうとしただけだけど……」

いや、俺は本当にそれしかしていないのだが……
はつきりいって俺は無自覚だ。俺は無実だ！

「……まあ、まずはこの指をどうするかだけど。

知ってる？」この指つて実は能力測定用に、極めて人工的な素材で強力にできてるの。

結構なお値段だと思つわよ。何しろ『HEAVEN』内だけの技術だからね

「」

その言葉を聞いた瞬間、俺の精神はフリーズした。

「？ おおーーーい！ 大丈夫？」

紫は話しかけるが反応が薄い。

「ははははは……弁償……」

そんなことを考えている俺に紫から救いの手が！

「あのーー、アイ？ もしかしたら、本当にもしかしたらだけど
あなたの能力で粉々になつたのなら、また元に戻せるんじゃないの
？」

「はあっ！ その手があつたっ！」

「えっ。ちょっと、まだできると決まつたわけじや……」

俺は紫が何か言つてゐるのを気にせず、元は瓶だったものに手で触
れ、集中した。

その瞬間、また蒼い光が包み込み、砂が輝く。
そして光が最高潮に達したとき、それは起つた。

「「は……？」」

また俺と紫が同時に眩ぐ。受付のお姉さんはもう
何かを諦めているようだ。

そこには……

液体があった。

今の一言では何も分からぬだろ？

詳しく説明すると、俺がさっきまで触れていた砂が茶褐色の液体になつてゐる。熱してもいのに、まるで無理矢理物質同士の結合を引き剥がしたような曖昧な液体。いや、粘体だろうか？

ともかく、言ひなれば固体と液体の真ん中ぐらいにある物質といふこと。

……多分。

「あなた……やつちやつたわね……」

紫に死の宣告をされたも同然の言葉を言われた。
その言葉に俺が悶絶して呻き声をあげていると、部屋の隅から誰かの言葉が聞こえた。

「ほひ。これはすうじじやないか。私でも始めて見る能力だ」

その声に紫は反応して、後ろに振り向く。

俺は紫の視線を追つてその方向を見ると、一人の男が立っていた。

(えつ、いつの間に?)

と俺が考えていると、紫が言った。

「えつ、あ、は？ あつ総隊長？」

「は……え……総隊長さん…………？！」

俺がつい大声を上げていると向こうから挨拶をしてきた。

「やあ、はじめまして。私が”Unicorn”部隊総隊長の無骸 零だ。

新入りくん。君が御神 哀君だね？」

「あつ……はい」

「あの、総隊長、どうして此処に？」

「ああ、仕事も一段落ついたので、久しぶりの登録者に興味を持つたんだよ」

「ん？ 俺ですか？」

俺がそう問うと、総隊長さんは、ああ、と黙つて話を続ける。

「君の能力を見せてもらつたよ。せつせつも言つたが、その能力は私でさえ見たことがない。

そこでだが……紫くん。君の能力の使用を許可する

紫の能力？ と俺が疑問に思つてゐると

紫が少し逡巡した顔を見せたが、こちらに來た。

「あなたの能力は未知数よ。機械が測定できない程に。能力の正体が分からないと、とても危険なので最後の手段として私の能力、『精神喰人^{マインドイーター}』をつかわせてもらいます」

「『精神喰人^{マインドイーター}』？」

俺がちょっと物騒な能力名に身震いしていると、

「大丈夫よ。ちょっとあなたの精神の奥深くまで行って能力の情報を引き出すから。

たとえ心がそれを認知していなくても、脳にはちゃんと情報が記録されてるの

紫が説明してくれた。俺の能力がどういったものか分からぬ今、紫の能力が必要だつた。

俺は決心した。

「頼むよ、紫」

「ええ、任せておいて。ちょっと気持ちは良くないかもしないから、我慢してね。

プライバシーの問題もあるし、なるべく他の情報は覗かないようにするから」

「じゃあ、よろしく」

そつぱりと、紫がいつも着けている手袋をはずす。

その手は紫の綺麗な肌よりも、もっと白っぽく見えた。

そしてその手が俺の腕に触れる……。

その瞬間、俺は何か体の中を這い回られている感覚を覚えた。
しかし紫の言つていた通り我慢する。

1分ぐらいだらうか？紫がおもむろに手を離す。

そうした途端、体の変化は収まる。

だが、紫は呆然と立ち去っている。

「おーい？ 紫？ おーい」

と紫に声をかけるとやつと戻ってきた。
それをずっと見ていた総隊長が口を開く。

「紫くん。報告を」

「あ……はい。

御神 哀の能力は、判定Sランク。その内訳

・攻撃範囲C ・攻撃威力SSS+ ・攻撃射程E

です。

能力の内容は……

この世に存在する全ての物質を粒子単位で自由自在に操作、変換できる能力。

(自分の皮膚か、身に着けている物に触れている物質限定)

……ありえない

それを聞いた総隊長さんと俺が沈黙する。

『なんですかって――――――――――――』

どうやら俺の能力はとんでもないシロモノらしい.....。

すると総隊長さんが言った。

御神くん、紫くん、そして君もこちについて来なさい

その中には受付のお姉さんも含まれていた。

俺たちと、緊張で口が開かないといった感じの
お姉さんは総隊長について行つて、第3会議室と書かれている所に
着いた。

隊長が中に入つていき、俺たちが後についていく。
そして総隊長さんがドアを閉め、話し始める。

「本人は勿論のこと、紫、それに君もこのことを知つてしまつた」

そこで俺は口を開く。

「何か問題が？」

「通常、判定内訳は確かに最高 SSS + だが、それ出したことなど歴史上一度も無いことだ。」のようなケースの場合、まずは機械の故障を

疑うが、今回は『精神喰人』^{マインドイーター}で調べたため結果は明らかだ。そして、その能力が本物だつたら、それは『HEAVEN』の最高機密に指定される。

そういう規則があるんだ。しかし、それを紫や一般人に知れてしまつた。

よつて、紫はしようがないが、そこの君にまじの事を忘れてもらひつ

そう総隊長さんが言つた瞬間にお姉さんは倒れた。

「えつ、総隊長さん、何を……」

「いや大丈夫。御神くんが来たときから今までの記憶を消しておいただけだ。

紫くん、その子を受付に座らせてきて。今は誰もいないから

「はい……よつと」

紫がお姉さんを抱えて外へ出て行つた。

「さてと、次は君だが、先程も言つたように君の能力は最高機密だ。通常、君には学校に行つてもらつた後に将来、部隊にはいるものだ。しかし君の能力は危険だし、最高機密だ。」ここに特例として現時点で部隊に入ることしてくれ。

拒否権はない。その能力の危険性は君にも分かるはずだ」

俺は言葉に詰まつた。総隊長さんの言つことは一理あつたからだ。

俺はしようがないと割り切つてその提案を受け入れることにした。

……元々拒否権などないのだが。

「……部隊に入るところとは、部隊全員に能力の正体が知れ渡るのですか？ それと、学校はどうすれば……？」

「まず、最高機密なので、能力の正体は最低でも大隊の隊長までにしか

知らされないから安心してくれ。

それと学校だが、その歳で行つてないといふことも不自然なので私としては行つてもらつて、任務がある場合にはこちらにきてくれればいい」

「……少し大変そうですが、こちらの学校にも興味はあるので学校には行つてみようと思います。でも、学校では能力の授業の時はどうすればいいのですか？」

「それは大丈夫だ。君は、測定の時こそ不安定だったが今では能力は本能のように使えるだろ。能力とは人に使い方を教えてもらうものではないからな。

学校では、君のその応用が利く能力を使って別の能力として隠し通してくれないか？」

「ちょっと難しそうだけど頑張つてみるか……。

「はい、分かりました。これからよろしくお願ひします」

そして俺は総隊長さんに言われて指定されたマンションに住むことになった。

学校は明日から転入生としていぐらしく。

その他諸々の内容は家に書類が置いてあるらしい。

そして俺は部屋を出て行くと、総隊長さんに呼び止められた。

「ああ、そうだ。君の行く学校には紫も通つているか?」

「ちいですか……つてええええええええ……」

なんかやつぱり驚く」といつぱいだ。

第四話 俺の能力……の正体（後書き）

なんか展開はやいですか？

それとも遅い？

次から学校に転入します。

主人公は何回女に間違われるでしょうか？

第五話 能力研究……B ヤ家（前書き）

毎日更新！

これからもやうであります！

第五話 能力研究……B Y家

俺は総隊長さんに教えられた住所に向かう。
もつ夕方だ。遠くでカラスの鳴き声が聞こえる……。

「はーーー疲れたーーー」

いや、本当に疲れたよ？

だつてさつきまで居たのは一応じゃなくとも”U n i n s t a t i

”部隊の総隊長

だつたし、俺はそこまで無神經じやないよ？

けどマンションってどんな所かなーー？

一人暮らしあはもう慣れてるけど、今まで一軒家だつたから。

はつ！ もしかしたらさつきの能力判定でU n i n s t a t i で出たから
高級マンションとか？ ありえるかも！
生活支援金もたつぱり出るつて言ひし、実力至上主義最高！

とか色々考えながら街中の道路を歩いていた。

そろそろ空が薄暗くなつてきたな。もうすぐか。

教えられた住所までもうすぐ着くといつ所で、ビルとビルの間の
路地裏から何か声が聞こえてきた。

「いやつー ちよつとやめてよー」

(ん？ 何か女子の声が……なんかヤバそつだな。
よし、ちよつと人助けに行きましょー！)

俺の主義。女の子は大切に。

俺がちよつと駆け足で路地裏に入ると視界に2人の男と1人の女の子がいた。

どうやらお約束らしいな……。

男は無理矢理女の子を夜の街へ連れて行こうとしている。

「おい、お前らの子を離せよ

俺が男達の背後から低い声で齧すと、男達は一瞬ビクッとするが、こっちを見るとすぐその下卑た笑みをほして、

「おいおい、まあたいい女見つけちゃったよー。」

とか抜かしやがる！

怒りゲージ20から55へ上昇……

するともう一人が、

「こいつも連れて行きましょうよ！

とか言っちゃってるよ。

完全に俺を女だと思つてゐらしいな。

怒りゲージ55から120オーバー。

ふちつ

もう許せんよ？当たり前じやん。

男を女と間違える者には死を

……

「ライ、テメエらわオルエをくわんゼンーオコラセたらしげな……」

みんな——！ 虐殺TIME始まるよ

10秒経過……

「ふうっ」

今俺の田の前にはさつきのバカどもがぼろ雑巾になってる。
俺が潰しといた。言ひとくけど俺は喧嘩強いよ?
けどこっちに来ても女と間違われるのはかわんねーな。
原因っぽい髪切らうかな……。

今の俺は男なのに髪が肩を普通に越えてる長さなのだ。それも絶対
原因の一つだ。

そんな事を考へていろといきなり後ろから話しかけられる。

「あのつ、あ、ありがとついでこました……」

さつき絡まれた女の子だ。つーか美少女だな。

その短い茶髪は、紫の黒くて長い髪とは違う綺麗さがあるし、
顔も間違いなく美少女と称される部類だ。

俺がそう思っていた次の瞬間、

「お姉さんー。」

その瞬間、俺の周りの空気が止まつた。
俺は全力で叫んだ。

「お、れ、は、女じや、ねえ————」

「えつ、あの、その、すみませんでした」

女の子は泣きそうになつてゐる。
それを見て、我に返つた。

「……すまん。怒鳴つて悪かつたな」

俺は恥ずかしむで胸がいつぱいなので、ちりと撤収しちゃう。

「じゃー！ そうこうでー！ 本当にぐあん！」

と言つて走る！

女の子が何か言おうとしているのが視界の端に映つたが、走る。
俺はマジで逃げた。

気付くと、せけに大きこマンションの所にきた。

「ここが俺の住むところか。いことじゅねーかー！」

無理にでもさつきの事を言へよ。

部屋に向かう。鍵はすでに渡されている。
このマンションは全部20階建てのようだ。

「えーと、俺の部屋は……最上階の部屋か

通常一階ずつには10個ほど部屋が並んでいて、どれもすごい広いのだが

最上階は部屋が3つしかない。その分どこかの5つ星ホテルのスイートのような部屋だ。

なんでも、部隊に入つていて、さらにランクSとなつた俺の所持金は凄いことになっているらしい。

部隊の給料は何もない月でも、毎月、7桁はあるし、Sランクの生活支援金がそれと同等の額なのだ。つーかもつ、"支援"じゃない。

……。

部屋に入つてみると（鍵はカードキー+指紋認証。指紋認証は初めて部屋入るときに登録した）

それはそれは……なんかもう言葉では言い表せないものだった。いい意味で。

話によれば「部屋+2L+D+K」らしい。ちなみに洋室。必要最低限の家具はもうあつた。

メインリビングのでかいテーブルの上には生活に必要となる、この街だけの

住居人証明書と能力証明書。それと真っ黒なクレジットカードがあつた。

「……こんな大事な物机の上に置いとくなよ

そんな独り言を呟きながら持つてきただ荷物……とは言つても、気に入つてる服とか

その他は下着とかだけだけど、をもつてきた。

俺は寝室へ向かった。そこには……キングサイズのベッドがあった。俺はその大きさに驚かされながらも荷物をどつかに投げてベッドに横になる。

（あ～あ。やつと終わつたあ。明日から学校とか言つてたけど制服は自由らしい。

最初の頃出回つた制服があつたらしいけど俺は私服でいいや。）

そして俺は寝ようとしたが、大事な事を忘れていた。

（やべえ……学校で使う能力何にしよう……）

ちなみに言つと、俺の能力は自分でも分かるとおり凄い応用が利く。一回使つたせいなのか、紫が言つた通りもう自分の体の一部として使える。

しかし、何でも操れる為、応用が利きすぎで、なににしようか迷つている。

俺の能力の欠点は、自分に触れていなければ使えないというもののせいで、確かに同じ物質なら間接でも遠くに使えるらしい。

たとえば。

俺 鉄 鉄その2を操れる……みたいな。

それで思い当たつた。

同じ物質なら間接的でも大丈夫で、それでいてこの地球のどこにでもある物質。

空気だ。

空気を操るにしようとしよう。そうすれば能力を隠しながらも

能力の大半を使つことになる。結構強そうだし。

俺はその考へに思い当たると、早速空気を操りつつ空中に手を伸ばす。

その瞬間、寝室の中の空気の流れが俺の手を中心回る。

それを肌で感じて、俺は満足した。

意外と簡単だな。

総隊長の話によれば、俺は1~2までの質量なら操れるらしい。

……空気1~2……なんてチート

よし、やつぱりひとつと制限して1~0.0~1.0までこいつ。

あんまり立ちはだくないし。

俺は田代ましをかけ、明日に期待を膨らませながら、寝間着に着替えて寝た。

第五話 能力研究……B ヨ家（後書き）

ちょっと短いですね。はい
わかっていますよ。

ついにヒロイーンが出揃いましたよ。

まあ、後の方は次に出でると感づんで。（多分）

第六話 学校へ！……の前に。（前書き）

ちょっと遅れましたね。

第六話 学校へ！…………の前。

朝…………うん、いい天氣だ。空は雲ひとつ無い。

え？ 寝坊しないのかつて…………こんな大事な日は寝坊しないから、さすがに。

けど、朝早く起きちゃつたな…………暇だな…………。

あつそつだ！ ちょっと能力の訓練しよつ。

……だつて学校で笑われんの嫌じやん？

俺はいつもの服（全身やけに黒が多い）に着替えると、朝飯を作ることにした。

今日はパンに、田玉焼きでいいや…………。

俺はさつと料理すると、さつとパンをほおばつて、田玉焼きを食つて

あらかじめ用意していた荷物をとり、家を出る。

まだ朝は早い。

昨日、この街について質問していたら、街中で許可なく能力を使つのは

厳罰ものらしい。

許可を特にどうなくともいい場所は学校か、部隊の演習場らしい。

そこで俺は部隊の演習場にいくことにした。

俺はエレベーターで1階に行き、自転車置き場で自転車に乗つた。

……なんで自転車があるのかは、俺が紫に連れて行かれる前に、これだけは持つて行きたいと頼んだら、俺とは別ルートでマンションに来たらしい。

ちなみに、『HEAVEN』の中は、外よりも科学技術が発展しているらしい。

だが、自転車や車、その他日用品はあまり変わらないそうだ。

俺は自転車をこいで部隊演習場に行つた。

10分位こぐと、昨日行つた日本支部の隣にある『テカイ建物』が目にはいった。

中はトレーニングの為だけに色々機材が置いてあるらしい。それと地下には能力訓練専用部屋がある。

能力判定の時の $100\text{m} \times 100\text{m}$ ぐらいの『テカイ部屋』だ。

なんでもその部屋の壁も同じようにあの岩からできているらしい。

……俺の能力じゃ練習できねえじやん！

はあ、しょうがないから空気を操るだけにしどくか…………。

そう考えながら、駐車場に入つていぐ。

建物に入ると（もう自由に部隊関係の建物は入つてもいいらしい）受付にいる人に

黒いカードを見せる。

この黒いカードは、昨日見たときはクレジットカードだと思つたがそれ以外にも部隊の証明証となるらしい。

このことは一般人には知られていない。

俺はエレベーターで地下2階のボタンを押す。エレベーターが降りる感触がする。

そしてすぐチーンと音が鳴つてドアが開く。

俺は降りて目の前にある部屋のドアを開ける。

その瞬間3人程の視線がこっちを向いた。

どうやら先客がいたらしい。

しかし俺はそれに構うことなく、部屋の奥に行つて荷物を壁際に投げて訓練を始めようとする。
しかし、いきなり後ろから声が聞こえる。

「おい、アイ」

「ん？ この声は……」

「なんだ紫か」

紫がいた。その後ろには2人の男がいる。
一方は熱血漢のような筋肉質な男で、もう一方がちょっと瘦せてる
紫や俺より
若い少年。

「なんだとはなんだ。アイも訓練か？」

「ああ、ちょっと朝早く起き過ぎたからな……
それよりお前どうしたんだ？ 学校は？」

「それを言うならアイも同じだろ？」

私は毎朝ここで訓練して基礎体力をつけてるんだ。
あつそうだ。後ろの2人を紹介しよう

すると後ろの2人がこちらへ来て、自己紹介してくる。

まずは筋肉質な男。いや漢？

「俺は突撃1隊隊長の飛驒^{ヒダネンカ} 燃故だ！
能力は『直線狂走』だ！」

お前さんが紫の話してた新入りか！
俺の事は飛驒さんとでも呼んでくれ！」

次に痩せ氣味な少年。

「僕は支援2隊隊員の佐屋 サヤアキラ 明です。

能力は『夢想破壊』シンキンクストップ です

僕は一応姉さん達の中で一番年下ですがよろしくお願ひします。
僕の『』とは明でいいです」

「俺は御神 哀。

能力は……まだ名前考へてない。

普通に呼べばいい。以上」

ちなみにAランク以上だと自分で能力名を命名するんだそうだ。
といひで……わざわざからなにか引っかかるよつな……あつ！

「今、姉さんって……」

すると明君は『』と叫んだ。

「ええ、あなたの言つ紫さんは僕の姉です」

「そつなのか……」

なるほど。紫には弟がいたのか……。
そう思つてみると、紫がいきなり『こんな』とを叫び出した。

「ア、もうすぐで訓練終わるけど、一回模擬線やらない？」

「……いいよ。俺は元々能力を練習するために来たんだし」

それに一回他の人と闘つてみたかったし。

「ということでお俺たちは能力を使った模擬戦をやることにした。なに? 危なくないかって? 」

大丈夫だよ。俺は空気を操る練習をするだけだし、それに向こうには3人もいるし……。

「ついて、ちょっと何でそつちに3人もいんの?」

普通2対2でしょ?」

すると紫が、

「私たちの能力はどれもあんまり戦闘には向いてないのよ。どつちかつて言つと能力を併用したことをかしつけて」とこかしつけて

「なるほど、だけど俺は能力を使わせてもらひや」

「当たり前よ。あなた、まだ近接戦闘できないでしょ。せいせい路地裏の喧嘩ぐらいだし」

ぐつ、なんかむかつくけど言い返せない。

「せ、とつとと始めようぜ」

と飛騨さんが言つてきたので俺達は戦闘態勢に入る。

「先攻はお前にくれてやるよ」

「いいんですか? そんな事言つて」

と俺は挑発しながらこの部屋内の空気を掌握していく。
途端、部屋内の空気の流れの向きや速さが大量の情報として頭に流れ込んでくる。

……これは、ちょっとしんどいな。

と考えつつも情報を整理し、能力を使う。

紫の言った、脳が能力の使い方を覚えてると聞いたのはこのことだらうか？

俺は先攻をくれてやると言った飛騨さんめがけて、まずは風速20mもの突風をくれてやる。

ちなみに風速20mは普通の台風ほどの風だ。

まあ、けど一応隊長クラスだし、問題ないだろ。

と思つていて飛騨さんの方に手を向けると、そこには飛騨さんは居なかつた。消えたのだ。

何もないところに突風が吹き、そのまま横にいる佐屋姉弟は風の余波で飛ばされないようにしている。

俺は視線を真正面に戻すと、そこには、飛騨さんがいた。

遠いとかじやなく、すぐ目と鼻の先に。

飛騨さんは俺が呆然としている隙に

俺の鳩尾めがけてパンチを繰り出してきた。

俺はそれをとつさに手で防御するが、

相手は結構な大男だ。

力が足りず吹き飛ばされてしまつ。

俺は受身を取り、体勢を戻す。

が、しかし、地面から顔を上げたその瞬間。

そこには、また真正面の田と鼻の先に、飛騨さんがいた。

俺はそのことにまたも驚き、防御の手を緩めてしまつ。が、攻撃せずに後ろへステップでひいた。

俺がなぜ?と考えるより早くその答えが帰ってきた。

俺は本能でその場から横へ飛んだ。

その瞬間、そこをパンチが通り過ぎる。

後ろを見ると、佐屋姉弟がいて、次々に攻撃を仕掛けてくる。

俺は紫のキックをかわす。

しかし、それに油断した俺は明に手のひらで触れられる。

そして、次の瞬間、俺は倒れた。

なにが起きたのか分からない。

俺は起きようともがくが、できない。

いや、分からないのだ。

その他は全て思考は普通なのに、まるで脳にある情報の中から『立つ、バランスをとる』という行為のやりかただけ切り取られたような、そんな感覚。

すると明の声が聞こえる。

「僕の能力は『夢想破壊^{シンキングストップ}』。これでも一応Aランクですから。

能力の効果は、この手のひらで触れた対象の『思考』を10秒だけ抜き取る能力です。

もうそろそろ立ち上がれますよ

そう言われたので立とつとしたら、あっさりと立てた。

「……すげえな。俺の完敗だよ」

俺は完璧に3人の連携にしてやられた。

能力などの問題ではない、単純に力量の差だった。
しかし、一つ腑に落ちない事がある。

「でも、飛騨さんの能力はなんだつたんだ？」

そうすると飛騨さんが答えてくれた。

「あれが俺の能力の『直線狂走』だ。
どういうものかは、ちょっと予想してみる」

「そういわれても……いきなり田の前に来たと思つたらパンチで
吹つ飛ばされて、そしたらまた田の前に居るし。
あれはなんだろう？」

そう考えるが、俺はやはり分からぬ。

「空間移動系能力ですか？」

すると飛騨さんは首を横に振る。

「なんで俺の能力を初見した奴はみんなそう言つのかね……。
俺の能力をあんな『逃げ』の能力と一緒にするなよ」

しかし空間移動系を『逃げ』とは、なんか飛騨さんらしい。
「俺の能力はな、自分のいる位置から直線上なら
最高の速度の走りができるつてやつだよ。そつときは時速80km
な」

滅茶苦茶な能力ばつかりだな」と思いつつ紫と学校に行く
準備もする。

「じゃあ、一緒に行くかー！」

「うん。じゃあ行くつか。」

俺と紫は飛驒さん挨拶して訓練場をでた。

第六話 学校へ！……の前に（後書き）

やつと戦闘がかけました。

初めてなんでなんか変なとこがあつたらいいってください。
ちなみにCQCは近接戦闘用体術みたいなものと
思つていただければ……。

第七話 学校（前書き）

やつと学校ですね。一応中学2年ですがちよつと大人っぽい所あるかも。全体的に。

第七話 学校

俺は今、訓練場を出て、自転車で学校に向かっている。

勿論、紫もいるよ？

本当は俺は自転車を手で押して、紫と歩いて学校に行こうとしたよ？
けどね、ちょっと訓練（という名の新人イジメ俺対象ver）が長
引いて学校に遅れる……。

おい！ どつかの君、早起きしたのにそれじゃ本末転倒だろ。
とか思つてんじゃねえ！

紫は自転車の後ろに座らせて急ぐ！

「アイー もうちょっと早くー。」

「まじよー これ以上無理だつてー。」

因みに、^{ヒツヒツ}と、後15分ぐらいでH.R.が始まるらしい。
紫の話だと、ここから天道中学とか言う所まで17分ぐらいいらしい。

やばいな……と俺が思つてると、紫が

「もう少し早くできないんだつたら、トラウマ見せるよ？」

と右手を見せる。

紫の能力の効果を思い出して背中が寒くなつた。

「すすすすみませーーんーーー。」

「分かればよーじー。」

俺は恐怖に耐え、必死になつて自転車を漕ぎまくつた。

自転車が今までの1・5倍ぐらいの速さになる中で俺は思った。

（ああ、火事場の馬鹿力つて本当にあるんだ……）と。

一生懸命漕いでいると学校が見えた。

校門らしき入り口の横には天道中学校と書いてあり
中は凄い広い。急いでる俺にもわかる。

視界の端に自転車置き場が見える。俺は勢いを殺さずに自転車から
紫と一緒に飛び降りた。

自転車はそのまま駐輪場へ突っ込み、砂煙をあげる。

（すまん！ 我が自転車。命運を……）

と謝り、紫と一緒に校舎に向かった。

校舎は全部で2棟あり、あと1つは寮らしい。紫によれば職員室と
2学年のクラスは一緒らしい。

玄関で職員室の方向を教えてもらい、紫は自分のクラスで向かった。
因みに時間はHR2分前。紫はどうにか間に合いそうだ。

俺は職員室に向かった。

職員室、俺は中に入ると転校生ですけど、と言った。

すると、先生の内の1人が、職員室の隣にある校長室に一緒に行つ
てくれた。

もしかしたらこの人が担任なのかと予想した。

女の先生だ。結構な美人で、髪は金髪の長髪だが、顔は日本人に近
いので
どうやらハーフのようだ。

校長室、隣にいる先生が校長室のドアを開く。

その先には机があり、そこには……
誰もいなかつた。

隣の先生から

「はあ……またですか」

と聞こえてきた。

先生は校長のものらしき机に近づくなりそこにある手紙をとり、内容に目を通し、またため息をついてこすりに渡してきた。

俺はその内容を読む。

（えーと、なになに……”如月 明田香先生へ”か。あの先生の名前だな。

”今日転入していく生徒は部隊からの推薦なのでUクラスにしついてください。

あなたは担任だから大丈夫でしょう。私はちょっとパチンコに行くので昼まで帰りません。

では、後のことばよろしくお願ひします。因みに生徒の名前は御神哀です。

校長より”……なんだよ！ これ！

文の丁寧さと内容の横暴さがかみ合つてねえ！ 俺の名前はついで……つうか、『HEAVEN』にパチンコあるのかよ……何のために。

すると如月先生が話しかけてきた。

「あの……御神君、それではクラスに向かいましょう。
もう分かつたかも知れないけど、私が2・Sクラスの担任の如月です。

くれぐれも問題は起こさないでね？」

先に釘を刺されてしまった。そんなに信用ないかな……。

俺達は階段を昇る。クラスは2階らしい。

ケニスの前に着く

先生はここで待っていて、と言い、クラスに入る。すると中から声が聞こえる。

「えーーー、皆、今日は転校生が来ます」

その瞬間、クラス内は騒ぎ始めた。

卷之三

じやあ入つてきて——」

なんか事前あんな騒がれるとやりにくいな。

よ思つつも教室に入る

そのまま教壇の上に立つと一瞬、クラスが静まり返った。

(なんだ?
俺なんかしたか?)

次の瞬間、生徒が一気に騒ぎ始めた。

女子からは嬌声が大量に重なつて聞こえる。

男子からは、一瞬の殺氣と、「やべえ！ 俺なんか変な趣味に田覚

のそい

とこの声が……ちよつとまで、なんだそれは――

「じゃあ、自己紹介してね」

自己紹介なんて慣れないので、最初が肝心だ。
これに失敗したらこの前の学校と同じだな……と思つ。

「えーと、御神 哀です。

みんなこれからよろしく……」

といい、ちょっと微笑んでみる。

すると大多数の女子が机に突つ伏し、なにかを呴いている。
そうでない女子も頬をすこし赤らめている。

男子は……俺の顔が女に似ているからだらうか……

なんかこつちを見る奴がいる。やめろ！ 俺はソッチじゃない！

俺は視線をさまよわせていると、一番後ろの窓際の席に紫がいるのが見えた。

紫はこつちを見て笑つてゐる。

チクショウ、面白がりやがつて……。

「じゃあ、御神君は紫さんの隣、空いてるから座つて」

ようにもよつて紫の隣かよ……。

まあ知らない奴の隣よりはいいだろ。

俺は紫の隣の席に座る。

「アイ、あなた以外と人気上々じゃない。良かつたわね」

「どじがだよ。俺は目立ちはたくないんだよ」

そうして、クラスが騒がしくなつてくる。

そして俺の机に人が押し寄せて、

なんの為にって？ そりやあ質問攻めだよ。

色々な質問をされて俺はあまり答えられないで困っている。そうしていると大声がきこえた。

女子だ。

「みんな！ 1限目は能力測定よ！ 早く訓練場行かなきゃ！」

۱۱۰

そしたら、俺を囲む輪は次第に薄れていった。
声のもたらしき女子が近づいてくる。

「うめんねーー。みんな転校生なんて始めてなのよ」

黒のベリーショートの髪型の、姉御！と呼びたくなるような人がいた。

「いや、たすかつた。ありがとう」

「いやいや、別になんでもない」とよ。気が元氣。「ねこー、早く行こ

人の話に割り込むな！」

するとキックを男子に振る。
男子はそれを難なく避ける。

「よつ！ 転校生……御神だつけか。よろしく。
俺は荒祇アラカリヨウ。聊爾ウジだ。で、こいつが不知火シラヌイソウカ。奏華ツバサ。

俺たちは紫の友達だ。 「

女子の方はこいつって言つたなーと怒つている。
なんというか……」「うこうつの久しぶりだな。
と思つてみると、彼らの後ろから女子がきた。

「あの……」

「あつ……君は……」

すると不知火が

「なになに？ 琴雪と御神知り合いなの？」

といつてくる。

「私は涼風琴雪スズカゼココロキです。先日は暴漢に襲われた所を
助けて頂いてありがとうございました」

「へーーー。御神！ あんたもやるじゃない！」

何がだらうと思つ。

涼風は顔を赤くするし……。
すると紫が言つた。

「皆、訓練所行きましょう

と言つ。

とつあえず俺達は訓練所に向かつて行つた。
……ちよつと急いで。

第七話 学校（後書き）

一気に主要キャラでてきましたね。
次の話で主人公の手加減された能力で
いろいろ凄くなります。

登場人物紹介2（能力説明有）（前書き）

登場人物紹介です。

この前のとは違い、能力の説明があります。

登場人物紹介2（能力説明有）

Sクラス、荒祇 聊爾

身長 176cm 体重63kg

なんか元気すぎで、熱くて、真面目な性格。
友達に甘い。

『HEAVEN』の学校では能力訓練と実践の授業だけダントツ
トップ。空間そのものを操作する能力。無論S判定。
空間を開いている間は本体が隙だらけなので、許可を
とっている刃で身を守る。

能力は皆無と言つていいほど暴走なし。だが過去に1度
だけあつたらしいが、そのことはあまり話さない。
将来の夢は部隊のいち隊長になること。

能力名「空間歪曲」
ロストメビウス

空間を断ち切つたり、曲げたり、境界を開いたり、

あと、境界同士を無理矢理繋げて移動したりする。応用技として、曲げた空間が元に戻ろうとして放つ衝撃波も攻撃に使う。

制限あり。

制限距離 2・31kmまで。遠距離に空間を開く場合には、それまで。

自分の周囲1mの空間をいじるには時間がかかる。

無意識では発動しない。意識してからのタイムラグは3秒ほどと長い。だが、一度意識すれば問題無い。

「お前の後ろからスパッといぐぜー。」

癒し系、涼風 琴雪

身長169cm 体重「言わないで！」

人見知りが結構あるが優しい面もある。学校の中で1位2位を競う程の可愛さ。癒やし系。

『HEAVEN』の学校では、能力訓練に関しては光るものがある。それだけでなく、勉学は普通にトップ。

能力は物質に限り、全てを凍らすこと。体術は苦手なので
軽銃2つを持っている。

能力が暴走したことは一切ない。しかし……。
将来、部隊に入ることを光栄に思うらしい。
好きな人がいるらしいがそれは……？

能力名「絶対零度」
アブソリュートゼロ

自分の触れているものから、周囲50mの任意の物質の
振動を完全に停止させる。温度の調整ができ、すぐ溶ける
0から絶対零度（-273.15）まで調節可能。
たとえ100でも一瞬で凍りつく。

能力を使おうと思えば、意識しなくとも周囲3mの物は
勝手に凍りついていく。

制限あり。

もちろん、周囲50m以上離れれば無理。

ある事から、人間に対しこの能力は直接使えない。
ただし、凍らせた物を使うのは大丈夫。

「あなたの熱はもう奪つたよ。」

身長174cm 体重「言うなよ！」

クラスの頼れるリーダー役。

男からも女からも尊敬される人間性。

能力訓練は忠実にこなす。

部隊には尊敬する人がいるらしく、その人を追つて日々鍛錬している。

武器はない。しかし体術がやばい。

能力はよく使いすぎて溶岩を噴出させる。今でもその癖は残っているらしく、測定の時は、張り切りすぎる。

能力名「大地噴火」
ランドナバーム

自分が触れている地面から周囲10mの地面や、その奥にあるマントル、溶岩、マグマを自在に操れる。

なお、周囲10mと言うが、深さは測りきれない。
彼女はもっぱら足で地面を蹴つて能力を発動させている。

制限あり。

暑い。

「私は女だつ！」

とりあえず3人。

第八話 みんなの能力（前書き）

やあつと能力がいっぱい！
例によりその他キャラは省る。

第八話 みんなの能力

俺達は今、クラスのあるA棟の隣にあるB棟の訓練所に向かっている。

やはり、能力の使用は間違えば危険を招くので、どこの学校も部隊と同じように地下が必ずあるらしい。

訓練所についたと同時に授業開始のチャイムがなる。どうやら間に合ったようだ。

部屋の隅からなんかごつい先生がでてくる。その隣には如月先生がいる。

するとその先生は言つ。

「これから能力測定を始める。まずは番号順に名前を呼ぶので、前に1人ずつ出て来い！」

「まず最初に、荒祇 聰爾！」

すると荒祇が立つ。

「じゃ！ 俺は団つてくるぜー！」

と言い、皆の見ている前に出る。俺は紫に聞いてみた。

「紫、荒祇の能力はどんなのだ？」

「それは見てのお楽しみね。けど間違いないこのクラスの第1位よ

「マジかよ……」

俺は前に視線を戻す。

能力測定はクラスごとにやり、その中で順位を競うものだ。ちなみに不知火の話によるとクラス全30人の中でもトップ5に入る人は

特に凄い能力者らしく、将来は高校に行かなくても部隊に入れるらしい……。

荒祇は手を伸ばし、誰も居ないとこひを指差す。

その瞬間、空間が割れた。

比喩ではなく、ただ純粹に空間を割つたのだ。

そのあとに荒祇は先生に指示をもらい、同時に裂け目を10個ほど作つたり、

どれぐらいの速さで空間を操れるかなどをやつた。

その能力は凄く、空間の裂け目が元に戻るたびに衝撃波が飛びまくり、俺たちは

その場にとどまるのが精一杯だった。

最後に、的が出てきた。どうやら能力の攻撃性が問われるらしい。

荒祇は集中する。

「ハツ！」

といった瞬間に空間」と的がねじ切られた。

「評価！ 攻撃範囲S 攻撃威力SS 攻撃射程S
総合Sランクだ！」

生徒からさすがだな、という声が聞こえる。

荒祇が俺達の所に戻つてくれる。

「いや―――疲れた!」

「お前すげえな……」

「いやいや、皆も凄いから見とけよ

俺は皆と雑談しながら他の人の能力を見るが、やはり荒祇が凄いようだ。

そして何人かやつたあと呼ばれた。

「次、佐屋 紫!」

「私ね。行つてくるわ。アイ、ちゃんと見てなさいよ?」

「はいはい……」

紫はどうやら結構特別らしく、紫専用の装置が持つて来られた。脳干渉系の能力者専用らしいが、そういう能力者はいても、なかなかSクラスにあがれないものらしい。

紫はそれに手をあてて能力を使う。

すると装置が赤色の光を発する。

先生は結果を読む。

「評価！ 効果範囲A 効果威力S 効果射程B

総合Sランクだ！」

紫がこっちに戻つてくれる。

「どう？ アイ、凄いでしょ！」

「すげーな……」

俺は素直に感嘆する。

「次、不知火 奏華！」

「私の番だね！」

不知火は前へでる。

……なんというか、後ろ姿がかっこいい……。

不知火は足を少し上げて地面を蹴る。
何をしているんだろう？と思つた時、
床から茶色の杭が無数に出てきた。
と思つていると形がくずれる。

そして今度はそれを操り槍にして上から地面に突き刺す。
最後にもう一度思いつきり地面を踏むと……
溶岩が出てきた。

……危なくね？ やばくね？ 俺死んじゃう？
と思い回りを見るが俺以外はいたつて冷静。見慣れているみたいだ。
不知火がちゃんと溶岩を操つていいようだ。
それもお手玉するぐらい簡単に。
すげえな。

不知火は能力を使うのをやめると溶岩は地面の隙間に消えていった。

「評価！ 攻撃範囲S 攻撃威力SS 攻撃射程C

判定Sクラス！

「凄いでしょ！」

「てゆーかあぶねえな。あれ大丈夫なのか？」

「失礼な！ ちゃんと制御するから大丈夫だよ
そんなもんかと思う。

あれ？ そういうえば紫の次は不知火だつたな……。
佐屋、不知火ときたらやつぱり……。

「次、涼風 琴雪！」

「はつ、はい！」

なんとも頼りない声をあげて前に出る。

大丈夫かなあと心配していると声が聞こえる。

「大丈夫だろ、だつてあいつすぐえもん。マジで」

「そ、うよアイ、あの子はすごいもの。本当に」

「そ、うだよ。あんたも信じてあげな。本気で」

「そ、うか？と俺は返す。ちなみに分かるとおもつが
上から、荒祇、紫、不知火である。

俺は前を見る。

その瞬間、背筋が震えた。

……なに、その反応。あたりまえだろ！

そこには、訓練場を一周するような氷の壁が一瞬でできていって、さらにはそれだけじゃなく、涼風は自分の周りに氷のナイフを見た目100本ほど作っていた。

涼風の目は……怖かつた。

もしかしてあれですか？能力使つと性格変わるパターンですか？やばい、マジで怖い。

……と思っていたら先生が震えた声で結果を告げる。

「……ブルツ……ひ、評価！ 攻撃範囲S 攻撃威力A 攻撃射程A
は、判定Sランク……ブルツ！」

……寒いから？ それとも怖いから？

「あのつ…」

「はつ、はい！」

「？ 御神君。どうでした？ 私の能力？」

「いや、すごいね。あんなのはじめて見たよ…」

これは本心だ。純粹に凄かつた。
やつぱり涼風もSランクなんだな。
あれ？涼風がなんか顔赤くして俯いちゃったよ。
風邪かな？
俺は涼風の額に手を触れてみる。

「大丈夫？ 熱でもあるの？」

「……いつ、いえ……」

あれ？更に顔が赤くなつたような……大丈夫かな？涼風は皆の所へ行つた。

荒祇や不知火になんか言われてる。あつ、なんか倒れちゃつたよ……。

俺は皆の所に行く。

「涼風……大丈夫か？」

すると涼風はまた真つ赤な顔になり、「琴雪でいいです……」と行つた。

「ほんと鈍感だな、御神！」

「だよねえ、分かつてないわよねえ」

「アイは渡さないわよ……」

と聞こえた。

最後のは無視しどう。

いつの間にかほとんどの生徒が終わつていた。どうやら俺は転校生なので最後にやるらしい。そして呼ばれた。

「最後だ。御神 哀！」

俺はやつぱり最後か……と思い皆の前に行く。皆はやはり今まで見たことのない俺の能力が楽しみらしい。このクラスには空氣使いはいないから大丈夫だと思うけど。

俺は先生から、とりあえずお前の能力を適当に見せろといわれた。

俺は両手を横に大きく広げ、目を閉じ、意識を集中させた。周りはどんな能力かと騒いでいるがそれも聞こえなくなる。

部隊の模擬戦の終わった後に紫に言われたアドバイスを思い出す。

”どんな能力も工夫しなければ攻撃にならない”

俺は風を当てるだけでは攻撃にならないと教えられた。

攻撃を作るには、その元となるイメージが必要だ！

俺はいつものように脳に流れこんでくる風の向きを変える。瞬間、俺は能力を開放した！

部屋内の風向きが地下なのに急に変わる。

中心点は……俺の掌！

俺は掌を中心につつの竜巻を作り上げた。埃が舞い、竜巻の形が見える。

俺はそれを一瞬でやめ、その風を一気に、今度はもっと細かく！

人差し指の先に空気を圧縮していく。

最大重量100kgを完全に圧縮するのに、10秒もいらなかつた。

俺はそこにある空気を、いつの間にか用意されていた的に打ち出す！

不可視の風の弾が的に当たるコースで飛ぶ！

俺の手の動きで分かつたのだろう。

驚愕の表情を浮かべながら的に視線を向けるみんな。

俺の放つた弾が的に当たつたその瞬間

ズゴオ！……と大きな音が聞こえ、圧縮された空気が解き放たれ、

そして……

訓練場の半分が、吹き飛んだ……。

嘘だろ？

的があつたほうから半分の壁が崩れ、地面が露出している。ここに入り口はB棟にあつたのだが、本体は校庭の下にあつたのだろう。

青空が見える。雲ひとつない青空が…………あれ？

俺自身や皆が呆然としていると先生の声がこだまする。

「評価……攻撃範囲SS 攻撃威力SS 攻撃射程SS
判定Sランク……」

俺は誰にも聞こえない声で呟いた……

「……手加減どころか、強くなつてる？」

第八話 みんなの能力（後書き）

なんと、能力の応用によってオールSSに
目覚めました！

あ、別に主人公はイジメ大好き人間
ではありませんよ？

第九話 戦闘！－！－！（前書き）

短いですね、はい。

別に手抜きではありません、はい。

第九話 戦闘！！！！

俺は大変な事をした。

そう。訓練場の壁やら天井やらを……
なんというか、木つ端微塵にしました、ハイ。

どうしよう……と思つて先生の方を向くと、先生は能力には驚いた様子だが、壁などは気にしていなかつた。

「あの……先生？ これって弁償モノですか？」

「いや、大丈夫だ。

訓練場の建物だけ、『HEAVEN』から最先端技術を貸してもらつていて

壁など壊れたものは、自己修復系能力の理論を応用しているらしい。
だが、直るのはせいぜい3日だろうな。ここまで壊してもらつたら
それぐらいだろ」

……今更だけど、『HEAVEN』すげえな。

何で能力があるのかも分からぬのに能力を応用するとか……最高
じゃん？

よくよく見ると、壁の断面が少しづつ直つてるような？
そんな気がする。

すると先生が言つ。

「よし、これから模擬戦闘訓練を行う。

みんな、校庭に行くぞ！ くれぐれもこの穴にはおちるなー。

その後は、戦闘系能力者と非戦闘系能力者に別れていりー。」

「……」一旦解散となり小休憩となる。
すると、紫達がこちらにくる。

「すげえな、御神！　俺、後でお前と勝負してえよー。」

荒祇が言つ。

「哀でいいよ……。けどお前に勝てるかはわからなーいな」

「じゃあ俺も聊爾でいいー！」

すると紫と涼風、それに不知火が言つてくる。

「ふふ、アイ、あなたなら大丈夫じゃない？」

「あつと勝てますよー！」

「まつまつまー、まあ、いい勝負になるんじゃないの？」

「いやいや、さすがに無理だって、紫

俺がそう、紫に返すと沈黙がながれた。

？　なんか俺、地雷踏んだ？

すると沈黙を破り、涼風が真っ赤な顔で聞いてきた。

「あのー、紫さんとなんで名前で呼び合つてるんですか？」

「……いや、紫がそうしてくれつていたから

すると不知火が少し顔をにやけさせながら涼風の方に行き、何かを

話す。

すると、さらに涼風の顔は赤くなる。
なにが? と俺が思つてみると涼風が、

「あのつー、その……えーと……私も、な……名前でよんでも下さい！」

「いや、別にいいけど？」
「そしたら俺のことも哀でいいから」

「ううう」と琴雪は顔を沸騰させ、気絶し、奏華に支えてもらい。すると後ろからゾクシとする殺意が飛んできた。

一いちじゅうを睨んでいた……。

マジで俺、
フラグ立てちゃつた？

死亡フラグかもしれないけどね

俺は必死に紫の殺気に耐えながらも校庭に皆と向かう。

校庭には、もうすでにほとんどの生徒が2列に別れて座っていた。俺達は、それぞれ自分の所に座ろうとすると、先生が呼び止めた。

「おこー！ お前らはいいだー！」

? 2列じゃないのか? と俺が思つて いる と、クラスの面々が「また

表情は浮かばない。

俺は皆についていく。

ちなみに、俺達がいるのはクラスメイトの前。めっちゃ恥ずかしい。
因みにここで言う俺達とは、

俺、紫、聊爾、琴雪、奏華だ。

俺はなぜここに居るのかを不審に思つてゐると先生が口を開いた。

「ここに居る五人は、このクラスで最高の成績をだした上位5人だ。
しかし、能力の質そのものが普通ではないので、この5人でバトル
ロワイヤルをしてもらい、
クラスの順位を決めたいと思つ」

「？ クラスの順位？」

と俺が疑問符を浮かべると紫が説明してくれた。

「まあ、つまりこのクラスでの立ち位置よ。
そのままの意味で順位」

「なるほど」

俺は解決したことにして満足しながらも、今から戦うことに対する興奮をおぼえる。

（あの部隊の訓練はヤバいけど、短時間でコツがつかめたんだ。頑張ろう）

すると、皆が離れていく。

そして100㍍くらい離れる。先生が拡声器で指示をする。

「では、こまから第1位決定戦を始める！
はじめえ！――！」

え？ てか、いきなり？

と俺が戸惑っていたのも束の間、周囲に砂煙が上がったと思つと……

俺は空中に飛ばされていた……。

第九話 戦闘！――（後書き）

戦闘は次に持ち越し！

楽しみですね……。

……楽しみですね

？

第十話 戰闘シーンですか。（続）（前書き）

やつと戦闘シーンですか。

第十話 戰闘！――（続き）

？何が起こった？

ああ……空が蒼いな……。

いや、今まで、俺は上を見ていた覚えはないぞ？

俺はそう思つた瞬間、空中から地面に落ちた。

あぶねーな。受身を咄嗟にとつて良かつた……。

そして、だからこそ思い出す。

この戦闘訓練でクラス第5位を決めるのだということを。

ああ、俺誰に飛ばされたんだ？

俺は元いた位置を見ると、そこにはポツカリと空虚な穴が不自然に開いていた。空にも同じのがある。

ああ、聊爾のか……と思つていたらいきなり横から溶岩がとんできた。

……？ 溶岩？

「うわー！ あぶねえ！」

俺は体勢を崩しながらも避ける。

「よくかわしたね！」

俺が溶岩をかわすと不知火が声を発した。

20mほど前に居る。

「いや、よけないと俺が死んじゃうし……」

そう突っ込むが、聞いてないようだ。

いきなり土の拳が地面から飛んできた。

俺は自分に当たるものだけを風で吹き飛ばす。すると不知火は言つ。

「私達のバトルでの約束！」

たつた一つ、それは手加減無用だよ！

相手を殺す氣でやることだよ。でないと私達の誰かがあなたを殺すわよ！」

「……マジで？」

「……マジで？」

聊爾は紫と琴雪相手に奮闘中だというのに、不知火と一緒に言葉を返す。

「はあ……分かつたよ。殺ればいいんだろ、殺れば

「分かつたならいいんだけどね……。けど死にかけるときの感触は怖いわよ。少なくとも私達4人は経験してる」

俺はマジか……と思ひながらも集中。

空気を水素に『^{「ンバーシヨン」}変換』する。地面に足をふれて、分からぬように炭素をとりだす。

炭素はさつきの溶岩攻撃で、離れた枯れ枝が炭化していくものを利用した。

俺はばれぬように本気を出すことにしたのだ。本気の相手には本気を。これルール。

俺は炭素を無理やり『気化』<sup>ヒガヤボレイション
じよのルール</sup>させ、水素と無理矢理結合させる。
因みに俺の能力に物理法則など関係ない！……自分で言つててす
げーな……。

俺は水素と炭素を原子レベルで結合させた。そう、プロパンガスを作ったのだ。

そう、プロパンガスを作ったのだ。

俺は不知火にはれないように、風を操り、プロパンガスをのせて不知火の周りに展開。

不知りが言つてくる

「おいおい、攻撃して来ないのかい？」

不知火は他面を就る。

その瞬間、小規模な地震がおこり溶岩が吹き出た。

「かかつたな……」

俺は全力でプロパンガスを溶岩と不知火の間に解き放つ。不知火がその独特のガス臭に気付いたときには、もう遅かった。

「アガル」

「恨まないでくれよ……」

そして、溶岩の熱の余波で大爆発が起こった。

爆音がその時の音を支配した……。

吹き飛ばされた不知火はボロボロの状態で先生に運ばれどこにい

つた。

爆発場所を溶岩寄りにしてよかつたな……下手すりや殺してた。

俺はさつきの爆発を呆然として見ていた3人の内、まずは……
紫をねらつた。

俺は風を体全体の後ろから噴射し、紫の後ろに高速で回つた。
この移動法はさつき思いついたものだ。
しかしここまで上手くいくとはな……。

俺は紫を自分の手に乗せた小さな暴風に当てた。
しかし、小さくても暴風だ。どれくらいかといふと竜巻ぐらい。
紫は俺に触れて能力を使う暇もなく、後方に吹き飛ばされた。

次は……琴雪。

聊爾は厄介な相手だ。

今なら聊爾を放つておいて琴雪に集中できる。

琴雪は掌に氷の塊を作つてこつちを躊躇なく殴つてくれる。

……やっぱ、性格変わつてんな。

俺は少し離れて立ち止まる。するといきなり俺の服の一部が凍り始めた。

「ツバツツー！」

なんと遠距離も可能みたい……つてさつきやつてたな。

俺は狙いを定めにくくするため風の高速移動を使つ。

俺はもう龍巻を起こすことにした。

いや、もう面倒だから。……何？女子相手に情けない？……ひる
せえー！

全ての俺が掌握している風を琴雪の周りに渦巻かせる。

琴雪は気付いたようだがもう遅い。

……けど、マジで琴雪いめん。

俺は竜巻を作った。

「さやああああああ！」

俺は竜巻で巻き上げられた琴雪が落ちてくるのを確認する。俺は落点に行き、琴雪を受け止める。すると、気絶していた琴雪が田をわめき、じちらを見てくれるといきなり頬が真っ赤になつた。

……確認しよう。今、俺は琴雪を受け止めたままだ。

そしてその体勢は言わずもがな、お姫様抱っこ。

琴雪は「さやう……」と気絶してしまつた。

俺は琴雪を先生の所へ置いておく。

後は、聊爾か。

俺は後ろを振り向こうとしたその瞬間、声がした。

俺の真後ろから。

「よつ、俺を無視すんなよな？」

そして俺の視界は反転した……。

……またこれか。

第十話 戰闘！－！－！（続き）（後書き）

主人公補正で此の世のルール無視決定です。
以外に聊爾も強かつたりする。

第十一話 手加減無用情け無用（前書き）

主人公はやっぱり強かった……。

第十一話 手加減無用情け無用

俺はすぐ体勢を立て直す。

また不意打ちでやられた。以外と能力を使うのに慣れてやがる。

俺は勢いよく立ち上がりつて相手を睨む。

そこには直立不動となつてゐる聊爾がいた。

「くつ、まつたくよ、俺を無視すんなつて」

「じつやら紫が言つてた第1位つてのは嘘じやないか……」

俺は聊爾の能力を考える。

多分、万年第1位だろうな……。

奴の能力は空間を操作していた。多分俺の体を空間の穴に入れて任意の場所から吐き出させたんだろう。

「しかし空間か……相性が悪すぎな相手だな」

俺がそう呟くと聊爾が返す。

「まあ、風を操れても空間の前じや意味ないしな。
降参してもいいんだぞ?」

「いや……遠慮しつく

俺はそう言つ放ち気持ちを集中させる。

もつこじうなつたら俺も意地がある。絶対勝つてやるー。

俺は竜巻を起こす。

3つの竜巻が聊爾に勢い良くせまるー！

しかし聊爾が手を向けると、竜巻と聊爾の間に痕がはいつた。そこに竜巻はぶつかり、そしてあつけなく消えた。

「無駄だぞ？　お前の風は俺には効かない！」

本当は風使いじゃなくて空気使い何だけどね……。もう本氣だそ……。早く終わらせたいし。

「聊爾」

「あ？　なんだ？」

俺は聊爾を呼ぶと聞いてくる。

俺は言つ。聊爾が無茶をしない様に。

「聊爾、俺はこれから本氣をだす。

死なないよつに気を付ける

聊爾は何のことだと首を傾げる。

俺は本氣をだす。勿論今まで本氣をだしていた。

しかしそれはあくまで今まで出した技の本氣だ。

俺は空気を操ることで後一つできることがある。しかしそれを聊爾は気付いていない。

（その油断が負けを招く）

俺は両手を開き、前にかざす。

風を100km/hを圧縮して弾にする。

俺は死なないことを祈つて相手の本氣に合わせて本氣で弾を撃つた。

直後、音を置いて圧縮弾が音速以上で飛ぶ。

そう、俺が本気を出すとあの圧縮弾をマツハで飛ばせる。しかしこれは危険なため、訓練では使いたくなかった。だが、本気で行かなければお互に満足できないと思った。だから聊爾にはやつた。

聊爾はあらかじめ開いておいた空間のなかに弾が入るのを感じる。と、同時に『ゴウツツ！－！－！』と物凄い音を立てて空氣の余波が聊爾を吹き飛ばす。

「これが、哀の本氣か！」

聊爾は吹き飛ばされながらも驚いた。

聊爾は受身をとり体勢を立て直し前を向く。

その瞬間後ろに風の流れを感じたとおもつたら声が聞こえた。

「さつきの不意打ちのお返しな」

そして聊爾は氣絶した。

後ろに俺が回つて風を纏つた手刀を放つたのだ。

……シーンと静まり返る周り。

? おかしいなと思い、皆がいる方向へ目を向けると……誰もいなかつた。

「……は？」

すると風に吹かれて紙切れが落ちてきた。
先生からのメモだった。

『勝ったほうは負けたほうを保健室に運べ。そして勝った奴は俺の所に来い。以上』

「……逃げたのかよ」

俺は今日一番の深い溜め息をつき、気絶している聊爾を担いだ。

俺は今保健室にいる。

保健室の中にはベッドがありそれぞれに、不知火、琴雪、紫、聊爾が寝ている。

そして俺の目の前には……如月先生がいた。

保健室に入ったとき、如月先生がいたのは助かった。

どうやら如月先生は担任であり保健医でもあるという不可解な人事

らしい。

なぜ担任なのに保健医をやっているかといふと、先生の持つ特異能

力、『リザレクション 永久復活』

が原因らしい。

体に無理がなければ、体力のみ完全回復することができるという効果らしい。

勿論、体力のみであって、気絶や酷い怪我は回復しないとか。

そして俺は模擬戦の報告を細かく先生に伝え終わった所だ。

「それにも御神君。転校してきたばかりなのに第1位とは凄いわね。色々大変だろうけど頑張って」

「はい。分かつてます……」

いつまで経っても頭が起きる気配はない。

ちょっと強くやつすぎたか……と思つ。

すると先生が言つ。

「もう今日の授業は終わりよ。地下の修繕を優先させるらしいわ。自然回復じゃ遅いから、ですつて。この子たちは私がみてるから帰つていいわよ。

あなたも休んだほうがいいわ

「……はー。では監を任せます

俺は皆のことが心配だつたが仕方なく帰ることにした。

俺はすぐ教室に戻り、誰もいないそこから荷物をとり、自転車置き場に行つた。

……これからは少し能力の制御を身に着けたほうがいいな。

俺はそう思いながら自転車に乗つてマンションに向かつた。

マンション。俺は部屋に戻つてすぐ汗をシャワーで流して風呂に入つたあと

途中で買ったコンビニ弁当を食つて、寝室で今日のことについて思つた。

皆に對してちょっとやりすぎたかもしれないけど、

本気で戦つたからいいよな？

俺は前の学校みたいになりたくないと思つた。

そして俺は睡魔に誘われていった。

「アイくん、ほんとこいいの?」

少女が俺に話しかける。

「うん。おねがい」

俺は勝手に口を動かす。

「わかったよ……」

少女は悲しそうにして、手を俺の額にあててる。

「じゅあね……」

「ハツ……」

……俺は勢いよく布団からでた。

今のは夢か……。

しかし妙にリアルな夢だったな……あの女の子も
見たことあるような?

俺はそつ考ふるどこなり机こおいてある携帯がなつた。
俺は携帯を開けて氣付く。

「まだ2時じやん……通りで暗いわけだよ……」

俺は携帯の電話に出る。

「わしちこ」

『やあ、御神君』

『総隊長さん?』

それは他でもない総隊長の声だった。
そしてその声は一言だけ告げる。

『任務だよ』

第十一話 手加減無用情け無用（後書き）

次が初任務ですよ！
もしかしたら色々あるかも……。

第十一話 初任務（前編）（前書き）

まつにんむです！！！

第十一話 初任務（前編）

『任務だよ』

電話でそう告げられた時俺は不安だった。
しかし、これも皆の役に立つ為と思えば気が楽だった。
眠気を振り払い、俺は冷静に、そして端的に聞く。

「……内容は？」

すると総隊長さんが言つ。

『詳しく述べ本部に来てくれ。この時間だし、知り合いで姿を見かけられる事もないだろう』

「分かりました」

『では本部で』

そう総隊長さんは言い、電話はされた。
俺はすぐに、動きやすい服に着替え、顔を洗つて
あの黒いカードを持つて部屋をでた。

俺は自転車にのり、本部へ急ぐ。
少し速めに漕ぐ。

本部に着いた。

本部はどうぞのロングベリーのようになつて24時間開いているらしい。
俺は自転車を置き、入り口に入る。

いくら部隊でもこの夜中なので、視界に入る人影は3・4人しかいなかつた。

俺は受付に行き、カードを見せる。

受付はそのカードを見て、総隊長がいる部屋を教えてくれた。

俺は階段でその部屋に行く。

その部屋がある階にきたのだが、部屋が見つからない。

受付の人気が間違えたのかと思い戻るうつとすると、後ろからいきなり声がかかつた。

「やあ、御神くん」

「うおわ！……！」

俺はいきなりの総隊長さんの出現に驚いた。
とこうか気配すら感じなかつたぞ？

「うわちだよ」

と手招きされ、ついていくと、そこにはさつき通りに通つた時には無かつた部屋があつた。

どうなつてるんだ？

俺はそう疑問におもいながらも部屋に入つた。

そこには、誰もいない。

任務だから誰かいるだろうと思つていたのだがいない。

俺は不思議に思い聞くとするが先に総隊長さんが言葉を紡ぐ。

「これから君にやつてもらう任務の内容を言わせてもらひつ。
はつきりいつて緊急事態だ。君にとつては初任務なのに

す」しあつこと思つが頑張つてくれ

「内容は？」

「ついさつと、『HEAVEN』近郊で能力者によるものと思われる殺人事件があきた。その犯人と思われる者には目撃証言があり、分かっている。今までも傷害事件を数多く起こしてきた奴だ。能力は不明。だがそいつは自分のことを奇術師マジシャンとよんでいるらしい。私達の目的は奇術師マジシャンの捕獲、または殺害だ。どちらにせよ」ちらり側に運ばれることになる

「殺害、ですか……」

俺は気になつた言葉を繰り返す。

「私も君のような中学生に人殺しをさせたくないが」
「ちらり手一杯なんだ。どうしても君の力が借りたい」

「……分かり、ました。けど、なるべく殺さないようにします」

俺はそう言い、承諾する。

「さうか。 それでは、任務用の服を渡そう。」
「だいたい

俺は案内されて隣の部屋に行つた。

「これが君用の制服だ」

そう言って渡されたものは、黒を元とした、
とこりか黒しかない服。

簡単に言えば、どうの昔に無くなつた自衛隊の迷彩服の黒バージョンの動きやすい簡易型を思い浮かべてもうれば思い。勿論ヘルメットなどは無いが。

いつとくナビ、中学生の俺からみたら滅茶苦茶かつこいい。

俺はそれをまた別の部屋で着替える。

サイズはぴったりだ。いつ図つたんだ……。

「おひ、似合ひじゃないか、御神くん」

「あつがとひじれこます」

「それでは現場に行こつか。屋上に上がつてくれ」

俺は総隊長さんと共に屋上に上がる。
なにでいくんだろうと思つ。

屋上だからやはつへりだろうか?

屋上にあがると総隊長さんが言つ。

「ではこれから君を現場に送る」

「? へつとかじや無いんですか?」

「……くつせひむとこつ、隠密には向いていないからな」

「じやあ向で?」

「私の能力で、だよ」

その瞬間、総隊長さんの目つきが変わった。

呟く。

「「」の座標から事件現場の座標までの距離の概念を一時削除」

そして、なにかが変わった。

見た目には分からぬがなにかが変わった。そう疑問に思つと同時に、俺は総隊長さんに押されていた。

「そつちが事件現場だから、ようしく。くれぐれも人に見つからぬ」ように「元

その瞬間、俺は事件現場にいた。

「……は？」

何がなんだか分からなかつた。

なんていきなりここに居るのだろう？

すると制服の中にいれた連絡用の携帯にメールがどづく。

それをみる。

『疑問に思つた。任務を優先』

とだけかいてあつた。

俺はしようがないと思い、疑問を打ち切り、
搜索のため、能力を使う。

俺はアスファルトに手をふれる。

そして、能力を発動する。

アスファルトにはすぐそこにある現場の足跡の情報がある。

俺は犯人のものと思う一種類の足跡を見つけ、アスファルトの表面
に能力を使つていく。

犯人がアスファルトの続く上に居るとしたら、17分、アスファル
トの表面を搜索できる俺なら
足跡、歩幅などを計算して犯人を追いかける。

俺は能力を出し惜しみなく使つていく。

すると、すぐ、500mほど道の先にソイツを見つけた。

俺はその犯人を追い、裏路地を縫うように走つていった。

第十一話 初任務（前編）（後書き）

総隊長の能力詳細はまだナゾです。

やうとやう100000OVER-----

リーブルードの間にかんじに拂つた

と二つか三つでよいんでいいのでしょうか?

第十二話 初任務（後編）

俺は奇術師マジシャンを追い、裏路地を走った。

（あともう少しだ）

俺は近づいた気配に警戒し、そつと角からこうつを覗く。そこにはいた。

周りには人はいなかつたのですぐ分かつた。

見た感じは、人の良い老紳士と言つた感じだった。

その白髪が年齢を教えてくれる。

本当にあの人マジシャンが奇術師なのか？と思ひ、もう一回

能力を地面に向けて放つ。

アスファルトに記録されている犯人の足跡と歩幅等のデータと目の前を歩く老紳士のデータを重ねる。

（……やつぱりだ）

その記録は寸分違わず合致していた。

俺は目の前を歩く老紳士に、覚悟を決めてそつと後ろから忍び寄つた。

あと数メートルといつた所で違和感が襲つた。

目の前の老紳士の姿がユラユラと揺れたかと思つた次の瞬間、姿が消えた。

なんだ？ なにが起こつた？ と俺が思い、周りを見渡してみると、また違う人気の無い裏路地に入つていく姿が見えた。ただの見間違いかと思ひ俺はまた裏路地に入る。

すると次の瞬間、後ろから声が聞こえた。

「マジックショーだつた……」

「！？ へやつー！」

俺は急に聞こえた声に驚き、咄嗟に振り向き拳を振るつ。
しかしそこには人影すらなかつた。

俺は気配が前からしたのでまた前を向く。

そこには、さつきの老紳士がいた。

老紳士は、『HEAVEN』に満ちた礼をしてくる。

「じとばんわ、『HEAVEN』の人」

俺になにか得体の知れない重圧がのる。
敵と向き合う緊張の汗が噴出す。

初めての戦闘だ。

俺は緊張しながら口を開いた。

「お前が、奇術師か？」

すると老紳士は返す。

「はい。その通りです。

私が今回のマジックショーを開催させて貰つ、通称、
奇術師でござ

います「

「マジックショー、だと？」

俺はさつきから意味の分からない単語を囁ひ老紳士に顔をしかめる。

すると老紳士は口を開く。

「はい、そうです。マジックショーです。
素晴らしい芸術の時間へ」案内します。

今回のお手伝いはあなた、です」

「お手伝い？」

俺はまた、意味の分からないことにイラつく。

すると、次の瞬間、また老紳士の姿が陽炎のようになれて消えてしまつ。
そしてまた後ろから声が聞こえる。

「あなたは黙つて私の^{ショ}芸術の引き立て役になればいいのです

頭に重い衝撃がかかる。

俺はそれが杖のものだとわかった。

それは、子供をしつけるほどの杖ではなく、殺すための杖。
先は尖つて、人を刺せるようこじしているし。
素材も鉄で出来ていて硬い。

「おやおや、意外と頑丈ですね。では、これなり

そしてまた姿を消す。

俺は後ろに気配を感じて咄嗟に横に飛び。
すると俺のわき腹をかすつて杖の先端が通る。

「テレポート空間干渉系能力か！？」

そう、考え付くのはそれだ。しかしそれは拒否される。

「おお、あたりです。凄い。
関心しますね。」

「うるせえ！」

俺は老紳士の懷に飛び込み、拳を突き出す。
しかしながら外れた。

今度は避けられた。

老紳士は左に避けてすぐ、姿を消した。

そして今度は俺の右後ろから杖による連續突きが繰り出される。
俺はそのうひの数発を肩や足にくらつた。

さつきかすつたわき腹からは結構な血が出ていた。
足や肩も同じ状態。

（やば……目眩が……）

少し貧血気味になってきた。

血を垂れ流して動き続いているのだから当然だらう。
早く相手の能力を解析し、攻略法を練らなければいけない。

「考え方とはシヨーの後にして下さー」

それがいけなかつた。

目眩と考え事で頭が一杯だつた。

俺は後ろからくる杖の突きに対応できず

腹に、穴ができた。

それは空虚で、ポツカリ開いて、中の色々なモノがぐぢやぐぢやとしている。

そこからは、赤いものが噴き出し、俺の体にも、相手の体にもかかる。

視界が赤く染まる。髪も、どんな染料より赤く。

そこで俺は、意識を、俺のナ力で渦巻くモノに、墮とした。

マジシャン
奇術師 SIDE

私は芸術的に、あの子の腹を突いた。

それは真っ赤な血を噴出し、

私のショーや終焉を彩るものに相応しかつた。
血が顔に当たる。

ああ、なんて暖かいんだ。

そこで、少年は倒れた。

私はもう終わりと思って、少年に背中を向けて歩き出す。今日はラッキー・デイだった。手伝いを2人も貰えた。

そう思い、満足して歩いていく。するといきなり肩を掴まれた。
なんだと思う前に、激しい痛みと一緒に、はじけた。

なにが起きたのか。

私の肩の肉が骨だけのこじて弾けたのが分かるのに、そう時間は要らなかつた。

私は感じたことの無い痛みに倒れて悶える。

なんだこの能力は？

私は田の前にある恐怖から逃げたかつた。

足音は近づく。私は最後の力を振り絞り、鏡に入った。

私の能力は『左右対称』^{（イ・ハ・ツ・ミ・ツ）}。

設定座標を基準にして、私の位置と反対側に移動する能力。

私はそれを使い、恐怖の元の後ろに回り込み、杖で力の限り突いた。

私の杖は少年の腹に突き刺さ…………らなかつた。

そしてある異変に気付く。

私が刺そうとした腹はもう既に、穴を開けた。
なのに、それが、その傷が……無い。

私はもう諦めた。杖はなぜか弾かれ、もう体力が残っていない。

「は、はは、はははははは…………」

私は目の前にきた恐怖をみて、笑つた。

奇術師 マジシャン SIDE END

御神 SIDE

俺は頭痛で目が醒めた。

ここはどこだ？

そういうえば任務があつた。

俺は奇術師マジシャンに腹抉アブクルられて……

はつと思つた瞬間、腹を見て、驚愕した。

傷が塞がつてゐる。完璧に、それも傷一つ残さず。

俺はその事実に驚いていたが、頭が冴えてきたら異臭が鼻につく。

俺は異臭の元を探つて周りを見る。

そしてそこにそれはあつた。

俺の後ろ、足元に、奇術師マジシャンがいた。

いや、あつたと言つたほつが良いだらうか。

あの老紳士の面影は今は無い。

顔の右目の部分は眼球がなく、代わりに石が詰まつてゐる。左目は、眼球が液状化して目からすこし垂れてゐる。

そして、顔の左半分は、皮が剥がされ、赤い肉が見えている。右頬は骨だけになつてゐる。

唇は焼かれて平坦になつてゐる。

体は……目を背けたい。

ところどころ骨だけだつたり、液状化したり、皮だけだつたりして、それは見るに耐えない光景だつた。

なぜそれで奇術師と分かるのかは、その白髪と服で分かる。

俺は気持ち悪いと思つたが、なぜか同情心はなかつた。

吐き気もしなくなつた。俺が慣れている？

俺はそんな思考を打ち切り、死体に背を向けて携帯を出す。

俺は総隊長さんにメールをした。

『任務完了』

そして俺は、もう口が昇ってきた空を見て、歩き出した。

第十二話 初任務（後編）（後書き）

本格戦闘（のつもり）でした。
主人公の能力は応用すると凄い凶悪なんです。

第十四話 転校生（前書き）

外人です。

名前について気付いた人はいますかね？

第十四話 転校生

俺は歩いて、元きた路地裏に戻る。

そこには、朝日を浴びて立っている総隊長さんがいた。

「総隊長ともあらう人が出てきて良いんですか？」

「こや、この事は内密にやるしね」

俺は総隊長さんに近づく。
そして総隊長さんは言ひ。

「じゃあ……帰らつか？」

「あの、死体はどうするんですか？」

俺は自分が殺してしまったのであるのを言つてこ。
さすがにあのままにはできないだら。

「大丈夫。そういうの専門が居るから」

「わうですか……」

「じゃあ、こいつ来て。帰るよ」

俺は総隊長さんに言われ、総隊長さんの指差す方向に歩く。
そして、次の瞬間、俺は部隊のビルの屋上にいた。
行きと同じ方法だったので今度は驚かなかつた。
すると後ろから総隊長さんが現れた。

「では、ここで良いから報告を」

俺は今までにあつたことを全部報告した。

……俺が意識を失つたことは話していない。

使い慣れていない能力で失敗し、殺してしまつたことにした。

話し終えてしばらく無言のままでいると、口を開いた。

「すみません。殺してしまつて」

「いや、良いんだよ。こちらこそすまない。
まだ中学生の君に人殺しをけしかけて」

「いえ……大丈夫です。

……今日はもう帰つても？」

「ああ。任務による特別給金はもう振り込んだいたから

聞きなれない言葉を聞く。

「特別給金？」

「ああ。特別給金とは通常任務とは別に、このよつな緊急な任務の
時に、

任務関係者に部隊から支払われる給料の事だ」

「……そうですか、ありがとうございます」

「いやいや、当然だよ」

俺は挨拶をして、屋上から階段でゆっくりと下に降りる。ビルを出てとめておいた自転車に跨り、マンションに帰る。初めての人殺しで、少し口ウテンション。

因みに言うと、今は朝5時。

約3時間の任務だった。

俺はマンションに着き、すぐに自室に入り、シャワーを浴びて着替える。

ハンガーに制服をかけ、朝食の準備をする。夜更かし？をしたので少し眠いが我慢する。

俺は、朝食を食い終わった後、少し早いが学校に行くことにした。

学校に着く。

今度はちゃんと自転車を置いていく。

クラスに入るがまだ誰も居ない。

そりやそうだ、HRが始まるまでもまだ1時間ぐらいある。

俺は今までのことを振り返った。

ここに来てからまだ3日ほどしか経っていないのに、紫達のお陰で随分性格が丸くなつたような気がする。

だが、それと同時に何か俺の中で渦巻いてる感覚がある。よく分からぬ。だが、奇術師を殺した時は、多分”ソレ”だ。

俺は今まで殺しなど勿論しなかつた普通の中学生だ。

だが、なぜか俺は”殺し”に慣れている感触がする。
なにか分からぬ感覚。

俺はそれを、強引にでも気のせいだと思つことにした。

だつて、これ以上考えたら俺が壊れてしまつ気がしたから……。

俺は考える事をやめて、睡魔に従い、眠つた。

「…………ア…………や…………」

「…………アイ、起き…………」

「アイ！ 起きてよ…………！」

「うわあ…………！」

耳元でいきなり大声をあげられて起きる。
目の前には紫がいる。

「紫？」

「まったく。いつまでも寝てるからそのままにしておいたけど、
HRが終わつても寝るなんて」

もうHRが終わつてしまつたのかと思い、辺りを見回す。
なんだか向こうの席に人だかりが出来ている。

「なんだ？ なんかあつたのか？」

俺は紫に人だかりの原因を聞く。

「今日、転校生が来たのよ。
この3日間で2人も美少年転校生が来たってことで学校中話題で持ち切りよ」

「美少年転校生？」

「そう。外国人だけど日本国籍の美少年よ。
まあ、アイには劣るけどね」

どんな奴だろうと思う。

すると、人だかりの中から金髪の少年が出てきた。
背は俺と同じくらいで、目は蒼い。
髪は眩しい金色。顔立ちは10人に10人が振り返りそうなイケメン。

するとこちらに向かって歩いてくる。

「ここにちは、貴方には自己紹介がまだでした。
私はハイト クラウドです。よろしくお願ひしますね」

と言つて笑つてくる。

流暢な日本語だ。一応日本国籍だから長い間日本に居るのだらう。
とか思いながらこちらも挨拶をする。

「俺は御神 哀。よろしくな。
えつと……」

どう呼んだら良いのか悩むと相手が言つてきた。

「ハイトで良いです」

「そうか、じゃあ俺の事は哀でいいよ」

「そうですか。哀。これからよろしくお願ひします」

「そう言って、軽く頭を下げる。

「いいって。そう何度も挨拶しなくていいから。俺達もう友達だろ」

するとハイトは顔を上げて笑う。

俺もそれにつられて笑う。

……なんか女子のほとんどから「絵になる」とか「哀クン×ハイトクン……」

とかいう声が聞こえたのは無視しておこう。
といふかほとんどが顔を真っ赤にしている。気絶している人までいる。

……これから大変そうだと思つて長い溜め息をついた。

すると後ろから声がかかる。

「ハイト君、私達と一緒に行動しない?
模擬戦とかで、ハイト君人気ありそuddだから大変よ?
それになま目でみる奴も居ないし」

と不知火が言つ。

「いいですよ。理由は置いても、哀と一度戦つてみたいですし」

「俺と？」

俺が問う。

「はい、そうです。哀は強そりで楽しそりですから」

「そりか……そりいえば一限目はなんだ？」

俺は紫に聞く。

「今日は1ヶ月後にある能力武闘大会の代表決めよ

「能力武闘大会？」

聞きなれない単語に眉をひそめる俺とハイトだつた。

第十四話 転校生（後書き）

大会はやつぱ必要でしょ。

因みにこれがある事の区切りになるでしょ。つ。

第十五話 代表決め（前書き）

みんな無茶苦茶な戦い……

第十五話 代表決め

「「能力武闘大会?」」

俺とハイトは同時に疑問を紫に言ひ。すると紫はハアと溜め息をついてから言ひ。

「ハイト君が知らないのはショウがないとしても、アイまで知らないなんて……。この学校の説明読まなかつたの?」

「そんなもの知らないぞ? それより大会つてなんだよ」

すると紫はまた溜め息えをついて説明し始める。

「能力武闘大会つていうのは、年に一度開催される『HEAVEN』の中にある学校が集まつてやる、その名の通り武闘大会よ」

それにつづいて後ろから不知火が続ける。

「代表つていうのは、その学校の交流大会にでる、それぞれの学校から選出される選手のこと。どの学校からも△クラスから出るから、ウチらのクラスで代表決めんの」

俺とハイトはその説明にナルホドと頷き、そしてハイトは言ひ。

「では、△のクラスからでるよつた上位の選手は誰なのですか?」

あるとき、向こうから聊爾が自信に満ちた声で言つ。

「そりゃあ、俺達だよ。だつてクラスの第5位までいるんだし」

「や、それは分らないよ……他の人だつて頑張つてゐるし」

聊爾の発言に困つた顔で言つ擲雪。

そこで不知火が言つ。

「まあ、とにかく訓練所行きましょー！」
「遅れるわよー！」

俺達は時間をみて、慌てて訓練所に向かつた。

そこで俺は驚く。

「すげえ……もつ直つてる……」

そう、俺がこの前ぶつ壊した天井や壁が綺麗に傷一つ残さず直つていたのだ。

いくらなんでも早すぎだが、それほど上手く直したのだろう。

俺達は先生と皆がいる所に走つた。

「それではこれより代表決めを行つ。

代表決めは、クラスでグループごとに6つに分けられており、力配分は均等にした。

因みに言つと、第1位から第5位はみんな違うグループだな！
ルールは氣絶するか降参するか、こちらの判断で決めた勝敗だ

その言葉を聞き、先生に対して野次が飛ぶ。
しかし先生はそれを無視し、言つ。

「それでは、グループごとに前にでろーまずは1グループ!」

「俺だな!」

そう言つて聊爾が前に出て行く。
ハイトが聞く。

「聊爾さんは強いんですか?」

俺は答える。

「ああ、俺でもやばかつたぐらい強い」

「それ、アイが言つとただの嫌味よ?」

紫に茶化される。

「つるせーな。それで、俺はグループどこだよ?」

「哀さんは4グループです」

琴雪が言つ。

「聊爾くんが1、紫さんが2、不知火さんが3、哀さんが4、私が
5、そしてハイトくんが6です」

「……本当にバラバラだな……」

俺はその事実に溜め息をつきながらも前を見る。

そこには、聊爾しか立つていなかつた。

もう始まつたのかといつ疑問はさておき、他の奴らはどこに行つたんだと

周りを見る。このクラスは30人なので、残りの4人を見失うわけが無いのに。

すると、俺達の更に後ろに、居た。

4人が倒れて重なつて、なんだかどんでもないことになつていた。

「代表、荒祇聊爾！」

先生の声が響く。

聊爾がこちらに走つてきた。

「やつぱり言つたろ」

「はいはい、次は紫か」

「じゃあ、行つてくるわ、アイ」

紫はそう言い、前に出て行つた。

先生が試合の始まりを宣言する。

その瞬間に、紫はもの凄い速さで1人の背中に行き、触れる。

そして、その生徒はもの凄い形相で訓練所から叫びながら出て行つた。

その光景に呆然として隙がある残りの3人に次々と紫はその手で触

れていく。

1人はその場で泣き崩れ、1人は白目を剥き泡を吐いて倒れ、1人は顔を真っ赤にしてその場で身悶えている。
………… 紫の能力ってやっぱ恐ろしい…………。

「だ、代表、佐屋紫！」

先生までもその地獄絵図を見て、同様している。
紫がうれしそうにこちらに駆けてくる。

「やつたわよ、アイ」

「けどあれはやりすぎだろ………… 一体なにを…………」

すると紫は黒く微笑して聞いてくる。

「ほんとに聞きたい？」

「いえ、やつぱりいいです…………」

俺は背筋が寒くなる思いで丁重に断つた。
………… 代表決め、なんかやばいな…………。

そう思い、更に気が重くなつた俺だった。

次は不知火。不知火は多分まともにやつてくれるだろ、と思つて
いたのだが……

「代表、不知火奏華！」

「……はあ……」

俺は溜め息をつく。

なぜなら、不知火までもまともな勝負をしなかつたのだ。
内容は、始まりの合図とともに地中から溶岩を回りに噴出させて、
これまた黒い笑顔で脅した。

あの時の不知火は、いつもとなんか違つた。

同じグループには、溶岩までも防御できる奴が居なかつたので、あ
つけなく降参。

それで今に至る、という訳だ。

「やつたぞ！」

不知火は喜んでいるが、他の奴には心的外傷トライアドになつただろう。

次は俺だ。

紫から、あなたも本氣でやりなさいと言われているので頑張りつ。
俺は前に出る。

そして先生が始まりの合図をする。

俺は風の向きを計算して、俺を中心に小型の、だが風速はある竜巻
をつくり、
ほかの奴らを吹つ飛ばした。

「代表、御神哀…」

「……これもまとも、じゃないよな……」

俺はそう呟き、皆の所に帰る。

かのとハイトがじつに来てます。

「凄いですね、哀」

「いや、ありがと」

俺たちは皆の所に一緒に行くと、琴雪がゆっくつと立ち上がり、前に出て行く。

「……行って来る……」

琴雪は……いや、あれは裏琴雪か、はコリコリと前に出て行き、戦闘を始める。

しかし、裏琴雪が手をかざした瞬間、

他の対戦者がみんな凍りの牢にいれられた。
その氷の牢は、中がどんどん凍り付いていく。
そして裏琴雪は言つ。

「……降参、しないと、氷付け、確定……ふふつ……」

背筋が凍つた。

この気持ちを味わつたのは俺だけではないだろつ。

対戦者たちはみんな青ざめて、恐怖のあまり言葉を詰まらせながらも降参の宣言をした。

「……代表、涼風琴雪……」

その瞬間、牢は砕け散った。
琴雪はこっそり歩いてくる。

「やつたよー 勝った！」

琴雪はうれしそうだ。

……良かった。『裏』じゃない。

……次はハイトか。

俺は見たことがない能力にたいして、期待を持っていた。

第十五話 代表決め（後書き）

琴雪がなんか怖いです。
あ、『裏』のほう。

いじりでなにかの思わせぶり

ここは、『HEAVEN』の外にある施設。なかには、肉が腐った匂いがたちこめていて、おもわず鼻を覆ってしまう。

中には、一人の研究者風の老人がいた。

頭には白髪が数本残つていて、後は全部抜けている。その身に纏う白衣は薄汚れていて、年月が経っているものだと推定される。

そしてその男の顔には、狂喜の表情が映し出されていた。

「やつたぞ！ 遂に長年の人類の夢が叶つた！

私は天才だな！ 私の研究作品の公開はもうすぐだ……。

今は仕込みの時期。焦らない、焦らない」

老人はふと後ろを向き、階段を降りる。その先には、巨大な試験管のよつにも見える培養装置が所狭しと並んでいる。

そしてその中には、胎児と思われるものから、老人のもの、色々なニー力がその中に入つていた。

「もうすぐだな。やはり失敗作を残しておいて良かった」

老人はその培養装置の中の緑色の液体に浮かんでいる少年を見た。それは、中学生ぐらいにも見える少年。それを、わが子を見るよつた目で見て、老人は笑つた。

「……『H·CRL』、早く見てみたい……」

そして「こはまた違う施設。

その中の一室、そこには大きなテーブルと、
その周りに椅子がたくさん並べられていた。

そこには、男と女がいる。

「もうすぐ、だな。ここまで時間をかけた
成果がもうすぐ出せる」

女が答える。

「はい。苦労しましたが、これもすべて
安寧なる能力者の自由の世界のため……」

そして女は男に敬礼する。

男はそれに敬礼を返す。

「能力者の自由なる世界のため……か……」

2種類の思わせぶりだったよ！
まあ、この事は色々予想してみてください。

第十六話 僕は……（前書き）

今日は晴れのち雨でしあづ。

第十六話 僕は……

ハイトが前に出る。

「ハイト君って強いのかな？」

琴雪が聞いてくる。

「まあ……Sクラスに入ってるんだし、強いんじゃないのか？」

俺は曖昧に返事をし、改めて前を見る。

ハイトの他に4人出る。

そして皆が定位置についた所で、合図がされた。

「開始！」

そして、ハイト以外の4人は動いた。

1人は自分の周りに火を出す。

1人は物凄い速さで加速し、ハイトの後ろに回っている。

後の2人は、お互いで何かの能力を出し合って戦っている。

そして、ハイトの後ろに回りこんだ奴がキックをする。
しかしそういふことは動かない。

何をしているんだ？と俺は思った。

しかし、その疑問は一瞬で拭い去られた。

なぜなら、次の瞬間。

全ての人の動きが止まった。

だれも、動きを中断して動こうとしない。

何が起こったのか分からぬ。

皆も睡然としている。

そして、4人は同時に降参を宣言した。

ハイトが何か言っていたような気がしたが聴こえなかつた。

そして先生が試合の終わりを宣言する。

「代表、ハイトクラウド！」

俺はハイトに駆けていつて、言った。

「ハイト、何をしたんだ？」

俺は自分で分かるくらい興奮して聞く。

「それは、秘密、ですよ

「なんだよ……」

結局、ハイトは何も自分の能力に関して喋つてくれなかつた。

俺はチラッと他の4人を見たとき、

皆、顔が青ざめていて、首に細い切り傷があつたように見えた。

俺はハイトが、目に見えない何かをしたことまでは分かつた。
しかしそれ以上が分からない。

俺はどうしてもハイトの能力が知りたくなつて、
能力を調べる方法を、授業中ずっと考えていた。

そして、昼休み、俺は思いついた。

簡単に相手の能力が分かる方法があつた。
試合を申し込むんだ。それ以外方法は無い。

俺は先生の所へ行き、事情を話した。しかし断られてしまった。
曰く、能力武闘大会が近いのに、代表同士戦わせて怪我されたら
学校に責任が取れないうらしい。

どうしても模擬戦をしたい場合は、大会が終わってかららしい。

俺は、潔く諦めた。

そして俺も、大会の後の模擬戦日指して特訓をしていた。

……普通、大会の方を優先するのだが、それは置いとひつ、うん……

……

その日の授業が終わり、俺は一目散に家に帰った。

……次の日、話を聞かなかつた罰として、みんなから色々されたの
は割愛。
トラウマ

だつて心的障害だもの。

そして、俺は今、マンションに居る。

先生の話だと、代表は、部隊の訓練室を特別に借りて、大会の準備
ができるらしい。

俺は明日に備えて早く寝ておこう。

そう思つて俺はベッドに入った。

琴雪？

『おきて！ 哀くん！』

紫?

『お・き・て・ア・イ』

ハイト?

ふふ、起きてください。哀君……』

なんだ? 何か恐ろしい夢を見ていたよ。まあ、気にしないでね! べ。

だつて気にしたら負けだし。

俺は今日は皆と部隊の訓練所で特別授業だったことを思い出す。
俺は朝飯を食い、外にでる。

悪夢？つぽいので早めに起きたが、俺も学習する。

「一度寝はしない。俺は時間に余裕があるので歩いてこいへ」と
にした。

俺はまだ朝が早く、どこも開いてない商店街を歩いてくる。
普通にこのまま行けばまだ早く着くだろうと予想していく。
しかし、俺のその計算には誤算があった。

そう、『普通』でないことが起こってしまった。

「ああああ……」

どこからか聞こえる男の小さい悲鳴。
その声の小ささと
まだ時間が早いからか誰も出てこない。
道には俺一人。

俺は気になり、また路地裏に入る。

とこりかこの頃路地裏トラブル多いな……と自分でも思つ。
しかし俺のその[冗談の考えは一瞬にして無くなつた。
目の前には、3つの、首と胴体が離れている死体があつたからだつ
た。

「つ……」

俺はその死体の顔をみた。

まるで最後まで拷問されて殺されたよう、やがんでいた。

俺は、いままでいろんな死体を見たからか、あまり吐き気とか、気分悪くなるのとかは、どんどん薄くなつていった。

これが『慣れ』だとおもつた。

自分がこの前、人を殺したときよりもなにも感じない。自分が酷く冷たい人間に思えてきた。

しかし、その俺の感情と同じようになっていた
その静寂を、悲鳴が破つた。

俺は咄嗟に後ろを振り返る。

琴雪がいた。

琴雪の顔は、じちりを見て、恐怖で固まっている。
死体に、それを無表情で見下ろす俺。

俺は琴雪が俺を疑つてゐるのに、気が付いた。

「違うんだ！
誤解だ、琴……」

「近づかないで！ あっちにって！」

俺の言葉は信じてもらえた。

琴雪は俺がそれでも近づこうとする悲鳴をあげて逃げていった。俺の心には、なぜか酷い空虚感が広がっていた。

第十六話 僕は……（後書き）

こんど、すこし長くしてみたいですね。
因みに、まだハイトの能力は秘密です。
しかし、考えるなら低く考えたほうが無難ですよ?
ですが俺は……

第十七話 僕の殺人と無駄の蘇生（前書き）

総隊長の能力の詳細がついに！

第十七話 僕の殺人と無駄の蘇生

……俺は今、部隊のビルの一室にいる。

その部屋には、机が一つに椅子が一つある、尋問部屋だつた。机を挟んで目の前には、部隊の下つ端らしきオッサンがこっちを睨んでくる。

しかし、俺はその視線を無視し、別の事を考えていた。俺は、琴雪のことが気になつていた。

あの時、琴雪は絶対に俺を見て怖がつた。多分、あの時の俺は、人殺しの顔だつた……と思う。怖い思いをさせたし、そして誤解を招いてしまつた。

俺は溜め息をついた。

が、その仕草が勘に触つたらしく、相手が怒鳴つてくる。

「おらあ！ なんとか言えよ！ お前はあの場所で何をしていた！ さつさとそれを聞き出さないといけねえってのに、答えるよ、殺人犯！」

「……それはどこで決めた？」

俺は真つ先に俺を殺人犯と決め付ける相手に対し、すこし殺氣を込めた。

それが俺なりの、『人殺し』ではないという逃げなのかもしれない。しかし、その殺気に気がつかない相手は更に罵倒の言葉を浴びせる。

「ああ？ そんなの決まつてるじゃねえか！ 第一発見者の女だよ！」

しかし、殺氣を放っていた俺は、その言葉で一瞬放心状態になつた。

……琴雪が？　この疑いが晴れたらまた普通にしていく、と思つたのに……

俺は悲しくて、辛くて、あんなにも仲が良かつた琴雪に、怖がられて、誤解され、それだけではなく、あまつさえ、真つ先に決め付けたのが琴雪？

「なんだよ、急に黙つちまつて、なんだ？
その女の子に惚れてでもしてたのか？
はつはつはー　こいつはいい！　例えそつじやなくとも友達に裏切られた気分はビリう？」

その言葉を聞いて、俺はもう我慢ができなくなつてしまつた。

「黙れよ……」

「は？」

「黙れつて言つてんだよおおおおおおーー」

俺はその事実から、例え本当に殺人などしていなくても、琴雪に裏切られた事が、なによりも辛かつた。それは自分勝手のエゴかもしれない。ただ、怖がられるのが嫌なだけかもしれない。でも、俺は……

その時、声が響いた。

頭の中に直接響くような声。

ノイズがかかっている、壊れたスピーカーのような酷い音。

その声？は言った。最後の言葉だけハツキリと聞こえた。

『奪いたければ殺す。守りたくても殺す。逃げたくても殺す。それが二ーンゲンの本能』

そう、それは、まぎれもない…………

俺自身の声だった。

そして俺は氣付く。

頭の中の声に氣をとられていた。

時計を見ると、先程から5分も経っていた。

?なにかが時計のガラスについている。

それは蛍光灯の光を反射し、赤黒く輝いていた。

やけにヌメヌメとした脂っこい物体。

俺はそのまま上のほうにある時計を見ながら、立ち上がる。

しかし、足元が滑る。

なんだ？と俺は下に目を向ける。

そこには、

赤い海が広がっていた。

まさしく、血の海。目の前の壁には人型の皮袋が縮れている。
そしてそれを中心に、血が流れている。

部屋が狭いので、本当に水溜りのようにたまっている。

そう。一言で表すならば、血が全て抜けた皮袋があった。

「そんな……俺が、また？」

「あーーー、またやつてくれましたね、御神くん」

俺はその声に驚き、後ろを振り向く。
そこには、総隊長さんがいた。

「……俺がやつたんですか？」

「そうだよ。その様子だとまた暴走したみたいだけどね……」

俺は総隊長さんに聞く。

「俺は、本当に関係ない人を殺してしまいました。

俺はどんな罰でも受けます」

俺は自分の気持ちを素直に言つ。

しかし総隊長さんの答えは意外なものだつた。

「なに、罪などではないよ。それよりも君はお手柄だよ」

「……はい？」

総隊長さんは人だったものを指差し、言つ。

「『』の男はね、『スパイ』なんだよ。

その名も能力者解放戦線『HUMAN』^{ヒューマン}の、ね」

「『HUMAN』、ですか？」

「『HUMAN』^{ヒューマン}とは、能力者を保護し、拘束することに反対し、
『UnInstall』^{アンインストール}どころか世界政府にまでテロやクーデター

を起こす奴らです。

そいつらのスパイが『イツなんですよ』

そう言い、総隊長は皮袋を踏む。

「でも、俺が関係ない人を殺してしまったのは事実です。

俺はどうすれば……」

「じゃあ、死んでなければいいんだ。
私の能力を見せるよ。名は『完全削除』^{アンインストール}。

発動内容、対象の『死』という事実と『嘘』という概念を……

「……」

『削除する』

その瞬間、世界の本当に小さい一部が改变された。

「信じられない……」

俺は呟く。目の前には、あの、スパイのオッサンと、能力を使って一息している総隊長さんがいた。

「これが私の能力。

全ての概念、森羅万象を、削除する力。

……まあ、削除しか出来ないのがチョットね……」

さりげなくサラリと凄いことを言つ総隊長さん。

俺はその総隊長さんに心の中で、一生懸命感謝した。

「よかつた。なにもなくて……」

しかし総隊長さんの目つきが鋭くなる。

「さて、次は……スパイに尋問をしようつか……」

第十七話 僕の殺人と無駄の蘇生（後書き）

いろいろありますよ……。

展開早くないですかね？

何かあつたら感想に書いてください！

第十八話 皆を信じるコト（前書き）

幕間と関連付けられるか、ですかね？

第十八話 皆を信じる『人』

総隊長さんはオッサンを睨む。
そして、驚き顔のオッサンに告げる。

「わらわ正体を現せよ。お前、能力者だろ？」

するとそれを聞いたオッサンは、いきなり立ち上ると、姿が変わった。

まるで顔から体まで全てが別人のよう。

その正体は、なんと女だった。

容姿端麗、という言葉がよく似合つ。そうな女で、長髪は真っ赤に染まっていた。

「まつたく、ばれてて、それでいて姿を見せないなんて無理だわ」

嘘がつけないことが分からぬのか、その女は言つ。

……ああ、そうか。総隊長さんが女の『嘘』という概念そのものを消したからか。

だから女は嘘そのものを知らないと言つわけだ。

「お前は……『HUMAN』か？」

総隊長さんはいきなり核心をつく。
それに対し、女は言つ。

「……やつね、やつこいつとなるのかじりへ

「その曖昧な答えはなんだ？」

「……私はこの部隊の誰かに変装して殺人をして、その罪を御神哀つて奴に

擦り付けて、更に御神の能力を探ることよ。

その命令に従つたは良いけど、誰に命令されたか思いだせないし、なにか途中で目の前が真っ暗になつたと思ったら、この状況つわけ

「

女は本当に色々教えてくれた。

しかしながら?

この女の話し具合からすると、狙いは俺にあるみたいだ。

「お前は、なんだ?」

総隊長さんは女に聞く。

「私は、『—H·CRO（ホムンクルス・コードリプレイコニー）』よ」

「ふざけるな! 普通の名前を言え!」

「…………私は…………」

そう女がなにか言いかけた時、それは起きた。

女がいきなり爆発した。

それは、体内に強力な爆弾を仕掛けっていたような凄まじいものだった。

そして、それほどの爆発がこの狭い室内で起きたらどうなるか、もうお分かりだろう。

俺は咄嗟のこと、能力を使うのを忘れ、叫んだ。

しかし、爆発の衝撃はこない。

俺は前を見ると 爆発もなはせなく
代わりに総隊長さんがいた。

「まったく、こんな場所で爆弾なんて使うものじゃないですよ。
それには御神くんの方が対処し易いんですから、
もうちょっと訓練頑張りましょう?」

ふふ、と総隊長さんが笑い、そんな事を言う。
しかし、あの女は？と思つ。

「…………あの女は？」

「死にましたよ。あんな強力な爆弾を体内で起こされたんですから、もう粉々で塵も残つてませんよ」

……それはやはり組織に口説かれたところだね。

俺はそのまだ名しか分からぬ組織に対して、酷い嫌悪感と怒りを覚えた。

すると総隊長さんが書いてくる。

「……君にはいつかちゃんと事情をお話しますから、とりあえず今だけは時間を下さー」

「…………分かりました」

俺は、部隊の事情も考え、渋々ながらも納得した。

「御神くんの友達には事情を話してください。」

彼らも知りたいでしょ。彼らは第1会議室にいるので

「…………いいんですか？」

「私が、許可します」

俺はなぜかは追及せずにゆつくりと、そして丁寧に
総隊長さんに感謝の意を込めて礼をした。

俺は今、部屋の前にいる。
その部屋の入り口ドアには、『第1会議室』とある。
俺は、入るのに緊張してきた。

皆は俺をどう思うだろ？

もし怖がられたとしても、俺はあいつらだけは殺したくない。
俺は覚悟を決め、ドアを開けた。

「グバッ！」

……なんの音だらうか？

この声は、俺？

あれ？ なんだか天井が正面にある。

なんか地面に落ちる。

痛い。

「…………つて！ 何をするんだよ…」

俺は前にいる、俺を殴り飛ばした張本人、不知火と紫に言ひつ。そう、ダブルパンチだった。

不知火と紫は口を揃えていう。

「「琴雪を泣かせた罰…」」

すると後ろからか弱い声が聞こえる。

「もう、大丈夫だから、私が悪かつただけだから…………」

琴雪だ。前にでてきて不知火と紫を止める。そして必然的に俺と目が合つ。

俺は謝るつとする。

「あのな、琴雪、その……「『めんつ…』……は？」

いきなり琴雪が謝りだした。

「『めんなさい！ わ、私、怖くて、一瞬でも、哀君のこと怖いとお、おもちゃつて… ほんとに、『『めんなひやい…』』

琴雪の田は謝罪の言葉を紡いでいくたびに、どんどん涙がたまつて
いく。

そんな琴雪を見て、俺はそのまま琴雪を抱いていた。
背中をさすりながらこう。

「もういいんだ。もう、気にしないから。
俺のほうこそ悪かった。

もう、お互に様だ。もう謝らなくていいから。
……これからも、よろしくな、琴雪」

「哀、君……アイ君!」

琴雪は俺の腕の中で泣いた。

俺はそれをずっと抱いてやる。

その時の俺は、もう既に隠し事をする気はなかつた。
皆に知つてもらつて、理解してほしかつた。

……もしかしたら、一番慰めてほしいのは……

第十八話 皆を信じるコト（後書き）（あき書き）

主人公、すこし精神的に成長？しましたかね？
といふか本当に中学生ですかね？

第十九話 理解（前書き）

なんか感想がないよ！
あと短いのしか書けないよ！

第十九話 理解

俺は全てを皆に話した。

俺が、つい最近まで『外』にいたこと。

そこで、能力が暴発して人を殺したこと。

それを紫に見つかって、そのまま『HEAVEN』に入ることになつたこと。

俺の能力の希少性と秘匿性が分かり、部隊配属になつたということ。
そして、任務中にまた人殺しをしたこと。
さらには、先程のことも話した。

「……これが俺が隠してきたことだ。

皆、俺が怖いと思ったら離れても良いんだよ……」

皆は沈黙する。

それはそうだろう。

友達が実は人殺しだったなんて……。

するとまた不知火と紫が動く。因みに今度は雪も混せて。

なんだ?と俺が思っているときなり、
トライブルパンチ!!をくらつた。

「グバハあつ?!

俺は殴られた頬を押さえて床で悶える。

「あんたね! また何かウジウジしたこと考えてただろ!

「私たちとはそんなこと気にしないからー。」

と不知火。

「まつたく、私はいつも、常にアイのことを理解しているつもりよ。そつじやないと部隊に入れさせたりしないわよ」

と紫。

「……哀君、もう何も気にしないって言つたじゃないですか。

私はもう、哀君がどんな事をしても、ずっと一緒にいますからー。」

と琴雪が言つ。

「……そつか、俺が間違つていた。

俺は気にしそぎて、逆に皆を信じきれてなかつた。

ふと3人の後ろに立つる聊爾と田が合ひつ。

聊爾もフツと笑う。

皆は、こんなことで友達を捨てる訳ないのにー。

俺は、改めて他人を信じたくなつた。

「……皆、ありがとつ

と俺は皆に感謝する。

もう裏切りたくないといつ思いを込めて、感謝する。

不知火は、

「バカヤロー、今更かよー。」

と言つてくれる。

紫は、

「ふふ、アイに感謝されるなんて、なんだか嬉しいわ……」

と言つてウフフと悶える。

……なんか怖い。

琴雪は、

「もひ、私達から離れないで下さいね……。（特に私から）」

顔を真つ赤にして言ひ。

最後になにか呴いたがよく聞こえなかつた。

すると聊爾が手を打ち鳴らす。

「よーしー、皆ー、

もひ話は済んだなー、俺もお前の事は気にしてねえからー、
じゃあ、行こうぜー！」

俺や3人は首を傾げる。

「「「何処へ？」」「」」

すると聊爾は顔を前に傾け、ハアと溜め息をついてから言ひ。

「……大会の訓練」

「 「 「 「あー」 」 」

「あつて、お前ら……」

俺達は、急いで訓練室へ向かう。

……もう、いつの間にかもうすぐ昼だし……。

「 そ う い え ば 、 紫 と 哀 は 部 隊 に 秘 密 裏 に 所 属 つ て 言 つ て た け ど 、 訓 練 室 に は 行 つ た こ と あ る の ？」

と琴雪が聞いてきた。

「ああ、前に何回か、な」

ここに来たのは、実は転入した日以外にもある。
だが、この話はまた今度。

俺達は地下の訓練室に向かう。

皆が集まる。

俺の前には俺以外、紫、琴雪、不知火、聊爾がいる。

なぜこうなつたかつて？

……それは、大会に向けての訓練の時に、

俺の能力は強すぎるから、1対4でやろうと皆が言ったのだ。
因みに、ハイトは今日は用事があるらしいから休みだ。

といひか、理不尽だ。

無理だな。

しかし、皆は以外と残酷だった。

無慈悲に試合開始を告げる聊爾の声。

その瞬間、氷柱の束と雪の雪崩がいつきに俺の田の前まで来た。

……まじで理不尽あんど無慈悲あんど手加減なし。

第十九話 理解（後書き）

何度もじつにこようですが、作品途中でも良いですから、感想をくださいいい！

第一十話 模擬戦1対4！（前書き）

バトルシーンは以外と楽に書ける……のかな？

第一十話 模擬戦1対4！

俺は能力を使'う。

俺の体の前全体に空氣を放出し、すばやく後ろに移動する。
目の前に落ちていく岩と氷。

……あんなの食らつたら死んじまう。

俺は後ろに走り続けながら皆に聞く。

「そりいえば、本当の能力使つていいんだっけ？」

すると皆がこう返す。

「「「「いいよー・面白そうだしー.」」」

4人とも良いみたいだ。というか面白そうつて……。
よし、それじゃあ久しぶりに使つてみますか。

俺は地面に手をつく。

それをみて何か感じたのか不知火がこちらに岩石を飛ばしてくる。
さすがだな、やはり大地の使い手だ……。
しかし、

「もつおそいよ……『ランドナパーク大地噴火』……なんちゃって」

俺は不知火の能力を真似し、溶岩を噴出させる。その中に岩石が入つて融ける。

溶岩の奔流が皆に襲い掛かる……前に聊爾が空間を割つてそこに溶

岩を流し込んだ。

すると不知火が驚いた様子で言つてくれる。

「なんだよ、今のは！ どうやってやったんだよ？」

「正確に言つと、不知火の『大地噴火』とはちょっと違つ

ランドナパーク

「正確に言つと、不知火の『大地噴火』とはちょっと違つ

不知火は不思議そうに首を傾げる。

俺はそのまま続ける。

「俺がやつたのは、不知火みたいに地中深くにある溶岩をそのまま持つてくるんじゃなくて、俺が触つた地面を間接して奥の地面を溶岩化させた。

まあ、これは何回もやつてると地盤が崩れちゃうけどね」

「なるほどな、じゃあそれはもう使えないって分けだ！」

俺が説明を終えると同時に聊爾がそう言い、こちらの後ろに回る。どうやら空間を渡つてきたり。

これは模擬戦なので武器は使用しても良い。

勿論、大会でも良いらしい。

聊爾は模擬戦用の刃が潰された刀でこちらに攻撃してくる。

「おつとー！」

俺はそれをよける。

と同時に風を操り、聊爾を吹き飛ばす！

しかし、聊爾は刀を咄嗟に地面に突き刺し、それを耐え凌ぐ。どうやら俺の風は予測していたらしい。

すると、琴雪のものらしき氷柱が飛んできた。

俺は避け切れなかつた。

この立ち位置とタイミングではかわせないとふんだ。
しかたなく、俺は『切り札』をだした。

前々から思つていた。

俺の能力を応用すれば、どんな攻撃も消せるのではないか、と。
俺の能力は何度も言つているが応用が無限に広がる。
だからこそ、俺はいつもどんな応用ができるかを考えている。

俺は能力応用をした。

皆が驚きと好奇心にみちた顔をしている。

なぜなら、俺が飛んできた氷柱を、俺の肌に当たつた瞬間に蒸発させたからだ。

俺は考えた。

俺の能力は物理法則など普通に無視する。

俺は、自分の周りだけに神経を集中させ、触れたものは全て蒸発するように能力を使つた。

これがあれば、まさしく核が来ても放射能を無害な物質に変え、無効化することが出来る。

この能力は本当にとんでもない物だつたらしい。

……後で総隊長さんに聞いたんだが、俺の能力は秘匿性が更にあがり、
國のお偉いさんには『核にも負けない』といつキャッチコピ―が宣

それはともかく、俺は氷柱を消した後、琴雪に近づいた。

風で高速移動し、後ろに回る。

これは学校の順位決めの時と同じ手。

だがそれは通じなかつた。

俺の手刀は、琴雪の首に当たつた瞬間、凍りついた。

俺は驚く。やはり、皆は俺と戦つてどんどん能力を応用していって

いる。

俺は肌にふれた『氷』のみを蒸発をせしようにして、攻撃するが、大量の氷が襲い掛かつてくる。

いくら肌にふれた氷を蒸発をせると言つても、相手の物量が多ければこちらが押し負ける。

俺はそのまま、吹き飛ばされた。

……その先に、紫がいた。

紫は綺麗で滑らかな動きで俺に攻撃を繰り出す。

……はつきり言つと、格闘戦はやはり紫が上だつた。

経験の差、といつやつだつた。

俺は遂に倒され、紫に肩を掴まれる。

「これで私達の勝ちね……」

その瞬間、俺の体になにかが入つてくる感触。

紫の能力と気付いた時にはもう俺は、気絶していた。

「ん……」

俺は目が醒める。

トナリのアシダラゲシ・アリゲトリ

わのものは夢だつたのか？ だとしたらどうから？

と俺が考へてゐると、田の前にいつの間にかあつたドアが開く。

そこには、裸の紫がいた。

「グhaar！ 紫！ な、な、なに、何を…」

俺はこちからに近づいてくる紫をなるべく体を見なこよつて見る。紫は色気を込めた流し目でこちらを見て呟つ。

「何つて、私はいまこんな格好で、ベッドにいるのよ？」
分かつてるんでしょ？ ア・イ？」

そして俺は……その後、紫に……

目が醒めた。

「はあ、はあ、はあ」

俺は周りを見渡す。

ここは、部隊の治療所。

ベジタリアンのアドバイス

龜井虎、思セノ

作に荒々馬を引かれて前を見る

……すると、すぐに扉が開く。
そこからは、紫が出てきた。

俺はその日一番の叫びをあげた。すると紫がこちらに寄つてくる。

「何よ、アイ。いきなり叫び声なんてあげちゃつて。何か人に見られちゃいけないことでもあつたの？」

と、わざとらしきひざを見る。

「別に、そんなわけないだろ……」

すると紫が顔を赤くして俺を指差して言つ。

「もう少し前に、その、り、立派なモノをどうにかして……」

俺はなんだ?と首を傾げるが、その答えはすぐに分かつた。

「うわあー！」

俺は下半身を素早く毛布で隠す。

……やひぱつあの夢が原因だらう。

俺は紫に問いただす。

「おい、紫。

あの夢はお前が見せたのか？」

「……確かに私は、アイが私についての夢を見るように、脳に働きかけたけど、どんな夢を見るかはアイが私のことをどう思っているかで決まるはずだけだ？」

「…………」

俺は一瞬で喉が干上がった。

俺が紫のことをどう思つてるかって！

嘘だろ？ 俺の精神本当はあんなことを思つてたのかよ！

しかも紫に見られたし！

俺は恥ずかしくて死ぬかと思つた。

「まあ、アイのアレを見る限り、どんな夢を見たかは予想つくけど

「…………フフッ」

当の本人である紫は嬉しそうに頬を紅潮させ、俺は恥ずかしくて頬を紅潮させていた。

「…………まじで、嘘だろ…………」

第一十話 模擬戦1対4！（後書き）

……哀は紫にもフラグを立てたようですね。
といふか、立たせられた？

第一十一話 去年の大会（前書き）

凄いシリーズ。

第一十一話 去年の大会

俺はその後、普通に復活して、訓練を続けた。

それから何回も皆で集まって訓練をした。

皆で訓練をすると時間が経つのが早い気がして、あつという間だった。

……途中からハイトが訓練に加わったけれど、結局能力は教えてくれなかつた。

そしてあつという間に1ヶ月が過ぎた。（省略と言つた）

訓練をしている内に、段々皆の能力がどんなタイプなのか分かつてきたのだが、

なんと言つか……なぜか前衛タイプが多い。

俺は言わずもがな中衛タイプ。だつて風使いつことになつてゐるし……。

そして、遠距離タイプが琴雪。氷はある程度遠くまで作れるし、なによりこの中で一番体術がダメだつたからだ。まあ、本人には言わなゐが。

そして、前衛が、聊爾、紫、ハイト、不知火だ。

聊爾は基本は空間を渡り、刀で攻撃するし。

紫は接近しないと能力が使えない。体術も一番強いし。

ハイトは、自分で前衛が良いと言つて來た。そのほうが都合が良いらしい。

不知火は、無闇に前にいると、岩石などの餌食になるからだ。

そういうわけで、超攻撃タイプの布陣ができたのだ。

因みに言つと、大会は、『個人戦』と『チーム戦』の一つある。

チーム戦は、それぞれの学校から6人のチームを作り、色々な仮想ファーリドで戦う攻略戦だ。

個人戦は、その代表の中からそれぞれ1人ずつ選ばれた選手がバトルロワイアルをするというもの。なぜバトルロワイアルかと云うと、普通に『HEAVEN』内の学校の数が少ないからだ。

ちなみに俺が個人戦に出場する事になった。

皆によると、やっぱり俺が一番強いかららしい。

……俺はそうは思わないのだが、みんながそう言つのである。

さて、俺達は今、大会の場所に来ている。

と言つても、場所は内の中学の校庭なのだが。

こここの校庭が一番広いかららしい。

結構な見物客が来ている。勿論ほとんどが能力者だろう。

中学生のレベルがどれ位か見たいのだ。この大会には全中学校がでるし。

『Universe』のスカウトも来ている。

因みにスカウトに混じつて、飛騨さんが来るのは……氣のせいに違いない。

と云うか久しぶりの出番だな飛騨さん。

俺は皆と共に選手控え室に行く。

「どうか、今回人多すぎ！ なんで全校に人が揃ってる訳？」

聊爾が言つ。

俺が聞き返す。

「揃つてるつて？」

「それは、去年の時は、1年だった事もあるかも知れないけど、ちらほら団体戦に6人揃つてないとこがあったのよ」

紫が隣で言つ。なんか鬱陶しそうだ。

「そついえば、去年勝ったのはどこなんだ？」

俺が聞くと、ハイト以外は皆悲しげな表情をして、俯いてしまった。俺はハイトに視線を向けると、ハイトも、さあ？と言つた表情をしていた。

するとしばらくして琴雪が言つ。

「その、ね。去年にね、ちょっと事故があつてね……」

すると不知火が顔を上げて言つ。

「ちよつと、琴雪ー。」

「いいんだよ。言つても、良いでしょ？ 奏華……」

すると不知火は「いいよ……」と言つてまた顔を俯かせる。

「ちょっと私達には辛い記憶なんだけど、団体戦で事故があったの。能力者同士で能力のぶつかり合いになつて、誰かが怪我したりすると、

大会本部が処置をとるんだけど、それが間に合わなくて、私達1年の部のチームを率いてた、1-Sの第1位、不知火 総哉という人が死んじゃつたの。

原因は大量出血によるショック死。

あの時本部が間に合つてれば……！」

琴雪が珍しく真面目に悔しそうに言葉を詰まらせる。しかし俺は気付く。

「ちょっと待て、不知火つて……」

「そうだよ。奏華の双子の兄。あの時……「もう良いよ……」奏華……」

不知火はいつになく悲しそうな笑みを浮かべて言つ。

「もうその事は、いいから。早く控え室に行きましょう……」

そのまま、不知火は先に行つてしまつた。

「琴雪、あの時つて？」

俺は失礼と思いながら、どうしても聞きたかった。
不知火の兄の事を。

「あのね、能力者との戦闘で事故がおきたつて言つたけど、
その言い方はちょっと違うの」

「？」

俺は首を傾げる。

だが琴雪は続ける。

「総哉が死んじゃったのは、相手に攻撃されたんじゃない。私達を守るためなのよ……」

「なつ……！」

「そう、総哉の能力は『ブランクループ血液循環』という能力で、まさしく血液を操る能力。その自分の血液を凝固させた盾や矛は、すごい力だった。

それでね？ その力を使って、私達全員を守ったのよ……。相手の能力が暴走して、雷が私達に大量に降り注いだ。それを、完璧に防御したのよ。けど、雷に当たった血液は変出して、体内に戻せなかつた。

そして大会本部は暴走が起こつたことを隠蔽するためにこれを事故とした

俺は言葉が出なかつた。

不知火の兄は事故ではなく相手の暴走のせいで死んだ。

俺が何を言つて良いか分からないと、琴雪が言つ。

「けどね、奏華はちゃんとその事を乗り越えて今ここにいるの。だから、哀も安心して良いよ」

「かな。安心できるはずがない。

俺の心は、この事実に対しても大きく揺れ動いていた。

第一十一話 去年の大会（後書き）

どうでしたか？

奏華に双子の兄がいたこと判明。
結構悲しくないですか？

自分でもそう思います。

第一十一話 暗闇

俺は、結局何も出来ずに皆と控え室に行つた。

そこには、先に行くと言つていた不知火が一人、椅子に座つていた。

「あ、皆来たんだな！」

不知火が、さつきの事を気にしていないといつ素振りで俺達に気付く。

だけど俺は気付いていた。

不知火の目が、心なしか赤く充血している。

（まつたく…… 1人で無理しやがって……）

いつも元気な不知火だが、今はそれが偽りだとすぐに分かる。

俺は何を言って良いのか迷う。

すると、急に不知火の眼光がきつくなる。

その視線は、俺達の後ろにある。

俺達は後ろを見る。

そこには、1人の茶髪の痩せ細つた男が立つていた。

不知火が、心なしか何かを押し殺した声で言つ。

「何で、お前がここに来てんだ……」

俺達の後ろにいる男は、俺達にはまるで興味が無い、といった感じで間を通りて不知火の前に出る。

そして口を開く。

「よつ、不知火の妹。なあに、唯の挨拶だよ」

「ふざけるなー本当に何をしに来たー死にたいのかー」

いきなり不知火が怒鳴りだす。

男の口調からして知り合いらしいが、それに不知火の事をわざわざ『不知火の妹』と言つた。

まさか、とは思うが、俺は皆に聞く。

「おー……まさか、あいつは……」

すると聊爾が答える。

「ああ、あいつが……」

聊爾の顔が苦虫を噛み潰したかのような苦しい表情になる。

「あいつが、総哉が死ぬきっかけを作った雷使い、一条 裕だ」

……やはり俺の予想は正しかった。

この状況で来るということは、精神的に不知火を搔き乱すつもりか？
それとも……

「ああ、俺が来た理由は別にあるよ。ちょっとお前に謝る事があつてな」

「なんだ？ 1年前の謝罪なら必要無い。私はお前を許さないから

すると一条はクッククと薄ら笑いを浮かべて言つ。

「そりじゃない。俺が謝りたいのは、俺が嘘を吐いていたからさ」

「嘘？」

不知火が咳き、不知火や皆は訝しげな表情を浮かべる。

その表情を見て、満足したように一条は馬鹿にしたような笑みを浮かべ、言つ。

そこから発せられた言葉は、俺を含めて皆を愕然とさせるにはお釣りがくるぐらいだった。

「実はあの暴走事件、俺は別に暴走してねーんだよ。ぜーーんぶ、でっち上げの嘘なんだよ！」

その瞬間、皆は驚愕し、不知火はショックでフラフラと田を見開き揺れている。

そして更に一条は言葉を紡ぐ。不知火への^{サイアクの「トドバ}素敵なプレゼントとして。

「俺は、あの時、どうにかして大会一位、そして同年代の中で一番強い能力者、という

『栄光』を手に入れたかつた。だから、調べたのさ！

あの忌まわしい能力、『^{ブラッドループ}血液循環』の場合、その能力によつて出した血は

高熱によって、人体に有毒な成分が発生するという事を！

だから俺は暴走に見せかけ、大会では禁止されている殺傷レベルの能力開放をした。

そしたら俺の予想通り、あいつ、不知火は自分の血を一瞬だけ致死量分取り出したよ！

その後アイツが倒れた時はスーっとしたよ！
はははははっ！」

そして瞬間、不知火は一条に殴りかかつた、が、一条がその瞬間不知火に言つた。

「良いのか？
俺を殴つて？」

「……………何が何事だ？」

不知火は、どうにかして自分の怒りを抑えているようだが、すぐにでも殴りかかる様子だ。

一条は不適に笑う

「こんな時、試合前に相手チームのリーダーを負傷させたなんていつたら、後ろにいるお前らのチームメンバーにも迷惑掛かるんじゃねえの？」

不知火の体がビクッと震える。
そうだ、こんな試合の一ヶ月前でも怪我をせまいことピコピコしていたのだ。

理由なんて聞かれず、今回の大会の出場不能はもちろん、もしかして相手チームのメンバーをしかもリーターと言っていた一条を負傷させれば、たら学園

に多大な責任と迷惑を押し付ける事となつて停学、最悪の場合退学になるだろう。

しかも、そんな理由で退学はなれば、ハサウエーくれる中学なんていだらう。

別に『HEAVEN』内は義務教育なんて無いのだ。

……悔しいが、一条がそれまで計算しているとなると、不知火の性格からして引き下がるを得ない。

しかし俺の中には、大切な友達とその兄が、たった一人の本当にちっぽけな自尊心のために馬鹿にされ、拳句の果てに屈辱的に殺されるという事実に対する悔恨と憤怒の他に、何かどす黒いモノがあつた。

ソレは、以前にも何度か感じた気持ち。
全てを壊そうとする破壊的な衝動。

俺は、またそれに耐えられず、意識を闇に落とした。

……暗い、真っ暗な中に浮かんでいる感覚。

それは、いつに無くはつきりと、俺の意識は感じ取っていた。
何かが見える。

……あれは、俺？

小さい子供がいる。それは見間違はずも無く、昔の俺だった。
まだ5歳になるかならないかの頃。
ここは、どこだ？

俺の記憶には無い場所。

どこかの山村のようだ。俺はそこで女の子と遊んでいる。
同年代ぐらいの女の子。顔はもやがかかつた様に見えない。
声が聞こえる。

「ねえねえ！ * # % ちやんば、おねがくなつたらなにこなるの？」

聞き取れない。俺が言つてゐる言葉。

名前に入るだらつ場所にノイズがかかつていて、名前のまゝすら分
からない。

分かるのは、相手の女の子に言つてゐるであらつて言葉だとこつ事だ
け。

「わたしはね、おおきくなつたら、アイくんのおよめせんになつて
あげる！」

その女の子は笑顔で言つ。顔が見えないのに笑顔が分かるといつ、
矛盾。

俺は嬉しそうに答える。

「ほんと？ やつたあー！」

すると急に視界がぼやける。

その場所が一変、違う場所に移り変わる。

そこは、炎で赤く染まつていた。

その中にいる、俺と女の子。

今はなぜか10歳前後に見える。

俺泣いている。

「じりじり、じりじりこんな事になつちやつたんだよー。」

それを女の子が優しく包み込む。

「大丈夫だから、アイくん。ずっと、私達、一緒にいるね？」
神様、どうかアイくんだけでも助けてくれますように……」

そして、記憶は途切れた。

なんだ？記憶？

だが俺の記憶にはあんなの……無い。

すると急に暗い中に光が戻る。

……ここは、どこだ？

俺はあたりを見回す。あの記憶？も気になつたが、今ここは現実らしい。

すると、気付く。

この部屋は、血なまぐさかつた。
俺は恐る恐る前を見る。

……そこには、

バラバラの、『一條』があつた。

しかし、なぜか俺の心はスッキリしていた。
だが、気になる事がある。皆はどこだ？
あらためて部屋内を見渡す。
そして俺は驚愕した。

崩れた壁の下敷きになつてゐる聊爾。

窓が割れて、そのガラスで血まみれになつてゐるハイト。

壁は響く、座りながら、と死んだよ、力が抜けている、悪魔の足元につぶやかれて、ある不印火。

そして、俺を止めるより俺の腰を掴んだまま、顔を蒼白にしてい

卷之三

その光景に、俺は、俺の精神は、耐え切れなくなつた……。

第一十一話 暗闇（後書き）

……いきなり超シリーズです……。
私は作品に過剰に感情移入する性質なので、
こういうの書いてると、心が暗くなります。
みなさん、どうですかね？

第一二三話　『H.C.・R』計画（前書き）

これからシリーズになるでしょ、。

第一二三話『H.C・R』計画

俺は、叫び続けた。

もしかしたら俺は、だれかにこの状況を見つけて貰い、自分に贖罪をしたいのかもしれない。

しかし、それは叶わなかつた。

「まつたく、つるといですよ?」

俺はハツとして後ろを振り向く。

これは、前と同じ状況。

一ヶ月前、俺に殺人容疑がかかつた時に、手を差し出してくれた声。そこには、総隊長もとい、無骸零がいた。

「総隊長さん? どうして?」……

「それは、この大会は凄く有名なものだから、いつもお忍びで遊びにきてるんです。

それでたまたま御神君達に挨拶でもしようとしたらこの状況、と

いうことですよ。

あ、因みに誰も気付きませんよ? この部屋の周りは音の概念は消しましたから」

「……総隊長さん、いえ、無骸さん! どうか、どうかこいつらを助けてあげて下さ!」

俺は必死になつて頼み込む。未だ俺の腰にしがみついたままの紫を見ながら。

総隊長といつ肩書きを持つ人にではなく、無骸零その人自身に。

しかしその願いは遮られた。

「それは無理ですね」

「な、なんですか？！ なんで、助けてあげられないんですか？」

俺は間髪入れず叫ぶ。

もう俺はこうする事しかできなかつた。目から何か垂れるが気にしない。

すると、俺の顔を見て、総隊長さんは困つたよつて苦笑いを浮かべ、言ひへ。

「こやあ……だつてその子達、みんな氣絶してゐるだけですよ？」

「……………は？」

思わず間抜けな声を上げてしまひ。

だつてそつだらひ、助けてくれなこと言つたとおもつたら、その理由が氣絶してゐからなんて。

俺はもう一回注意して眴を見てみる。

すると、俺の腰にしがみついてゐる紫、よく耳を澄ますと、

なんかスヤスヤと音が聞こえる。

足元にいる不知火だつて、「う……うう」とか唸つてゐる。

「…………総隊長さん」

俺は腰にある紫をそつと傍にあつたソファに寝かせて置く。

総隊長さんは満面の笑みでこちらを見る。

「なんですか？」

「……騙さないで下をこつ…」

「うわー！ いきなり大声上げないで下をこよ。紫君が起きりやい
ますよ？」

「そんな事より、よくもからかいましたね？」

すると総隊長さんはハハハと笑つて言つた。

「いや、だつて、敵の狙いが君の能力暴走なんだから、まずは冗談
でリラックスしようと思つて」

「いや、この状況でリラックスつて…………て！ 敵つてなんです
か！」

「まだ気付いてなかつたの？ ほら、君の方もせつと立ち上がつ
てよ。

もつねタバレしてるんだよ？」

俺はなんの事だと思い、再び辺りを見回す。

すると、俺の前にあつた血だまりから、バラバラになつたはずの…
…一條が立つた。

「な、なんでお前……死「死んでねえよ」……なんでだ？ なにが
起つたんだ？」

俺は自分が氣絶していた間に何が起つたのか分からなかつた。
一條は答えようとなかつたが、代わりに総隊長さんが全て分かつ

てこるといった感じで答える。

「御神君が能力暴走になりそうな間に、そいつは何かで君の能力を封じた。

そして一瞬の事で混乱している他の5人を気絶させたといつ所かな？」

「へえ、その通りだよ、無骸さん……。

本当はこのまま俺は隙をみて逃げる予定だつたんだが、まさかあんた直々に来るとはな」

俺は何が起こつたかは理解できたが、一つ分からぬ事があつた。

「しかし、それでは一条はどうやって俺の能力を、しかも暴走しているものを回避したんですか？」

すると総隊長さんはゆっくりと苦しい顔で言つ。

「……そろそろ潮時か。丁度『実験』の当事者もいるんだから話やう。

私は、ずっと推測していた。

それは、テロ組織『HUMAN』の拠点を攻めたときに入手した、俺と一部の人間しか

見ていない書類。

……これをH.C.-R文書と言つ。

それに書かれていたこと、それは、神の名を騙つた悪魔の計画。

そこについた計画とは……『Homunculus Plan』。

人が神の所業を真似て作った異形の生物、ホムンクルス。

『HUMAN』では、人口的に生命を誕生させるという計画があつた。

そしてそれを実験素体とした付隨計画、『Code-Play Plan』。

知つているか？

近頃の若い能力者は勿論、情報規制がされているからあまり知られていないのだが、

第3次世界大戦終結直後の初期の能力者の中には、
極稀に、『重複能力者』という、複数能力を使う者達がいた。

……『Code-Play Plan』とは、

その重複能力者達という存在自体を『再生』するために作られた計画。

まあ、私が今の意味を持つ結論に辿り着いたのは、一ヶ月前の事が
あつたからだが

俺はその事実を聞いて、ただただ呆然としているだけだったが、最
後の言葉で思い出す。

そう。あの時も俺は嵌められそうになつた。

そしてその女は、自分を『HC-RO』と言つていた。

そして俺は一條を見る。

一條は、総隊長さんの話を聞いてニヤニヤ笑つていた。

そしてよつやく言葉を発する。

「お～おお～たりいってか？ さすが無駄零だな。その洞察力と組織力には感服するぜ」

俺はさつきから気になっていた事を言つ。

「……一糸、お前は何なんだ？『HUMAN』の構成員か？」

「ん――？ 半分正解だ。といつかお前には話しても良いつて命令だからな。話してやるよ。

俺は『HUMAN』（ホムンクルス・コードドリープレイエイク）だ。正真正銘、そこの無駄零が話した人工生命体で、それでいて重複能力者だ。

俺の能力は『雷電閃光』^{ライトニングブレイ}と『能力無効』^{アンチセプト} すげえとおもわねえ？

……俺は驚愕した。能力の詳細は知らないが、能力を無効するらしき能力と雷を併用できるなんて、

「化け物め……」

そうだ。こいつらは人間では無い。

俺は総隊長さんを見る。

すると総隊長さんは俺の視線に気付き、答える。

「一條裕、部隊の総隊長直々に、つかまえるよ……」

「へつ！ やれるもんならな……」

第一二二話『H.C・R』計画（後書き）

実はの展開。

なにか物語の設定が、じちや、じちやしてきましたが、
分からぬ点がありましたらどんどん聞いてください。
遠慮しなくて良いですよ！

第一十四話 戦闘！対『HC・R1』アインス（前書き）

なんかこの小説、どんどん読む人が少なくなってるみたいですね。
この、駄文の真髄ともとれる小説を読んで下さる
皆様、本当に感謝です。

第一一十四話 戦闘！対『HC・R1』アインス

「やれるもんならな！」

一条、いや『アインス』は動いた。

能力の名前に負けない、まさしく雷の速さで消えたのだ。

俺は本能に従い咄嗟に前に飛ぶ。

その瞬間、俺が元いた場所に雷が奔る。

「ちいっ！」

俺は体に風を纏う。雷には遠く及ばないが、これで身体能力強化ができた。

俺は室内を見渡す。

右も左も、果ては天井までも雷がバシバシと奔る。

これではまるで話に聞いた事のある『縮地』だな、と思いつつ、近くにきた雷を避ける。

雷は常時火花を散らしているので、雷の速さは見えなくとも、攻撃は確実にかわして行く。

「これも、訓練の賜物かな……」

「『氣を逸らしていいのかよっ！』

その瞬間、一筋の雷が俺に迫り……そして消えた。

「なつー！」

「茶番はここまでですよ？』

総隊長さんが今まで雷があつた場所に手を翳している。

「畜生！ ならこれはどうだ！」

その時、アインスは俺にラッシュを繰り出してきた。

「おつらいらいらりあ！」

「クツ！」

俺はそれを最低限の行動でガードする。
しかしそれが罠だった。

俺は風の揚力で後ろに飛ぼうとして、一瞬ガードを緩めた。

だが次の瞬間、アインスの拳が俺の鳩尾に入った……。

「ガハツ！？」

何だ？ 何が起きた？

俺はガードこそ緩めていたが、それは一瞬で相手のリー・チから離脱する

用意があつたからだ。

だが、その時、そう、俺が能力を使おうとしたその瞬間、能力が発動しなかつた。

俺はなにが起つたのか分からず倒れ伏した。
床に倒れたまま俺はアインスを見上げる。

「お前……何をした？」

するとアインスは俺を見下して言つ。

「忘れたのか？　俺の能力」

……あいつの能力は、『雷電閃光』と、あと一つ……

……そうか、あと一つを使つただけか……。

くそっ！　油断していた。雷の攻撃を止め、肉弾戦に切り替えてきた時に

気付いていればよかつた！

「後悔はしたかい？　じゃあ、死んどけよ！」

そして次の瞬間、アインスは俺めがけて雷電を放つ。だが、またそれが消える。

「私の事も忘れてもらつては困りますね！」

それは総隊長さんだつた。

やはり総隊長さんは強かつた。俺の能力も、充分強いらしいのだが、圧倒的に経験が違う。

能力の使い方やそのタイミングまですべて完璧だ。

今はアインスと総隊長さんが肉弾戦を繰り広げていた。

アインスが隙を突こうとしてまたラッシュシュをするが、

総隊長さんはそれを簡単に全て避け、アインスに足払いをする。

アインスは空中に飛び、雷を展開させ後ろに下がり、一時的に距離をとる。

まさしく熟練の戦いだった。田にも止まらぬ速さで繰り広げられる

田の前の戦いに、

こんな場合でも畏敬の念と、自身の不甲斐なさが感じられた。

しかし、俺の気持ちは一瞬でかき消される。

なんと総隊長さんが雷を食いついてしまったのだ。
まさか！

「お前！ まさか『能力無効』を！」

「ああそりゃ！ 能力が無きゃなんもできねえ」「イツに食らわせてやつたのさ！」

どうだよ『総隊長さん』！ お前はこんな痛み味わった事ねえだろ！

いつも能力に守られてばっかで苦しみなんてないだろ！ なんとか言えよ！」

「グゥツ！」

アインスはなぜか怒鳴り散らしている。

まさかアインスはなにかあったのか？ いや、それよりもあれをなんとかしなければいけない！

俺はダメージがやつと引いた体で立ち上がり、アインスに攻撃を仕掛ける。

もつ手加減なんてしない！ 俺の全能力を使って、アイツを倒す！
駆け出した。

こちらに気付いたアインスが攻撃を止める。

「今です！ 離れて下さい！」

俺が叫ぶと一瞬で距離をとる総隊長さん。
俺は集中する。

そして俺は、相手が放つ雷を受け止めた！

「なんだよお前、自殺でもしたいのかよ！
はははははは……はは……は、何だよー 何なんだよお前ー！」

AINは驚愕に顔を染める。

俺は、雷を受け止めた瞬間、その物質を解析し、そのまま腕の中で球体にして回しているのだ。

それを見た総隊長さんはやれやれと言った感じで言つ。

「まったく、やっとその能力の使い道が見出せましたか……」

そうだ。この応用が俺が見出したもの。

相手の能力を瞬間解析し、球体状にして安定させて自分の力として使う技。

だがその事にも気付かず、AINは焦つて、必死に見たことの無い能力に対しても抵抗をしていたが、それも無駄だ。

俺はその雷さえ、俺の体に当たつた瞬間取り込み、プラズマとして手の中の球体に押さえ込み、そして更に圧縮していく。

そして相手の攻撃が途切れたところでソレを放つ。

「これで、終わりだ……」

俺は自分の能力で作り出した独自の物質、超圧縮プラズマ球体を、光速で打ち出す。これにも雷の力を使っている。

その明るい光を放つ球体は、アインスにあたる。

その瞬間、それは破裂し、中に溜まっていた膨大なエネルギーと共に超高圧電流が流れる。そして部屋の中が昼より明るくなる。

アインは断末魔の叫びといつてもいよいよつな叫び声を上げる。

そして、その体から焦げ臭い煙をだして、床に直で仰向けに倒れた。

「……忘れたのか、アインス。どんな物質も状態に関わらず俺の味方なんだよ……」

俺は意識があるかないか、定かではないアインスに向けて呟いた。：

第一十四話 戦闘！対『HC・R1』アインス（後書き）

補足説明、『^{アンチセプト}能力無効』で、
何故最後のプラズマ球体を防げなかつたといつと、
この能力は、相手に触れてから自分の意思で発動し、1分だけ
能力を発動させなくなるものなのです。

もしこの他に疑問などの質問ありましたら、感想に書いてください。

第一一十五話 仲間と共に.....（前書き）

短すぎるとー。

こんな場面なのに短い！

これはやばい。

第一一十五話 仲間と共に……

アインスとの戦いの後、部隊が事件の事を秘密裏に処理し、俺と、起きた皆は部隊のビルの総隊長室にいる。

そこには、総隊長さん、俺、紫、琴雪、聊爾、不知火、ハイト。それと小隊隊長の飛騨さん、紫の弟の明がいた。総隊長さんが皆揃つたのを見るとゆつくりと口を開いた。

「今、皆さんに集まつて貰つたのは他でもありません。御神君だけは教えましたが、他の人にも関係の無い話では無くなつてしましました。

私が話したいというのは、飛騨君、明君、それに紫君達も知つていた事です。

そう。H·C·R文書についてです」

その言葉を聞いた途端、部隊所属の3人は驚愕し、聊爾達は首を傾げていた。

「皆さんの中にはいままで関係無かつた人達がいますが、説明させてもらいます」

そう言つて、聊爾達に俺が教えられた事実を全て教えた。『HUMAN』による人工生命体と重複能力者の再生。

その話を聞いた時、皆の顔は信じられないと言つていた。

「あの……それで私達に何をしろと……？」

琴雪が総隊長さんに聞く。

「……言いにくいが、今回のアインの騒動で君たちもこの事件の関係者となってしまった。

私達は君たちを保護せてもらひ。

そして、これは苦渋の末に判断したことだが……

来るべき決戦の日には、君たちにも協力して欲しいんだ

「なつ！ そんなのダメです！ 鮎は、まだこいつに来ちゃいけないのに…！」

俺は総隊長さんの言葉に息を詰まらせながらも言ひ。 そうだ。これは俺達の問題だ。皆を巻き込むわけにはいかない。しかし、それは本人達によつて拒まれた。

「……私にできる」となり

「分かりました。私は助けになつてみせますー！」

「俺もやつてやるー！」

「僕もいじりますよ。鮎さんのためになるなら」

皆が次々に承諾していく。

「ダメだ！ お前ら分かつてゐるのか、ここからは殺人の世界なんだよ。

お前らはそれを分かつて「そんなの分かつてるよー」……なツ！」

琴雪が叫ぶ。自分の思いを必死に伝えよつとして。

「そんなの、皆分かってるよ。…だけど、だけビ、皆は渋ぐんの仲間なの！」

「私たちは、自分の為にそつしたって言つてるし、これは私たちの本当の気持ち。」

「もう一人で背負わないでよ。私たちだって助けたいの！」

「俺は何も言つ返せずにうなだれる。」

すると紫がこちひらに来た。

「……アイ」

「なんだ……」

「…皆は、あなたの仲間であり友達でしょ？
だったらアイも皆を信じてあげなきゃ？」

「……俺は、いつだつて皆を信じてる。
だから、皆ー！」

「俺は叫ぶ。」の想いを。

「俺は、お前らを信じたい！…だからー
お前らの力を貸してくれ！…俺を信じてくれー！」

「当たり前だよ、哀くん」

「何を当たり前の事をこつてんのやー。」

「そんなの最初っから分かってるに決まつてんだろー。」

「僕も前からそう決めてましたよ」

皆は笑つて、俺に返してくれる。

何も心配する必要なんてなかーたんだ。

なこを送つてたんだらの俺だ。

こんな事、最初つから俺も分かつてたのにな.....

俺は部隊の監にも目を向ける。

そして……蝶。

「私たちもアイの仲間よ。」

まあ、分かりきつてゐるでしょうが。フフッ

俺は紫の笑みに、思わず顔を綻ばせた。

「ああ。やうだなつー。」

俺は仲間を信じ、決戦の日を迎えるようとしていた。

「此一にれかがひよひしへな

גַּם־עַל־בְּנֵי־עֲמָקָם־בְּנֵי־עֲמָקָם

また一歩、新しく踏み出せた。

第一十五話 仲間と共に……（後書き）

主人公。

また新しく何かを見つけたようです。

性格も最初と結構変わっていますし。

もし決戦の時を書くのだったら、長めになると思います。

第一十六話 調査と訓練（前書き）

すぐ決戦ではありますんよ？

・今はまだその刻ではない - b y 作者

第一十六話 調査と訓練

「……それで、総隊長。ホムンクルス達に対する対策は?」

飛騨さんが言いはじめた。

俺や皆は総隊長さんを見る。

「はい、そのことについてなんですが、つい今さっき新しい情報が入りました。

『HUMAN』の新たな研究施設の田星がついたようです。皆さんには、そこを調査してほしいのですが……」

「分かりました。それで、誰が行くんですか?」

明が答える。

総隊長さんは「クリと頷いてから言つ。

「これは、とても危険で、秘匿性の高い任務です。しかも、未だ『U n I n s t a l l』部隊に登録していない、君達4人は行けません。

なので、調査として、紫君と哀君に入つてもらいましょう」

「なんで俺達2人だけ?」

俺は総隊長さんに聞く。

すると総隊長さんは当然のように言つ。

「調査に人員を引き裂く訳にもいきませんし、かといって、能力が高く

自由に動ける人は貴方達2人しかいないんですよ

「明は？」

「僕はあちらの4人に、体術を教えなければいけないので
そうか。あいつらは能力は高いが体術はあまりやったことが無い。
明なら適度に鍛えてくれるだろう。
そういうことなら。

「分かりました。紫と一緒に入ってきます」

「私も全然構わないわ。寧ろ大歓迎よ」

「はは、頼もしいですね。
しかし油断はしないで下さいよ?
もし誰か居たならば捕まえるように」

「「はいっ！」

すると横のほうから何か聞こえる。

「いいな……私も哀くんと一緒に行きたかった……」

琴雪がそう言つていたが、しおうがないんだ。
だからそんな目で見るな……。

「……因みに何時いくんですか？」

俺はどうにかして琴雪の視線から外れるために聞く。

「いや、今すぐですよ。」

「ええ――――。」

「だつて、早く行かないと逃げられる可能性ありますし」

「……分かりました」

「了解。ほら、アイ行くわよ」

紫は渋々了解する俺の手を握って連れて行く。
琴雪があー！とか言つてるけど、よく分からん。

俺達はその後即行で制服に着替え、出発した。
外には車があった。

俺達はそれに乗る。

すると運転手がそれを見て出発させる。

どうやらこれから少し離れた所にあるらしい。

そんな事を思つてみると紫が擦り寄ってきた。

「ん？ どうした紫？」

「ふふ アイの近くこいたいのよ」

「てつー！ わ、お前！ こんな時に何言つてゐるんだよー。」

「まあ、良いじゃない？」

そんなこんな事が車内では起つていた。
道のりはもうちょっと続く。

一方その頃……

琴雪SHIDE

「では歸れど、しありに来てください……」

「JiJiは訓練場。明君が真ん中のほうで手招きしている。
……明くんは多分小学生高学年ぐらいだと思つけどやつぱり私達よ
り強いんだよね……。

私達4人は明君の所に向かつ。

「まずは、皆さんの体術の技術から見ていきますので一人ずつ来て
下さい。

まずは、聊爾さん」

「応!」

聊爾くんは相変わらず元気な声で前に出て行く。

「では、これから試合を始めます」

そう明くんがいつた瞬間に、聊爾くんは何の躊躇いもなく右の拳を
だした。

私は明くんに当たつたと思ったが、そこには何もなかつた。

次の瞬間、聊爾くんは足元を崩して倒れてしまった。
そこには、聊爾くんの陰になつて明くんがいた。

「振りが大きいですね。もう少し小回りを聞かせるようにしてください」

明くんは冷静に指摘する。

聊爾くんはすぐ起き上がる。

「いて……やっぱり部隊に入つてゐるだけあるな。凄いぜー。」

そうなのだ。聊爾くんは普通の男の身長より高い、大柄なのに対し
て、

歳の違いもあるだらうが明くんは見た目は華奢な体をしている。
やっぱり凄いと言つだけはある。

でも一つ心配な事がある。

多分私達4人の中でも一番まともな聊爾なのに、
私なんかが体術で勝負して大丈夫かな……

「はあ……なんだか不安になつてきたよ……」

考え方をしていたらいつのまにか奏華の番になつてた。

……また速攻で倒されてしまつた奏華。
悔しがつてゐるけど……。

「もうダメかも……」

私の不安は大きく積もるばかりだ。

御神SIDE

俺達は今、『HEAVEN』の外にある、支部に来てこる。何処かというのは企業秘密。そこで支部長の中年の人によさそうなおっちゃんから話を聞いてくる。

「その建物の地下に研究施設が隠れていることが確かとなりました。何が研究されているかは分かりませんが……本部から来たお二人とも、お気をつけてください」

そう言われて、目標の建物への地図と、その建物の見取り図が渡される。

話によるとスパイを投入して調べがついたらしい。

「行こうか、紫……」

「分かつてゐるわよ、アイ」

俺は紫と一緒に、研究施設に調査をいれる。

任務の前に来る独特の重圧感がくるが、2人ならなんでもない。

俺は妙に頼もしい紫と一緒に、その目標に向かつて進んで行つた。

第一十六話 調査と訓練（後書き）

哀と紫で行く調査で起じること。
それに、琴雪の思う訓練の不安。
それを書くのが難しい。

また『ヒューマン』サイド。

「リーダー、例の研究所ですが……」

ある高層ビルで女が言ひ。

いかにも秘書風といった感じの女だ。

その言葉に対し、中年らしき男の声が返る。

「ああ、確か『H E A V E N』にばれたんだろ? まつたく、あちらも我等と同じ事をしてくるとは……」

「まつたくです。やはり『H E A V E N』は腐っています。あとその研究所は放棄したので。因みに先程、

その『H E A V E N』へのあの計画、やつとドライの最終調整に入ったと研究所から……」

「やうか、あと一步で始められる。

そして我等が世界を正す。この能力者に対する世界の反応を変えてみせる。

……では、頼むぞ。博士にも、フィアをもつ少し早めに作れるよう頼んでくれ

「分かりました」

そう一言言つて、女は出て行つた。

男は一段落ついたと言わんばかりの溜め息をついて、椅子に座る。

「……ヌル、アインス、ツヴァイ、ドライ、フィア。

非常時でヌルが欠ける事になつたが……………」これでこの計画も最終段階

男は何気なしに咳く。

「『H-CR』計画。ホムンクルスとはよく言つたものだ。
……」これで世界が変われば良いのだが……」

場所が変わつて研究所。

「ほう。ほうほう。これは興味深い！
今までのコードナンバー0～2より更に進化するとは—
やはりホムンクルス！ 謎が深まるばかりだ！」

老人はそう言つと、後ろを振り向く。

そこには、手術台と言うべきものがあつた。

その上には、布一枚被せられていない、美しい体を持つ女がいた。
十人に十人が振り向きそうな美貌を持っている。

しかし、その瞳は光を映していなかつた。

それはまるで、壊れた機械、いや、人形と言つべきものだった。
だが老人が驚くのは他にある。

「いやいや、これは流石の私でも驚いた」

そう呟きながら手にとる資料。

今はもういらないヌルが送つてきた、部隊の写真付名簿。

老人が見ているページには、名前が書いてあつた。
そこには写真があり、その写真の脇には『佐屋 紫』と書かれていた。

そして、その写真に写っている美貌と、ドライは、完全に完璧なまでに、
双子のように同じだった。

……ホムンクルスの謎を追え！
次週をお楽しみに！

第一一十七話 電撃戦！？（前書き）

……毎日更新つて案外疲れるんですね。
けど長い休みに入りましたし、もしかしたら一日一話なんてことも
……。

「もへじ！」

私は今、明くんと模擬戦をしていた。

模擬戦といつても、体術だけの

てこる。

そして私は今尻餅をついた所。

「いつたたたた……」

お尻をさすりながら立ち上がる。

するとすぐ前に厳しい顔をした明くんがいた。

「……………珍重さん、これは醍醐寺あるよ?」

能力ではなくまずはこれから始めたほうがよさそうですね……」

「へ？ いや、私はその……体術はちょっと苦手で……」

「そんなもの理由になりません！」

これから始まるのは本当の意味での殺し合いなんですよ？」

明くんが怒鳴つてくる。

そうだ、私は勘違いしていた。

心の底で甘えていたのだ。

私はその事実を改めて感じ、うな垂れた。

明くんは私を見てハアと溜め息をつき、言つ。

「しようがないですから。今から体力を作れ、と言つても無理ですから。

あなたの持つている武器の訓練をしましょうか」

「へつ？ 武器？」

私は思わず変な声を出してしまつた。
そして氣付く。

「あ！ これですね！」

私は腰についた二つのホルスターを手に取る。
そう、前々から出番が無く、空氣と化していた私の能力の他に使える力。
銃だ。

拳銃程度の大きさの銃が二つ。

私はしばらくこれを使うことが無かつた。

だが、体術ができる私には大きな味方となるだろう。

「そうです。その双銃の上手い使い方を徹底的に仕込むから、覚悟して下さい？」

と明くんに黒い笑みで言われた。

「は、はい……」

私は少し怖かつたかもしない……。

琴雪 SIDE END

御神SIDE

「おお——！」

俺は驚きに大声をだしていた。
それは、『HUMAN』の実験施設と教えられたビルが、とてつもなく大きかったからだ。

「もう少し静かにしたほうがいいわよ?
もつここは敵陣なんだし」

「おつと……」

俺は紫に窘められて我に返る。
しかし、本当に大きいビルだ。
部隊のビルも高層ビルだし、そういうビル自体見慣れていない田舎者でもないのだが、
目の前にあるものは今まで見てきたなかでも大きかった。
とこりかうらやましい。

このビルを部隊にくれ！と言いたいぐらい。

俺と紫は、勿論監視カメラの穴をかいぐぐつて此処まで辿りついた。

「……情報によると、このビルには地下があるらしいわ。
その地下で実験が行われているらしいわよ」

「じゃあ……行こうか」

因みに、言い渡された作戦は驚きのものだった。
だいたいの人がこういうシチュエーションでは、
侵入作戦があるだろうと思つてゐるだろうが、それは違う。
紫は何も言わなかつたが、俺だつて内心呆れていたい。

そう、この作戦は、たつた15分で地下までおり、有力書類を持ち
帰り、

それのついでで研究装置を破壊するといつ、『電撃戦』だった。

……俺達はまずは、ビルの裏手に回り、警備員を氣絶させる。
そして裏の扉から中に入る。

お互いで360度全てを見渡しながら俺は能力を発動させる。
俺の周り、紫の周りを除いた全ての物質が削られていく。

風を使って、長い年月でできる『風化』と『掘削』をしてゐるのだ。
俺は、紫と自分の体を風を利用して宙に浮かせる。
そして、もうくなつてゐる床を突き破り地下に入る。

その瞬間、生暖かい空気が肌にふれた。

俺達は床に降り立つ。

そして、そこの匂いに顔を顰める。

「なんだ？ この匂いは？」

その匂いは、腐敗した肉のような匂いだった。
周りを見渡す。

そこは、機械だらけの部屋だった。

右を見ても機械、
左を見ても機械、

そしてその中央に位置する手術台のよつなもの。

すると、二つの間にか横で機械をいじっていた紫が言つ。

「ダメよ。」Jのデータは全て抹消されているわ。
どうやら向こうに二つともいち早く感ずかれたらしいわ

「やうか……」

どうやら向こうもバカではないか。
いち早くここを放棄したらしい。

しかも、上にあるビルは関係ない所らしい。
どうやら地下を貸していただけのようだ。

俺はどうにも残念で、手術台に腰掛けた。
そして気を抜いた次の瞬間、

こちらを見ていた紫の顔が驚愕に染まった。

なんだ？どうした？

俺は何故か熱くなっている自分の体を見る。
そこには、真っ赤で大きな華が咲いていた。
そしてその中心からでる一本の……手？

俺は後ろを振り向く。

そこには……紫がいた。

紫？は俺の体から手？を引き抜く。
すると何故か意識が遠のく。

そしてそのまま、俺は意識を失った。

第一十七話 電撃戦！？（後書き）

うちの主人公は何回死にかければ気が済むんでしょう？

第一十八話 戰闘！対『HC・R3』ドライ（前書き）

戦闘です。

第一十八話 戦闘！対『HC・R3』ドライ

くそ、体が熱い。

それで目が醒めた。

今まで、意識を失うなどして痛みはほとんど無かったが、今回ばかりはそうもいかないようだ。

体から『生』が抜け出していく感触。

今は熱いが、段々冷めていく体。

俺はそれと同時に湧き上がる激しい痛みに悶えていた。

致命傷を受けた時は、痛みはほとんど感じずに死ぬらしいが、そんな事は無いようだ。

そんなことを考えていると、段々さつきまでぼやけていた視界がハツキリしてきた。

目の前には、戦闘をしている、同じ顔の人間。だが違う点もある。

一つは圧倒的な戦闘能力の違い。

俺の知らない紫は、人間には到底できない動きをいとも簡単にしている。

それに対して、紫はいくら訓練されているとは言えども、それが人間の上限。

そして二つの違い。

それは眼の光。

知らない紫は、まるで人形のように、光のない眼をしている。

「くそつ、今すぐ、行く、ぞ……紫……」

うまく言葉が紡げない。
それに気付いた紫。

「！？ 動いちゃダメっ！ アイ！」

「つむせえ…………ガハアっ！？」

俺の口から何か鉄の味がする赤い体液が出てくる。
……『りやヤバイかもな……』。

その時、その部屋全体に、声が響いた。

それは、知らない紫が発したもので、くしくもそれは、俺を庇ってくれる紫と同じ声だった。

「余所見をしていて良いのか？ オリジナル？」

そして、赤が舞い上がった。

それは、一瞬の出来事だった。

俺を少しでも気にかけてしまった紫の背後に迫った影は、紫の肩の付け根を、文字通り『貫いた』。

「いっ、きやああああ！ あああ！ 痛い！ 痛い！ あああ……」

その手？は俺の腹に風穴開けたのと同じ要領で、紫の右肩を貫き、
そして千切った。

俺の目の前に倒れる紫。

その様子は、いつも上品で、優しい大人のものでは無かつた。
ただの女の子。

そう。いくら部隊にいるからといって、いくら大人びていっても、

まだ俺達と同じ中学生。

その子は、一いちうを見る。

「痛いよ……アイ……」

その泣き顔は、俺の記憶と合わさつた。

能力暴走時にファイードバックした俺のものらしき記憶。

その時見た、泣き顔。

それは紫そのものだつた。

俺は、もつ、この子を泣かせたくない。

この子が笑える世界を作る。

それが俺の夢であり目的。

例えこの身が朽ち果てようとも、俺は、この世界〔エイジヤウ〕を守る！

「……紫、俺が、守つてやるから。あの時できなかつた事を

「え……？」

「…………能力、『祖體制御』〔マテリヤルコントロール〕発動。

イメージ、『再生』。対象、能力使用者の傷全て

なぜかスラスラとでた単語。能力名。

そして能力発動する感触。

それと同時に戻つていく傷跡。

「いぐそ……」

するとその様子を見ていた知らない紫が言つ。

「その能力は記録にありますが、まさか再生を任意で行えるようになるとは。

それと私の製造名は『H.C. - R3』。ドライと呼んでいただいて結構です」

「やつか。やつぱりお前はホムンクルス、……しかも3体目。そこまで進んでるか……。

おい。お前はなんで紫と同じ姿と声をしてる?」

「その質問には答えられません。そうですね……もし3の戦闘で万が一あなたが勝つような事があれば、博士に回線を繋ぐよりこじりと命令されてるので。その時に」

「成る程、勝てば良いんだな……」

その瞬間、ドライは吹き飛んだ
否、俺が吹き飛ばした。

風を強い竜巻ほどでたたきつけたのだ。

しかし、空中で体勢を整えて壁に足を着くドライ。

その瞬間、なにかが飛んできた。

「チイツ！」

俺は咄嗟に横に飛んだ。

そして元いたところを見ると、床が凹んで潰れていた。

「能力『グラビテーション重力加担』。

この不可視の攻撃にあたるとあなたは潰れますよ?」

「おーおー、見た目に似合わない凶悪な能力だな……」

俺は、能力を右手と左手に集中する。
もう油断はできない。いくら紫の姿をしていても、まつたくの別人。

俺は相手の隙をつきながら、紫に近づく。
今までいた床がどんどん潰れていく。

しかし、それを避ける。

そして、紫とドライの間に立つ。

「……できればこれは使いたくなかったよ

「?」

「へりいな……『崩壊』」

俺は右手を伸ばして空気を間接的に操る。
ドライの周りの物質を捕らえる。

そして俺は、その原子を、『崩壊』させた。

原子の崩壊、これは核分裂を表す。

核分裂を無限にしていくそれは、膨大なエネルギーをためていく。
そして俺はそれを、全能力を使い、掌握する。
額から汗が流れる感じがする。

一步間違えば紫も危険に晒してしまつのだ。

目の前では、いきなりの事に反応できないドライがいた。

「なんです……これは……こんなもの、データに……」

そして俺はそのエネルギーから、掌握を止めた。
その瞬間、膨大なエネルギーは拡散し、放射能を撒き散らす『核爆
弾』となつた。

俺は瞬時に、左手に用意していた能力を使つ。

「つ！ 間に合え！ 『変化』！」

そう叫ぶと同時に、俺と紫の周りを囲む、放射能とエネルギーを一
切通さない絶対領域を作る。

そして、部屋内で拡散するエネルギー。
それに巻き込まれるドライ。

そして、爆発が起きた。

ドガアアアアアアアア！

轟音と共に、閃光が出て、そして、地下が崩れた……。

第一十八話 戰闘！対『HC・R3』ドライ（後書き）

地下が崩れた。

紫、哀、ドライはどうなったのか？

ドライの秘密とは？

紫と哀の関係とは？

第一十九話 身代わり（前書き）

……タイトルどおりの内容。

第一十九話 身代わり

琴雪 SIDE

私達訓練組は今、哀くん達が偵察任務に行つた所へ急行している。勿論、皆と明くんがいる。

訓練中に、偵察任務のあつた地下が崩れたらしい。

最新の構造で、ビル自体はどうにか支えられているらしいが、いつ倒れるか分からぬ。

そして、崩れた地下からの連絡も一切途絶えているらしい。

急いで走つていた車が止まる感じがする。

私はいてもたつてもいられなくなり、車からいそいで出て、部隊が集まつてゐる所にいた。

そこは、ビルが見た目少し傾いて、地下は完全に地上から丸見え、といつた、

素人目から見てもとても危険な状態になつていた。

私はそこにいる、部隊の小隊の隊長らしき人に詰め寄る。

「あのつ！ 哀くんと紫ちゃんは？

「無事なんですかつ？ 今どこにいるんですかつ？」

「なんで君みたいな女の子がここに」「僕が連れてきました」……佐屋隊長！？」

隊長が驚く。

明くんは私達が思つてゐる以上に立場が上らしい。

「僕達は姉と御神さんと面識がありますので。
因みにこの人たちは近日新しく部隊配属になった子たちです」

「そうでしたか。

……現状は、芳しくありません」

目の前の人が俯く。

「どうぞ」とですか！？

「……何らかの原因で地下崩壊後、無線は一切繋がりませんし、瓦
礫も複雑に組み合わさつていて、
取るに取れない状況です。もし下敷きになつてゐるなら、そろそろ
危ないでしょ？」

その言葉を聞いてハツとする。

でも、きっと大丈夫。

哀くんは、強いし、あの能力もある。瓦礫なんかに負けるはずない。
……けど、それじゃあ何で出てこないんだろう？
もしかしたら、敵との戦闘で……

私は最悪の場合は極力考えないように、哀くんの無事を祈つた。
できることが何も無くて、歯痒かつた。

「紫……大丈夫か？」

俺は暗闇の中、声を出す。
どうやら俺達がいた場所は瓦礫が上手く組み合わさり、無事だった。
しかし、それで外にまったく出られないようだ。
ビルは幸い崩れていなさそうだが、無理に瓦礫を消すと大惨事を招くかもしれないでの、
まずは紫を見つけることにした。

俺は、能力を使い、光を灯す。

掌の酸素を真空放電させ、淡い光を作る。

すると、見えた。

手術台がまだあり、その向こう側に倒れている。

「紫！ 大丈夫か？」

紫に駆け寄る。

しかし、その瞬間見えたものに驚愕した。

紫は気絶していて、その右肩から先は、なくなっていた。
そこからは今だに血が零れ出ている。

「紫！」

俺は駆け寄り、抱きかかえる。

その体は青白くなつて、やけに軽かつた。

しかし、耳をすますと小さい息遣いがきこえる。

どうやら最悪のパターンは避けたようだ。

だが、紫は右手を失い、周囲には田を背けたくなるような血溜まりがある。

右腕はとっくに瓦礫の下敷きだらう。

このままでは死んでしまう。

……俺は守りたい、紫の笑顔を。

そのためなら、何だつてする。

「『』めんな、紫。お前が起きてたらきつと止めようとするんだらうけど……」

決めた。

紫は俺が治す。

紫を静かに寝かせて、傷口が見えるように服を千切る。
そして露出する無残な傷跡。

肩に穴があき、そのまま無理矢理千切られた粗いもの。
俺はその傷口の入り口付近にある血を調べる。

「能力発動……紫との血液相性率67%。
これより右腕を移植する」

内臓移植などは聞いた事があるが、右腕そのままは聞いたことが無い。

だが、俺の能力ならやれるはずだ！

「……能力発動、細胞レベルでの右腕の『切り離し』。対象、自分

その瞬間、焼け付くような痛みが右腕を襲う。

「ぐっ、あああぐ……」

そのまま俺の右腕は、細胞レベルで、綺麗に俺の胴体から引き離された。

俺はそれを左手で取る。

そして、それを予め、粗い細胞を取り除いた紫の右肩の断面に合わせる。

「……紫、ちよつとの間我慢してくれ……」

能力発動、細胞レベルでの、右腕、右肩の『接合』。対象、紫

そう言つた瞬間、俺の持つてゐる自分の右腕から能力が流れ込むのを感じる。

そして、合わせた部分が淡く、オレンジに光り輝く。

「あああああ！ うああああ！」

紫が反射で飛び起きようとするが、それを抑える。

「大丈夫だから、紫、もつすぐ終わるから……」

そういつて抱きしめる。

「接合、終了」

やっと終わった。

俺の肩の綺麗な傷はとっくに血を止めた。

接合部分は、何分も、何時間も経つたか分からぬ程集中して、直した。

最後に点検をしたが、神経、血管、筋肉などを、俺のほうを変化させて繋げた。

これで、紫は右腕を取り戻した。

後は……血か。

自分の指を噛んだ。

そこからあふれてくる血。

それが固まらないように、血のなかの血小板だけを排除する。

そして、俺の指を紫の傷口にあてる。

「能力、発……動、血液を限りなく新鮮なまま『操作』させ、対象の体内に循環させる。対象、紫」

ヤバイ、くらうしてきた。能力の使い過ぎだらうか？

それとも血を『えすぎ』ていいのだらうか？

まあ、どうにしても問題は無い。

これしきの事で紫を助けられるなら……。

「血を、紫の一定値まで送る。俺の血は氣にしない。循環速度、倍とある」

その瞬間、猛烈な目眩を覚えた。

血を多く与えすぎたのだ。それも俺の致死量を軽く超える勢いで。

「これで……紫は……大丈……」

そして俺は、意識を再び暗闇に落とした。

第二十九話 身代わり（後書き）

そんなことできるの？という質問。

主人公は全てが規格外なんです。

因みに次の話は過去話です。

第三十話 過去の一部（前書き）

過去の一部ですが、ここでも何が起きたのか分かりません。

第二十話 過去の一部

「……………あたあの暗闇……………
俺は…………どうなつた?

「……………」

なんだ?
声?

「……………」

声が大きくなつてくる……

「アイくん!」

「うわあー…………紫?」

なんだか変な夢をみてたよ!つな氣がある。

ここは、広場のベンチ。

周りは山が見える。山村?

隣には紫ちゃんがいる。

「あつたぐ。今日はあなたの家であなたの10歳の誕生日をやるの!」

主役がもう疲れて寝ちゃつてしまつたのよ~」

「…………」めん何か変な夢見して……

「どんな夢よ？」

「……何だつづけ？」

「ハア、まつたく。

それより、はやくアイの家行きましょっ！」

「わ、分かつたよ」

機嫌が凄い良い紫と一緒に、うちにに行く。

所々に見える、木造の古い家。

ここは、四方を山で囲まれ、第三次世界大戦どころか、第一次世界大戦も生き抜いた

とても古い山村。近頃、都市の周りは能力者とかいうので危険みたいだけど、ここはとっても平和だ。

その家々を見ながら歩いていく。

もつ口が暮れそうだ。鳥が遠くで鳴いている。

その中で、一層大きい家。僕の家だ。

今は、お父さん、お母さん、おばあちゃん、おじいちゃんと僕の五人暮らし。

それと、今日の僕のお誕生日会は、

紫の家の人たち（紫のお父さん、紫のお母さん、紫の弟、それに紫）が来る。

昔からうしおと紫の家は仲が良いのだ。

家の中では、畳の上に大きい机があり、その上には、お母さん手作りの料理とケーキがある。

「わあ！ す、」「…」

そして、みんなが揃つ。

「…………お誕生日、おめでと、アイー、」「」「」「」「」「

みんなが声をそろえて言つ。

僕は手作りケーキの上にある十本のロウソクを吹き消す。

その後は、紫やみんなと喋りながら料理を食べた。

とつても嬉しかつた。

僕の誕生日のためだけでもここまで祝ってくれるみんながいてくれて良かつた。

……なの、

「…………、…………こんな事になつちやつたんだよー。」「

叫ぶ、が、それも炎の前では何も意味を成さない。
燃えている。さつきまでいた家が。

目の前には、何かによつて切り裂かれた無残な死体。
もつ誰が誰だかわからない、『六つ』の死体。

……六つ？

「紫つ！ 明つ！ ビー！ ビー！ むるんだ？」

紫はさすがにまだそこいら辺にいた。

明は病弱だったけど来ててくれたからこいつのはず。

すると後ろから何かに包まれた。
それは、紫の手だった。

「「めんね……こんな事、嫌だよね。
大丈夫。私が何とかするから」

紫は僕の額に手を当てる。

すると何か暖かいものが入つてくる感じがする。

「大丈夫だから、アイくん。ずっと、私達、一緒にいるね?
神様、どうかアイくんだけでも助けてくれますように……」

その瞬間、僕の体から何かが抜け出す感触がして、なぜか眠くなつてぐる。

ボンヤリとした視界の中には、紫、その少し向こうにいる明。
その光景を見て、意識が途切れた。

「はつー。」

俺は起きた。辺りを見る。

そこは、薄暗い、砂煙漂つところで、隣には眠る紫がいる。

「夢か……」

どうやら意識を失つている間に夢を見ていたらしい。
自分の内側に目を向ける。

……能力が、体、脳、臓器など必要最低限血を供給しているらしい。
だが一時的なもの。もつすぐ大量出血で死ぬだらう。
紫はもう大丈夫なようだけど。

俺はなんとなく、瓦礫に向かつて呟く。

「みんな、紫をはやく、光がある場所に。日常に戻してやってくれ
……」

その言葉は、反響するが、何も起らぬことはなかつた……。

第三十話 過去の一部（後書き）

……最近どんどん駄文になってしまっている。
その証拠に、日間ユニーク数が激減？してしまっている……。

全登場人物能力表（前書き）

今まで登場した能力者の説明。

全登場人物能力表

「今日は、今まで登場した人物と能力をどんどん紹介していくま
す」

「タイミング悪いわよ、アイ」

「や！」はははっとけよ、紫。じゃあ、主要メンバーから紹介！」

「あら？ ハイト君はどいつも？」

「……発表無しつてことで。次に出てくる可能性があるかもしね
いし」

「それにしても今話は会話が多いわね。いつもは作者の文才の無さ
といふか、基本すら分かつてない
書き方で、説明が長つたらしくて、読む人減っちゃつたのに」

「……紫、それを言つた。作者もそれを理解してこんなになつて
んだ。」

まあ、気を取り直して、行きます」

主人公　御神哀
ミカミアイ

能力、『祖体制御』
マテリアルコントロール

効果、全ての物質を元となる粒子単位で自由に『操作』や『分解』できる。

これを利用して、細胞単位で体を『破壊』したり『破裂』させたりできる。

哀が切れたり、瀕死の重傷負うと、能力暴走。相手をバラバラのグシャグシャに

しなきや気がすまない。

制限、制限質量最高1tまで。同時にそれまでしか操れない。制御下に置くには、

自分の皮膚か、身に着けている物に触れている物質で、それでいて自分が意識して能力を使おうとしなければ発動しない。

しかし意識してからの能力発動までのタイムラグは限りなく

0秒。

「はつきり言つと、やっぱり『核に勝てます』は嘘じやないわね」

「……作者によると、やっぱり能力自体は別物だけど、強さは『一方 行』を意識してるらしい。

……『一方 行』って誰?」

「私に聞かないで。じゃあ次行きましょう」

佐屋紫サユカリ

能力、『マインドイーター』
精神喰人

効果、人間、動物などの精神、記憶、深層心理を自由にできる。

ただし、余程強い思念ならば、能力は効かない。

無論、物の記憶は読めない。

制限、手のひら以外、少しでも外れたら何もできない。

つまり、手のひらのみが効果範囲。

手袋などを着用しているなど、間接的に触れても、能力は使えない。

「手のひらだけっていうのが弱点ね」

「いや、けどお前が見せた夢は凄かったぞ……」

「ふふ。夢の中で私と随分お楽しみだつたんじやないの？」

「……次行くぞ」

涼風
琴雪

ススカゼココキ
アフンココートゼロ

能力、『絶対零度』

効果、自分の触れているものから、周囲50mの任意の物質の熱振動を完全に停止させる。温度の調整ができる、すぐ溶ける

0から絶対零度（-273.15）まで調節可能。

たとえ100でも一瞬で凍りつく。

能力を使おうと思えば、意識しなくとも周囲15mの物は勝手に凍りついていく。

制限、もちろん、周囲15m以上離れれば無理。

荒祇聊爾

アラギリヨウジ

能力、『空間歪曲』

ロストメビウス

効果、空間を断ち切つたり、曲げたり、境界を開いたり、あと、境界同士を無理矢理繋げて移動したりする。応用技として、曲げた空間が元に戻るつとして放つ衝撃波も攻撃に使う。

制限、制限距離2・31kmまで。遠距離に空間を開く場合には、それまで。

自分の周囲10mの空間をいじるには時間がかかる。無意識では発動しない。意識してからのタイムラグは2秒ほどと長い。

不知火奏華

シラヌイソウカ

能力、『大地噴火』

ランドナパーク

効果、自分が触れている地面から周囲10mの地面や、

その奥にあるマントル、溶岩、マグマを自在に操れる。なお、周囲10mと言うが、深さは測りきれないほど深くま

で操る。

制限、暑い。

ハイトクラウド

能力、『?????』

効果、まだ計り知れない。

御神は、この能力が使われた生徒を見たが、首筋に切り傷があつた程度である。

制限、まだわからないが、能力射程は軽く50mを越すと思われる。

無骸零

能力、『完全削除』

効果、森羅万象全ての概念を完全に無かつたことにする最強の能力。やろうと思えば、地球も消せる。

制限、未だ不明。射程も分からぬ。

飛騨燃故
ヒタケンカ

能力、『直線狂走』
バーングロード

効果、自分が向いている方向の直線状なら、一瞬で走つていける。

制限、瞬間移動ではないので、体力はそれなりに消費する。

途中で曲がることは勿論無理。

佐屋明
サヤアキラ

能力、『夢想破壊』
シンキンクストップ

効果、相手の記憶、深層心理にある概念から、

一定の事柄を一時的に破壊する能力。

例えば、相手から立つ方法を一定時間奪うなど。

制限、『精神喰人』と同じで、効果範囲は手のひらのみ。

如月明日香
キサラギアスカ

能力、『永久復活』
リザレクション

効果、任意の相手の体力のみを、完全に回復することができる。

制限、しかし、体力のみであって、失血などした場合は直せない。
軽い怪我程度なら、回復力が高まるなどである。

例えると、ベホマはできるが、状態以上系は回復できないのである。

奇術師マジシャン

能力、『左右反転インザミラー』

効果、任意の対象物を中心として、自分を対称移動させることができ。きる。

制限、不明。

HC - R0 (ヌル)

能力、不明。

効果、変装系？

制限、不明。

HC - R1 (アインス)

能力、
『^{ライトニングレイ}』、
『^{アンチセプト}雷電閃光』、
『^{アンチセプト}能力無効』

効果、雷電閃光は、雷を操る程度の能力。
無から雷を放つこともできるので、物質の電子を操っている
と推測される。

能力無効は、触れた相手を任意のタイミングで能力を一定時
間使えなくさせる力。

制限、能力無効は、一定時間というのが短い。

HC - R3 (ドライ)

能力、
『^{グラビティション}重力加担』

効果、周囲10mの任意の場所を最大直径5mほどの範囲の重力を
自由に操れる。

制限、重力は最大10倍までしかできない。

全登場人物能力表（後書き）

長いですね。

すごい手抜きがありますが気にしないで下さい。
もう完璧に消えた人もいますね。

第三十一話 互いの思ひ（前書き）

……とりあえず、読んでください。

第三十一話 互いの思い

琴雪 SIDE

「私が行きましょう」

今、瓦礫の上にいるハイト君はそう言つた。
そしてハイト君は今、能力を使おうとしている。
……ハイト君の能力がどんな物かは知らないけど、きっとできるよね？

「……ハイトの奴、大丈夫だよな……」

聊爾君が呟く。

「大丈夫だよ、きつと」

「……では、これから瓦礫の破壊作業に入ります！」

その瞬間、ハイト君の両脇の瓦礫が一瞬にして真つ一つになつて、
どんどん田で追いかける速さで瓦礫を斬つていく。

そして、遂には唯の砂になつてしまつ。

その、何か分からぬものの速さに私達は、呆然とした。

ハイト君は私達が驚いていても冷静で、周りの瓦礫をどんどん細かく砂にしていく。

はつきり言うと凄い。

瓦礫を斬つているのに、凄い速さで砂になつている。

私達にはできなかつた事。

考え方をしている内に、もうほんどの瓦礫は片付いていた。
音もほとんどしなかつた。一体どんな能力何だらう？

「終わりましたよ。大きい隙間が出来ましたから、そこから救出作業に入つてください」

そう言つとこちうこ來た。

全然疲れてなさそう。あんなに能力使つたのに。

「あの、ハイト君。ありがと。哀君達を助けてくれて」

「いえいえ、私のできる事はこれぐらいなので。では私は向こうで休んでいますので」

やつぱり疲れているんだ、と思いながらも救出作業を見守る。

「見つかつたぞ——！」

瓦礫の中から声が上がる。

そしてその中から運び上げられる一つの影。

1人は、紫ちゃん。右腕の肩の部分の服が破れて、血がついている
が大丈夫だらうか？

そしてもう一人、哀君。しかし、嬉しかつた私の目の前には、残酷
な事実しか無かつた……。

そう、右腕が無かつた。それも、傷口は自分で塞いだのか、普通の
肌が張つてゐる。

「哀君……」

もう少し私がちゃんと訓練して、一人についていけば良かつたのだろうか？

……そんなものの傲慢だとしか言えない事は分かつてゐけど、そう思つてしまつ。

2人がこちらに運ばれてくる。

紫ちゃんは、特に以上はないそつたが、哀君は、致死量以上の血を失つていて、意識があるのは一重に彼の精神力のお陰らしい。

2人は、私達の前を、担架で運ばれて素通りして行つた……。

琴雪 SIDE END

御神SIDE

「う……」

重いまぶたを開く。

「……知らない天井だ……」

「冗談を言つてゐる場合じやない。多分こゝは部隊の救護棟だらう。周りを寝ながら見ると、包帯やら何やら色々あるのが分かる。」

ベッドから起き上がるが、左腕に違和感を感じる。

訝しげに思い、左腕を見ると、そこには太い点滴が打つてあつた。それを口で咥えて抜く。中身は血だつた。多分、重度の失血だつたのだろう。

ベッドから降りて、裸足で部屋を出る。今着てゐるのは、病人の着るような服だ。

やけに頭がはつきりするが、原因は分からぬ。

ここ救護棟は病院と同じようなものだ。

勿論病室も多數ある。

俺がいた部屋は誰もいなかつたので、紫は別の部屋だらう。

意識ははつきりしているが体はダルイといつ、何か変な感触を覚えながら、病室を見ていく。

ほとんどの部屋が空室だ。

ここは大規模戦闘や、災害などがあつた際に使われるものなので、今はほとんど患者はいないのだろう。

適当に歩いていくと、一つの病室があつた。

病札には、『佐屋紫』と書かれている。

ドアを静かに開けて入る。

中は、俺のいた部屋と同じで、普通の病院の個室の様なものだつた。

ベッドの上には、一いちらを見ている紫がいた。どうやら俺が来るより前に起きていたらしい。

ベジタブルを食べながら、紫が話す。

「紫……」

「……哀、先に謝つとくわ。ごめんね」

「？」

いきなり紫が謝つてきて、何だ?と首を傾げてみると、次の瞬間、

「ふうハツ!」

思い切り、顔面を殴られた。しかもグード。

間違えるなよ。頭じゃない、顔面に。しかも鼻に思い切り当たった。

「痛あああー 何するんだよ、紫!」

「こんなのもう何度か無かつたっけ? 言つたよね?」

私達を信じなさいって

「…………」

「この腕。ひやんと自由に動くけど、私の手は誤魔化せないわよ。これ、アイの腕でしょ? しかも私の記憶によると右腕を無くしたのは私。

……ナビ、あの約束を思い出してくれたんだね。それは嬉しいよ、アイ

「アイ」

「……紫、俺はお前を守る。例えどんなものがいたって、お前は守

りきる。

だから、その腕は純粋にお前を助けたかつただけだし、一つの覚悟でもある。

そんな腕でもいいなら使つてくれ

すると紫は口を見開いて驚いたあと、少し頬を赤くしながら言った。

「……そんな事、言われなくても分かってるよ、アイ。
この腕は、アイの腕。私なんかの為に使つてくれたもの。
だから、そんな私はこれからは、いいえ、これからもアイの側に立ち続け、そして助けても、いい？」

「そんなの、当たり前だろ……」

嬉しい。素直にそづ感じられた。

紫が俺の、無い右腕の痕を撫でる。

そして、何か目から零れ落ちてくるものを耐えて、言つ。
今まで言えなかつたことを。

「紫……」

「アイ……」

「」「愛しています」

第三十一話 互いの思い（後書き）

……遂にきました。

実は真のヒロインは紫でした。

……実は、でもないかもしませんが。

これから色々あります。

今日は短い。

第二十一話 酷ひと……再会？

俺と紫は、そのまま救護棟の食堂に向かった。

多分酷ひとに集まっているだろうと紫が思つたらしい。

……いた。みんなが集まってる。総隊長さんはいないが。多分仕事だろう。俺達に構つてくれる時間も無いと思う。

琴雪がふとこっちを見てきて驚く。

「哀君！ 紫ひとやん！」

「おひ。今帰つたよ

「哀君。よかつたあ～」

「えーと……」

「琴雪、哀が困つてゐるば？..」

聊爾がからかう様に言つと、顔を真つ赤にして離れる琴雪。

「もつ大丈夫なのがい？」

「ああ、紫も俺も、な

「それは良かつたですね」

「ええ、ありがとう」

俺と不知火、ハイトと紫で受け答えしていくと、不知火が真剣な顔つきで言った。

「それで……あなたの右腕は、何があつた？」

その瞬間、皆が黙つて沈黙が生まれる。

……やっぱり答えなきや、駄目だよな……。

「これは任務中、ホムンクルスの三番田に会つて戦闘になつた時、俺が気を抜いたせいで右肩から貫かれ「違うわつ！」……紫！」

「それは、違うわ

「どういひとつ？」

琴雪コノネが不安そうにこちらを見てくる。
紫は続ける。

「本当は、右肩をやられたのは私。
……なのに、哀は自分の腕を自分で切り落として、私の傷口に能力で完全に接合したのよ……」

「そんない！」

「…………」

不知火が思案顔で言つ。

「……それはあんたの意思かい？」

「…………ああ

「……ハア、なら私達は口出しきなによ。本人の意思なんだから

「でも、でも…」

溜め息をつく不知火に対し琴雪が必死になるが。

「琴雪、これは哀自身が決めた事だ！ 俺達は口出しきれない」

聊爾の一喝により琴雪が頃垂れる。

「……皆、これはしようがないんだ。でも、ありがと、皆」

「まつたく、仕方ないですね……

では、いつまでもこうじている分けにもいきませんし、とつあえずは（）飯、食べましょうか？」

その空氣をぶち壊したハイトの一言で、皆が笑いながら席につく。俺はハイトにしか聞こえないように礼を言つ。

「ありがと、ハイト

「いえいえ

その後、朝飯を食堂で食つた。

因みに俺は勿論？右利きなので、琴雪と紫、どっちが「」飯を食べさせてあげるかで口論になつたが、結局ジャンケンで紫が勝つて、今食べさせてもらつてる。

「……そういうれば、アイの能力では、その腕はビックリにかならなかつたのかしら？」

「紫、それは無理だよ。

いくら俺でも、細胞、神経、血管、骨とかの配列をゼロから完璧にはできない。

だから、紫には俺のを使つたんだよ」

「やつ……。でもこれからはどうするの？
そのままじや絶対に生活に支障ができるわよ？」

すると前に座つている琴雪が提案する。

「あのさ……実は私の親、一応医者やつてて、義手ならあるけど……」

「……」

「本當かよ、幸運だな。じゃあ、後で紹介してもうつていいか？」
「いこよー。でも、私の親がめついいから、いぐり哀君でも最新の義手だったらお金掛かるよ？」

「大丈夫。なんか異様に金が貯まつてるから」

「それならいいけど……」

そんな感じで俺の義手付けは確定した。

……機械鎧オートメイルみたいのだつたら格好良いのに……

昔見てた漫画、アニメを思い浮かべる。

まあ、そんな事ないか……。

食べ終わつた後、琴雪達には部屋に戻るよう言われて、俺達は戻つた。

琴雪曰く、本当は残りたいのに、訓練があるらしい。

それで、今は紫の部屋に来ている。

……別に、何もしてないよ！？

……どつちもまだ本調子じゃないんだし！

けど、普通に戻つたら……って、あ――――！

……JRの頃俺、妄想激しい気がする。

第三十一話 皆と……再会？（後書き）

……主人公がどんどんハガレン！？に近づく！
次は左足いつとくか？

すみません、不快感を感じたならば取り消します。
しかし、義手をつけるのは本当なんで。

主人公の性格が……オワタ

そんなこんなですぐ退院できた俺と紫。

元々、紫は俺の血を輸血したから特に異常は無かつたし、俺自身もちゃんと点滴をしたし、輸血して普通通りだ。

外傷とかは俺が直したからな。（皮膚その他を上手く引き伸ばして）

で、退院してすぐその日、琴雪が両親に俺を紹介したいらしい。

それで今は、琴雪の両親がやつてる病院に行く途中。

「でもやー、琴雪の親が医師なんて聞いたこと無かったよ？」

不知火が言つ。

琴雪が苦笑いで答える。

「別に話さなくともいいかなーと思つて……

前も言つたけど、お父さんとお母さんは、いへり私の友達でも平気で金を取るうつむるし。

けど、根は優しいからね？」

「分かつたよ。ナビや、義手つてビビりこするわけ？」

「……多分、普通の付けるだけなら、最新の型で百万円くらい。それに、神経と機械回線を繋いで、普通の手と同じように動かせるのなら、

最新の型で軽く一千万円は越すと思つ……」

「うわおー、ちょっと御神！　あんたそんな金あんの？」

「いや、一応俺もランクで、更に秘匿性がすげえ高いし、それで、いきなりの部隊入隊で更に上乗せ、そして極めつけは能力犯罪者への対応。合わせて一億ぐらいは溜まつてるけど……」

「……随分部隊はその能力が好きなんだね…………」

「…………面つとくけど、俺が金せびつたんじゃないからな」

そんな感じの会話を続けていると、すぐに琴雪の両親が働くという病院が見えた。
結構大きい病院だ。

「あれが、お父さんお母さんがいる病院だよー」

「佐屋私立総合病院…………って、私立なのか？」

「そうだよ。けど近所の人達がいつも通つてくれるからね。
それに総合だからどんな患者さんでも来るしね」

「じゃあ、行こうつか」

俺達は病院へ入ると、琴雪が受付にいって何か話す。
すると奥の扉が開いて、そっちに行くよつと言われる。

俺は、皆に待つといってくれと言つて、扉の部屋に入る。
扉を閉めると、奥から声が掛かつた。

「お前さんが琴雪の言つてた奴かい？」

「はい。右腕全体の義手をお願いしたいんですねが」

「そう言いながら振り向くと、そこにまた、向かい合いつつ並んだソファの

向こう側に座つた、少しだけ紫に似ている中年のオジサンがいた。多分父親だろ？。

「右腕全体か。じゃあ、どんなのが良いか要望いつてみなよ。ゴムの安いやつから、機械神経内臓型、果ては、部隊の人が欲しがる、

武器を内臓した裏製品も扱つてるよ」

「ふ、武器内臓つて……」

「聞いたところによれば、お前さんも部隊の人間らしきじゃないか。なんならどうだい？ グレネード弾を三発まで装填可能なランチャ一内臓の最新型まであるよ」

「いや、そこまでは……。

俺が欲しいのは、見た目がちゃんとした腕に見えて、機械神経内臓の最新型の義手を付けて欲しいんです。それも、任務に差支えが無いくらい使い勝手が良いやつを

すると何か思案顔をしてから言つ。

「なら、良い型があるよ。ついてきなよ。

最近できた、琴雪にも秘密にしてるものがあるんだ」

そして、こきなり立つて、後ろを向いたと思つと、そこにはあつた本

棚の中の

一つを奥に押し込む。すると、本棚が横に動いて、別の部屋への扉が開く。

「す、」……初めて見た……」

中に入ると、そこには一つの義手がクリアケースの中に収められていた。

機械丸出しの、まさしく俺が創造していた機械鎧のような見た目をしていて、よく見ると、もっと複雑で、精密に作られている事が分かる。なんか、一言で表すと、『ターミーネーの機械丸出し版の、もっと機械が多いver.』である。

「何か格好良いですね……」

「おお、この良さが分かつてくれるとはね。
これは機械丸出しで、君の要望の内一つは潰してしまいかもしれな
いけど、後の性能が完璧でね、
ぜひ君に使って欲しいんだ。頼む、買ってくれないかな？」

「……そうですね、元々俺は使い勝手がよければなんでも良いです
から、これでお願いします」

「そうか、買ってくれるか。

……じゃあ、早速付けてみるか？ 代金はその後で良いから

「はい。よろしくお願いします」

これで、義手の種類が確定した。

……けど、何か忘れてる気がする。

何か琴雪に忠告されたような？

まあ、まずは付けてもらおう。

第三十三話 義手（後書き）

主人公は結局、ハガレンを真似るようです。
はい、すみませんでした。
ですが次で義手の性能が発揮されるでしょう。

……痛そう。

第三十四話 手術？

「いっただああああああああ！」

ヤバイ、意識が飛びそうだ。痛みだけで。いや、訂正しよう。

痛みだけではなく、目の前の惨劇を見ているだけでも大抵の人は気絶するだろう。

今、何が起きているか、それは極簡単な事。俺の右肩に、右腕（機械だけ）義手を接続している手術をしているのだ。

それに、この義手は唯の義手ではなく、神経と機械神経を接続し、普通の腕と同じように動かせるものなので、手術の時は痛みがあるらしい。

なので、俺が今氣絶しそうなのはその痛みのせいなのだ。しかもここまで痛いとか予想外だろ。だって腹に風穴開けられるより痛いんだぜ……。

「やばい！ 慣れてるつ、せ、せいできつ！ 中と、半端につ！ 気絶！ できね————！」

焼けて焦げて蹴られて殴られて刺されて撃たれて骨引きずり出されて凍つてレンジでチンみたいなあ————！

「はははっ！ まだ手術は続くからじつとしてねえ————？」

さて次ごくみよーーー？ 覚悟はいいかい 「

……ヒツヤハ痛みが治まつたと思つたら、視界の隅で何か出つてゐる
。

「次はこれだから！ よろしく！」

今顔の前に突き出されたのは、銃身？はAK、だナビ先端について
るのは、へ、釘打ち機つ！？

「ふつふつふ～、」これは、かの有名なアサルトライフルAK47
と同じ速度で連射できる改造品なんだ！

「え、ちよつと、ねえ、連射つて、な、何を……？」

「それは、お楽しみだよつ！ じゃあ、逝つてみよつかー！」

「え？ そ、それつて、それつて絶対手術で使つむのじや……つて！
やめて！ 嘘だろ！ あああ！ 嘘だあ――――――！」

「さよなら！」

「グギヤはアアああガアアああアアガガガガガガガガガガk.j.fアm.f
裸L.f.ぽX.j.f @オSf skf s m.f死！

あああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああ！」

焼けて焦げて蹴られて殴られて（「」）

「紫、琴雪、皆、」め、俺、もう逝くわ……

視界が黒く染まつた。

「あつれえー？ もう氣絶しちやつたのか？ まあ良いか。
じゃあこのまま続けるか」

その後、病院中には、爆音やらなんやらが何時間も続いた、らしい。

「つはー、じーじー

身を起しす。

こには……手術台？

周囲には……（恐怖の）AKやら、四連グレネードランチャー
？ やり、弾が空の機関銃やらがあつた。

「ヒヤーー？」

何か寒気がしてきた。

……この寒気は手術中、ずっと裸だったせいだ。ついに違ひない。

と思つて、なんか頭に引っかかるつてるものを見つめました。
それで俺は両手を使つて、すぐ隣の台にあつてある服をあら。

つて、両手？

自分の右手にゆっくりと視線を向ける。

そこには、あの機械だけの義手があり、それと付随して、悪夢が流れ込んできた。

「あああああ！ いつたああああ！ つそだろ！ 幻痛！？ つーか何なんだよ！ あの手術は！？」

そんな感じになり、手術室をでて、琴雪のお父ちゃんのところに行く。

「ちゅうとー あの手術なんですか！？」

すると、彼は背中を向けながら喋つた。

「ああ、あれは普通に、君の義手をつける手術。因みのいうと文句なびの苦情は受け付けない。君を手術して義手つけたのは私だよ？ 結果だよ。過程はどうでも良い。それより使い心地はどう？」

俺が言おひとしてた」とを牽制され、止められてしまった。

「それは……すごいことです。違和感もあんまりないし。それは感謝します。

……で、値段はいくりですか？」

「おおっ！ 早速本題に入つてくれたね。では、その義手のオプションの使い方説明書とその義手をセシトで、なんと！ 初回診療額で――― なんとつ……」

……！ れは一割引してくれそな雰囲気！？

「お値段改めて一億円になつますー！」

「…………はい？」

そういえば、忘れてた。

琴雪の忠告。

『お父さんとお母さんはがめつにから

あ～あ、ちやんと最初に聞いとけば良かったな……。

第三十四話 手術？（後書き）

主人公の性格が結構崩壊してるような?
そんなことないか?
でも……

第三十五話 ヤバイ機能（前書き）

……どんどん、といつか最近
いきなりシリーズを抜けてきました。

第三十五話 ヤバイ機能

「はあ～……」

「元気だして。親を説得できない私も悪かつたから」

今俺達は、病院を出て、しばらく行つたところにあるレストランで暫くで居る。

一億円（全財産）という法外な値段を払つたばかりなのだ。

で、溜め息ついてたら琴雪がそう言つてくれたのだが、……

「いや、いいよ。義手を付けてくれたのは事実だし、それに、あの人は、ちゃんと製品に見合つた金額を提示してるんだろう?」

「うん。それは絶対に保障できるんだけど……」

そうなのだ。琴雪の話によると、確かにあの人は金を取り捲り、それをぼつたくりや、がめついと言われているが、実際そうではない。

そう、あの病院は一応私立病院なのだ。

なのに、新型の義手義足などを作つてゐるから費用が馬鹿高い、が、それに見合つた機能をつけてるので、別に取りすぎ、というわけではないのだ。

……あの手術はもつやりたくないけどな。

「それにさ、結構親切な所もあるだろ。

特に一年保障期間と、軽い故障なら直せるマニュアル本をタダでく

れたんだし

「まあ、袁君がそう言つながらいけど

「それにしても、あの爆音はなんだったの、アイ？」

「ヒヤツー、さ、聞かないでくれ……」

「や、やつ。なら別にいいけど……」

突然感じた寒氣に身を震わせていると、向かい側に座つてゐる聊爾が言つてきた。

……因みに言つと、6人席で、片側の真ん中俺、右に琴雪、左に紫だ。

向かい側の真ん中に聊爾、右に不知火、左にハイトだ。

「まあ、とにかく何も無く無事に手術できてよかつたんじやねえか？あとさ、少し提案があるんだけど……」

「何だ？」

「その新しい義手さ、やっぱ何か機能あるんだろう？
一億もするんだから何かはあるだろ、絶対。

だからそれを見よつぜ！」

「けど俺は、別に機能はいらないって言つたけど……

「どうか、そういうばこは薦められたものだったから何が機能が分からぬ」

「だろ？ だから、ちょっと部隊の訓練場行つて見てみよつぜ！」

すると不知火が疑問の声をあげる。

「なぜ訓練場にいく必要があるのや?」

「いや、だつてそりやあさ、一億もしたモンだぞ?
何か危険な物があつても不思議じやねえだろ」

すると今まで黙つていたハイトも、飲んでいた珈琲を置いて
それに賛同する。

「まあ、確かにそつですね。何か武器があつても何ら不思議ではあ
りませんよ」

「「「「「確かに」」」」

まあ、そんな分けで訓練場を借りる事にした。
しかもまた空いていた。

……他の奴らは訓練してんのか?

「じゃあ、とりあえずマーティアル本でも見よつか?」

「いや、それじゃつまんねえし……とにかくマーティアル無しで適当にやつてくれ!」

聊爾がそう行って、皆も俺を見るので、仕方なく機能を適当に使つ
ことにする。

一応言つておこう。

俺の右腕は、ターミネーターのそれよりも、機械が多くついて、中身が見えない。

実質、外にある機械外骨格しか見えないのだ。で、右手の手首の部分には、腕時計の様な形をした機械がついている。

これが、色々な機能を操作、起動する機械だ。

因みにこれにはボタンが複数あり、デジタル画面には、右腕の詳細情報が並べられている。

「じゃあ、最初の機能行くぞ——！」

すると皆はいきなり俺から離れていく。

そして、俺は右腕を前に構え、ボタンの内一つ田を押す。

その瞬間、俺の右の手のひらから赤くてオレンジなコラコラしたものが爆発的に噴出し、

俺の目の前10mくらいが、焼き払われた。

それが収まると、右手からはプスプスとガスが切れる音がした。前10mは地面が焦げて黒くなっている。

10mよりもっと向こうにいて、無事な皆は、ハイトを除いて唖然としていた。

因みにハイトは、「面白いですね……」とか言つてゐる。

「つーか、地面まで炭化させる火炎放射? つてどうよ……」

機能1、火炎放射。

「……これからが思いやられる」

何せ、ボタンは軽く見積もつても、10以上はあるからだ。

皆は同時に「う思つた。（勿論ハイトを除いて）

（（（（私達／俺達、大丈夫か？／かな？））））

そしてハイトはといつと、

（ふふ、どんな兵器が出てくるか、楽しみですね）

第三十五話 ヤバイ機能（後書き）

何かハイトの人格が崩れ始めてるような

第三十六話 決戦直前（前書き）

遂にきました。

いきなりの展開で、駄文丸出しですが、どうか最後まで見てください。

第三十六話 決戦直前

その後、機能について調べた所、最初に押したボタンはただ運が悪かつただけだった。

といふことにはならなかつた。

機能は、火炎放射機に、その他、幾つか実害がある機能はいくつかあつた。

まずは、機関銃。

手のひらから機関銃がせり出し、そこから毎秒五発といつもの凄い量の鉄の塊を吐き出す殺戮兵器。

そしてまだある。

超小型弾道ミサイルを、緊急時の一発キリである。

因みに、火炎放射を見てすぐにマニュアルを見たところ書いてあつたのだ。

さすがに弾道ミサイルなどを試射する分けにはいかない。

あと一つ。これがやばかった。まじで。

例えるなら有名な『スク イド』の主人公の決め技である、『抹殺のラスト リセット』にそっくりなのだ。

多分あの人狙つて作つたと思つ。

右肩の付け根ギリギリから噴射される超高密度の炎を推進力とし、それを上手く操り、右腕で攻撃する、というものだった。

それを試してみたといふ、琴雪の氷の壁三層と、不知火の土の壁三層を軽く破つた。

琴雪と不知火は「能力以外で負けちやつた」と、落ち込んでる。

まあ、それ以外は別に特別なものは無かつた。

強いて言えば、拳銃とか拳銃とか即席地雷とか手榴弾とかだ。

「これつて、質量兵器のオンパレードだ?.....」

「ま、まあまあ、良いじやない。

これで能力以外にも凄いとこできて」

紫が慰めてくれる。

聊爾とハイトは兵器に興味津々だし、琴雪と不知火は落ち込んでる。紫に慰められながら溜め息ついてる俺も合わせると、この訓練場、とてつもないカオスになつてゐる。

「でもな、紫。右腕じゃもう能力使えないんだ」

「え? どういう事なの、アイ?」

「つまり、俺の能力は触れている物質を自由自在に操る事だ。だが俺の右肩の断面と触れているのは機械だ。

しかも、別々の物質同士では能力を渡らせる事ができない。

だから、もう右腕全体では能力は使えないんだよ。

それを武器で補うから、丁度良いと思うんだけど……

「……そつか……」

やつぱり、片手を失うのは辛い。

精神的にも、肉体的にも、そして、任務にも差し支えが出てしまつかもしぬ。

なにせ両手で操るものを持つ手だけで操らなくてはならないのだから。

そんな感傷に浸つてると、いきなり訓練場に赤いランプが出た。
それと一緒に鳴り響くブザーと、機械の声。

『警告』、『HEAVEN』 防御システムダウン。進入者通過確認。
人数不明。

部隊員は、直ちに会合場所に集まり、総隊長の指示を仰げ

「――――シ――――――」

息を呑んだ。

最先端科学の粋を集めた『HEAVEN』 防御システムがダウンし、
あろう事か
進入者を許してしまつた。しかし、それ以上に大変な事がある。皆
も感づいているよつだ。
聊爾が呟く。

「外からの進入者……つてことは、多分

「ああ、『HUMAN』に違いない」

そう、『JJI』は『HEAVEN』。外の科学力では決して『JJI』の防御システムを破る事などできない。

ならば答えは一つ。外に居て、尚且つ『HEAVEN』と同等かそれ以上の科学力を持つた組織。

それは、『HUMAN』しかない。

俺達は、用意した制服に着替え、会合場所に集まる。会合場所は、部隊の膨大な人数を楽に入れることができる大きい集会所だ。

俺達はそこに行き、先に来ていた明や飛驒さんの居るところまで、人ごみを縫つていぐ。

「飛驒さん！ 俺達はどこの隊になるんですか？」

「ああ！ わ前らは特別に編成された部隊だ。総隊長がこれから指示をするから、

お前らもそれを聞いてけ！」

「分かりました！」

俺達は一番端に寄る。それと同時に部隊の整列する音が聞こえる。正面に総隊長さんが立つ。

「ではこれより、状況説明と、その緊急対応策を話す！ 聞き逃すな！」

いつもままして緊張している総隊長さん。

一体何が……。

『HUMAN』襲撃部隊SIDE

「たつくよお！ あの防衛システムうざがつたなあ！」

複数の男女が、一つのビルを目指してゆっくり歩く。ゆっくり、だが確實に。

その中の一人の男がそう愚痴る。
その外見は、以前御神が倒したものと同じ、『一条裕』のものだつた。

「うるせこよ！ アインスコッパー！ あんたは少し黙つてろつつの！」

「んだとフイーア！

てめえも少しさはその言葉遣にどつにかなんねーのかよー」この性悪女ーー
それとハリーは余計だつたのーー」

アインスコッパーと呼ばれる男は隣を歩いている女をフイーアといふ。

「だ、だれが性悪女だ！ ほらドライー あんたも何とか言こなさいよー」

フイーアにドライと呼ばれた女は、二人に向か、

「任務が最優先。言い争いは後だ」

と諭す。

「つづく！ ドライの裏切りもの！」

「まあまあ、フィーアさん。 そんな怒らないで……」

「何よフュンフ！ あんたも裏切るの！？」

フィーアにフュンフと呼ばれた少年は俯き、呟く。

「え……えと、その、す、すみませんでした、フィーアさん……」

「え？ ちょ、ちょっと！ そんな泣かないで！ 「めん！ 私が
悪かったから！」

フュンフの半泣き顔を見て焦るフィーア。
するとそんなフィーアに向けて鉄拳が二つ落ちる。

ガツンとかバキッ！とかいつても遜色ない音を響かせたフィーアは
頭を抱える。

「いつたあ～。 その、すみませんでしたお姉さま方！」

「「まったく。 私の大事なフュンフちゃんを泣かせるなら、
私達はだれ相手でも暴れちゃうわよ？」」

まったく同じタイミングで同じ言葉をフィーアに言つ美女二人。 どちらも同じ顔をしている。
それを見て、泣き止むフュンフ。

「ゼクスお姉ちゃん、ズイーベンお姉ちゃん！ ありがとう！」

「「いいのよ！ フュンフの為ならなんでもするわよ？」」

……こちらもこちらでカオスしていた。

AINSPORERとFYEIAが騒ぎ、それを普通に無視するDRAI。FUNKFの笑顔に対して鼻血を出すゼクス、ズイーベン。

そんなカオスを築きながらも、足取りはみな一方向に、確實に、向かっていた。

目指すビルは、『JAPAN studio』部隊日本の本部。

これから、未来の歴史に刻まれる事件が始まる直前だった……。

第三十六話 決戦直前（後書き）

まあ、普通に分かると思いますが、数字ですね。ドイツ語の。

アインス	、					
ドライ	、					
フィーア	、					
フュンフ	、	4	3	1		
ゼクス	、	5	4	3	1	
ズイーベン	、	6	5	4	3	1
		7				

つてな感じで。

第三十七話 絶望の正体（前書き）

なんかどんどん あがめになつていいく本文。

第三十七話 絶望の正体

「ではこれより、状況を説明する」

総隊長さんの緊張した大声で、部隊が緊張の空氣に包まれる。

「今から約20分前、『HEAVEN』外部接続口にある、防御システムが破られた。

物理的な攻撃にも、コンピューターウィルスを使ったサイバー攻撃にも

対応できる、世界でトップのスーパー・コンピューター兼人工知能だ。アメリカが攻めてきても、少なくとも十年は持ちこたえる程のものだ。

それが、たった5分で破られた

周りがザワザワと声を立てる。

「嘘だろ……」「たった5分！？」「そんなバカな事が！」

などと言っている。

「監視カメラに辛うじて映つてゐる事から見ると、敵はたった6人。だが、これは全て、『HUMAN』所属の能力者と思われる。

その能力者は、現在このビルに向かつて来ている。

目的は分からないが、戦う事は免れないだろう。

そこで、指示をする！

突撃隊隊長代理、飛驒燃故！

今から敵と接触し、目的を探る、敵の能力の判別を任務とする！

支援隊隊長代理、佐屋明！

突撃隊の支援、及び万が一、敵から攻撃を受けた場合の対処を任務とする！

処理隊は、万が一戦闘を始めた場合のみ、敵を殲滅する任務とする！

そして、Sクラス能力者で固められた、今回出来た総隊長直属特別部隊は

部隊は

後、私が指示をする。

以上だ！ 行動に移れっ！

『了解！』

殆どの部隊員の掛け声が響いた後、どんどん人が少くなり、遂には俺達のみとなつた。

「なあ、紫が部隊長だったのに、明に任せてよかつたのか？」

「大丈夫よ。あの子は部下には信用されてるし、実力もあるから」

「そうか」

すると総隊長が近づいてきた。

「では、君達にも特別任務を遂行してもらいます」

総隊長が任務内容を伝えようとしたその時。

真つ赤な砲撃が、会合場所の建物の半分をそのまま削った。比喩ではない。

なにかが分からぬ物質で構成された粒子の砲撃は、会合場所の建物の半分をそのまま消し飛ばしたのだ。しかし、まだ辛うじてバランスがある建物。

俺達は起こつた事に驚き、そして本能的に恐怖した。

その時、その場所を去つていれば良かつたのだが、見えたのだ。建物の外の地獄が。

建物が半分削られた事により、外が丸見えの展望台になつた。そこに広がつていた景色は、地獄絵図だつた。

部隊が丁度出た時には、既に遅かつた。

さつきの砲撃もそうだが、それが無くとも、部隊の殆どが壊滅状態だつた。

まだ肉眼で微かに能力を使って抵抗する者も見えたが、すぐにその閃光は止む。

誰が生きているか分からぬ状況で、死体かどうか分からぬモノを踏みつけながら歩いてくる6人。

その服は、普通の人が着るような、まるでここに遊びに来ているとも言いたいようなものだつた。

高校生ぐらいの少年が一人、小学生ぐらいの少年が一人、高校生ぐらいの少女が一人に、女性が二人。肉眼で微かに見えた。

その中にも、知つてゐる顔がいた。

「あれは！ アインス！？ それにドライも！」

そう、前に倒したはずのアインスや、瓦礫で行方不明になつていたドライがいた。

ということは、残りの4人もやはり

「ホムンクルスですか……」

「総隊長さん。どうすれば！　ホムンクルスが6人なんて！」

「落ち着きなさい。既に民間人は地下シェルターに収容すみですし、やはりやつらの狙いは我々と、『Junction』の壊滅、ですか」

総隊長さんはフウ、と溜め息をついて、言つ。

「……あなた達では6人のホムンクルスを同時に一対一で相手するのは難しい。

私が行きます」

「！　そんな！　いくら総隊長さんが強くても、相手があの6人では！」

何か良い手があるはずです！」

「いえこれ以上待つ時間はありませんし、そんな手は思いつかないでしよう。

だから、これは私が行くしかないんですよ。

私の能力は制限が激しいですが、上手くすれば相手を丸ごと消すことができる。

これしか手は無いんです。

もし私が負けたとしても、決して諦めはいけませんよ。

だから、少なくとも1人は消します」

「…………」

総隊長さんがビルの断面の所に歩いていく。

俺達はそれを黙つてみている事しかできなかつた。
今はただ、総隊長さんを信じる事しか……。

「無駄零、その必要はありませんよ」

沈黙に響く一言。

そしてその言葉と共に、総隊長は切り刻まれた。

何が起つたかを理解する前に、総隊長はビルの断面から落ちた。

「や……そんな！ 総隊長さんーー？」

俺は後ろを振り向く。そこに届く声の主に聞く。

「なぜだ！ なぜそんな事をした！」

「何故つて、分かるでしょ？」

疑問に思わなかつたんですか？ 番号。0～7まである中で、2だけ無い。

そして、意味も無く隠す能力。

更に、何の攻撃も無く突破された防御システム

「まさか、お前が情報を……」

「フフ、そうですよ。私はツヴァイ。正式名称『H.C - R2』」

俺の向いた先にいる奴を睨んだ。
そう。自分のことをツヴァイと名乗つた、
ハイト・クラウドだったものを。

第二十七話 絶望の正体（後書き）

遂に出ました！

ツヴァイ！

二番です！ 分かってる人も居たと思いますがハイトです。

何か変な点があつたら教えてください。

第三十八話 死（前書き）

どこかの打ち切りアニメのように、
作者でもムカツク程の終わり方です。

第三十八話 死

「嘘……」

「ハイト……お前が……ツヴァイ？」

「そうですよ。何回も言わせないで下さい。
私は『HC-R2』です。『HUMAN』の人造人間ホムンクルス
です」

ハイト、いや、ツヴァイはいつも飄々とした感じで受け答える。

「……総隊長の無駄は厄介な能力でしたが、さすがに不意打ちでは
どうしようも無かつたようですね。
あいつはもう死にましたよ」

「ツヴァイ！ テメエ！ ゆるさねえ！」

聊爾が飛び掛るが、その攻撃がツヴァイに当たる前に、聊爾が地面
に落とされる。

「がつーー？」

そこには、聊爾の頭を地面に押さえつけたドライがいた。
よく見るといつの間にか周りがホムンクルスに囲まれている。

「……やるしかないか。聊爾！ 境界を使えー！」

「ああー！」

聊爾は裂け目から自分だけ一いつちうに移動した。

ドライは体勢を元に戻す。

「皆！ 絶対今此処で倒すぞ！」

「ああ！」

「うん！」

「アイの為なら！」

「任せな！」

その時、一陣の風が吹いた。

その元には、ツヴァイが静かに立つて、一いつちうを向いている。

「まったく、人の実力さえ理解できないのですか。哀れですね」

その瞬間、血が舞つた。

「あぐうっ！」

人の倒れる音。

後ろを振り向くと、バラバラになつた岩石の盾の中で、不知火は服が切れ、体中血まみれになつて倒れていた。

「不知火！ ツヴァイ、何しやがつた！」

聊爾が不知火を抱きかかえ叫ぶ。

「五月蠅い羽虫が騒ぐなよ」

フィーアが凶悪な笑いを浮かべ、聊爾がそれに激昂した。

「んだとー！ これでも、食らえー！」

フィーアの周りに境界の分かれ目が無数に開いていく。
しかしフィーアはそれを見て、どんどん笑いを深くする。
本能が悟った。攻撃してはいけない。

相手は圧倒的な『ナニカ』を持っている。

俺は咄嗟に聊爾を止めようとした。

「聊爾！ 止めつ……」

「死ねええええ！」

聊爾が小さい境界で囲んだ場所がどんどん陽炎の様に揺らいでいく。
そして、次の瞬間、巨大な閃光と衝撃波が、轟音と共に俺達を襲つた。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハハハハハハハハ！ やつたぞ！」

聊爾が我を忘れて叫ぶ。

しかし俺には見えていた。煙の中で佇む影を。

「チツ、まつたぐさあ、」の服お気に入りなんだけどや、ビハビト
くれんだよ！」

そこには、服が一部だけ破れた、無傷のフイーアが立っていた。

「まつたぐさ、羽虫は黙つてなつて」

そう言いながら、フイーアは、驚愕でいる聊爾に一步で近づき、手
を触れる。

「ツ！ 聊爾！ 離れ、もう遅いよ」「…」

その瞬間、じりりにも聞こえる音で、濁つた音が聞こえた。
その音は、まるでマンガでしか聞かないような……
そり、骨が折れる時のものだつた……。

「ぐつあ、あ、あああああ！ ああああー、何だよこれ！ テ
メ工何、黙れつつてんだよ」
ぎやああ！ うぐー、ああー、ちくしょー、がああー！」

次々に聊爾の体から聞こえるボキボキという生々しい音。
そしてフイーアが聊爾から手を離した時にはもう、聊爾の体は至る
所が内出血で青黒く変色し、

腹からは白い、『肋骨』が突き出ていた。

そして聊爾は、ピクリとも動かず、目を開けたまま意識を失つてい
た。

「まつたぐよ。フイーア。てめえいつも殺し方工グくて、飯が不味
くなんだよ。

この悪趣味女！ 性悪女！」

「うるさいアインスー、まつたくー。」

「…………さねえ」

「あ？ なんだよ御神い」

「ゆるさねえって言つてんだよー。」

能力集中。目標アインス。

対象風。

「いぐぞー。」

その瞬間、俺の左手から吹く風。台風竜巻より強い風がアインスを襲う。

しかし、アインスはその場に留まって言つ。

「へーー、やっぱお前が一番手応えあるなあー。」

「ほぞけー。」

「こいつらの意表をつくには丁度いい。」

俺はアインスに気付かれないよう右手の機械を操作する。そして、一つのボタンを押す。

その瞬間、俺の右肩の付け根から、高出力の炎が出て、それを推進力とし、

俺の体がアインスに近づいていく。

その速度は俺が風で飛ぶより何倍も速かつた。

「行くぞ！ これでも食らえ！」

俺はそのまま、一瞬でアインスの懷に詰め寄り、鳩尾に機械の拳を思い切りぶつけた。

その瞬間、背中の炎は止まる。

「グハッ！ てめえ…………」

「お前が、黙れよ」

能力が使える左手で、アインスの頭を掴む。

次の瞬間アインスの頭蓋骨はバラバラに砕けちり、桃色の脳が姿を表した。

俺は脳を銃で撃ち碎き、文字通り脳死したアインスをそのまま地面に叩きつけ、後ろを振り向く。

「ダメっ！ アイ！ 後ろ！」

その時、紫がこちらに叫んだ。

調子に乗っていた？ そんな事ないはずなのにな。

その瞬間は、時がゆっくり感じられた。

「じゃあね

声が聞こえる。

これは、ホムンクルス？
誰かは知らない。ツヴァイかもしれないしドライかも。
いや、フィーアかもしれないし、フュンフやゼクス、ズイーベンかもしれない。

でも分からなかつた。

再生を施す時間さえ与えてくれなかつた。

やはり、あの時感じた『恐怖』から逃げれば良かつたのか？
あの絶対的な力から？

声が聞こえる。

ホムンクルスは、目的が済んだとか言つてる。
紫と琴雪は、ひらひらに走つてきながら何か言つてる。けど聞こえない。

多分、紫と琴雪は無事に済むだろう。

でも俺は。

はは、走馬灯とかつて、見えないもんだな、本当に死ぬときつて。

そして俺は、黒い炎に包まれ、意識を落とした。

そして御神哀の、この世界での生存が抹消され、終わった。

ホムンクルス襲撃事件といつ名の虐殺は、

死者314人。

重傷者168人。

『HEAVEN』防御システム、最普及不可能。

日本本部の『UnionInstall』のビルの半壊。

総隊長無駄零の死体は、瓦礫を掘つても掘つても見つからんらしい。

これほどまでの害を出し、

そして

第三十八話 死（後書き）

まだつづく！

続きがあるはずだ！

これはバッドエンドではない！

新たな物語の始まりだ！

この、一真駄作（死んだ策）を読んでくれた人。

まだ続く気がします！ それを待つてください！

まだプロット作り中のような帰がするけどそうでもない？

本当に終わり方がアレだったけど、感想に誹謗中傷書かないでください。

私はそういう罵詈雑言に弱い体质で、友達に「冗談でも悪口言われるとテンションがガタ落ちして首吊りたくなつてくるんです。

では、今まで見てくれ続けた皆様。

どうもありがとうございました。続編をお待ちください。

裏設定・ハイトの能力名『空刃切断フラッターエッジ

ここでアンケート！

続編に参考にさせていただきます。

こんな感じがいいな！ というものを選んで、感想などのとこに書いちやつて下さい！ ちゃんとした感想も書いてくれるとなお嬉しい

いです。

- 一、ジャンルかわってファンタジーな異世界トリップする。
 - 二、超能力あり異世界にトリップする。
 - 三、月日が経つた元の世界で、実は死んでなかつた宣言。
 - 四、キャラは同じだけど、皆御神を知らない並行世界トリップ。
- その他、何かあつたら書いてください。アイデアじゃなくていいですよ。
- ・すみません。上の質問はとつぐに打ち切つてたのですが、間違えてまだ感想で書いてくれた人が居て気付きました。間違つて感想に投票してくれた方、すみませんでした。どうかこれからも、『までりあるしつへす』をお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2600m/>

In The Material ?

2011年1月8日09時14分発行